

國全權等の意を歸する事と思ハる

此節外國全權等の役所にて専ら會議せる所之右に記載したる開港の一件にして其論二様あり其一ハ方今日本に其大成  
差支あり餘儀なく開港する事能とざるを察し期年まで穩に猶豫を成せざる又一ハ我等一時も早く開港を希望するが  
故に談判之模様依てハ海陸兩軍の兵勢に據て之を速に決せしむ可き歟の論にして最緊の事件なれば未タ何れとも評  
決せざるあり

英國政府ハ日本の交際貿易諸件に付て其國より許多貴重の官人を初メ其他附屬の人々を送り越し是を拂取らせんと欲  
それとも唯永く滯留せるのミよて更ニ其儀も思ふ儘に行届らざる故に甚タ不快と思へる様子あり  
日本在留外國の諸商人ハ常ニ兵庫の開港を渴望せんと雖も彌日本よて其港を開くに於てハ如何程節儉を爲すとも相應の  
費用掛るへけれハ最早今より其失費を恐れ氣遣へるあるへし

七月十九日幕府毛利淡路吉川監物上坂の隨行者及び宿所取締等につき藝藩其他に達する所あり

〔慶應元五年の風聞書〕

七月十九日

於大坂表松平安藝守家來に御渡之御書付

松 平 安 藝 守

毛利淡路吉川監物兩人旅中召連候家來着坂之節者外供之分兵庫に殘置内供之分西之宮に殘し置同所を淡路監物兩人召  
連可申右之内供召連度旨兩人申出候ハ、姓名書爲出淡路監物同様召連可申兩所に殘し置候家來滯留中之夫々御賄被下  
答ニ候尤猥ニ他出等之勿論諸事相愼懇勸ニ御沙汰相待候様可被申連候  
右之趣旅中護送之家來に相違不取締之儀無之様可被致候

七月

松 平 安 藝 守

毛利淡路吉川監物旅宿之儀之生玉中寺町圓通寺に相違置候間兩人着坂候ハ、直ニ同所に召連警衛可被致候右旅宿取締  
として御目付支配向井大坂町奉行組與力同心晝夜爲詰切候間諸事承合不取締無之様内外可被心附候尤兩人在坂中之都  
而御賄被下候間其段相違置候様可被致候委細之儀之御進發掛り大目附御目付に可被承合候

七月

於同所松平讚岐守榊原式部大輔家來に御渡之御書付

松 平 讚 岐 守

西之宮滯留毛利淡路吉川監物兩人家來不取締之儀無之様出張之家來人數ニ而心附候様可被致候

榊 原 式 部 大 輔

兵庫右同文書

七月

御 先 手

同斷旅宿廻り警衛被仰付之

西 本 願 寺

毛利淡路吉川監物兩人評席

右之通相違候間可被得其意候事

七月

陸軍奉行  
御持頭

毛利淡路吉川監物兩人滯坂中圓通寺警衛被仰付之

戸 田 采 女 正  
内 藤 志 摩 守  
松 平 彈 正 忠  
内 藤 志 摩 守

〔慶應元乙丑年尊攘録探索書〕

慶 應 元 年

七月  
 毛利淡路吉川監物着坂御岡  
 御目付介 榑原式部大輔  
 兵庫 建部 徳次郎  
 同 西宮 同 紀伊 殿  
 松平式部大輔 同 阿部 進太郎  
 朽木 龜六 同 小堀 大學  
 右兩家族宿前以達生魂寺町圓通寺  
 右七月廿日出之書狀ニ未着無之由尤近々と申事ニ候

〔林新九郎日記〕

同(七)廿三日朝飯佐野と青地に參り藝州に御封書兩家供人御取締之儀也佐野へ遺ス

七月廿一日閣老水野忠精は會津藩士に對し英人の宿寺として泉岳寺貸渡及び長州砲發事件の償金拂渡に關する質問に答ふ

〔尊攘録探索書〕

慶應元乙丑年 開取(七月三十日附益田勇 森井惣四郎の提出)

一當月廿一日會津藩柏崎才一林三郎水野閣老に罷用人富岡平角に内分相伺候ニ之近來公邊に英夷に泉岳寺御借渡ニ相成且昨年外夷を長州が討候償金貳百万ドル同英國に御渡ニ相成候趣承候處實以有之候事ニ御座候哉と相伺候處同人之返答ニ之右等之事件何とも承不申定まし下々之風評にて可有之と答候由然處閣老無程御下城ニ相成候ニ付平角が閣老に相伺吳候由頼入直ニ相伺候處閣老之御返答ニ之右兩條共ニ實事ニ而御座候償金之儀之既ニ昨年及決議阿部豐後守昨年上京之節一橋公に奉伺候處同公も御同意にて御座候得共只今迄延引致居候儀にて今日俄ニ相渡候譯にて之無御座候

將又泉岳寺之儀之安藤對馬守在勤之節江戸地内に應接場借渡可申段既ニ約定相決居候處其後打止居候然處此度渡來之英國ミニストル先年定約之通江戸内之地拜借被仰付度申出再三相斷候得共聞入不申直ニ大坂に罷越之勢有之候ニ付大樹公御歸城迄相待吳候様論候得共總て聞入不申候様大坂に罷越御直ニ御返答可奉伺と彼等申出候ニ付只今長州御所置御心配被遊候折柄猶又被等罷越及強談候而之内外ニ事變を生し如何相成可申も難計御座候ニ付不得已當地にて泉岳寺借渡相成可申旨及返答置申候まらし實以泉岳寺借渡不申様致答ニ御座候此度彼が強談を致候譯之英夷長州と相通候事發覺致樹公御歸城之上之猶及談判決して泉岳寺借渡不申様致答ニ御座候間彼が定約を押し立候ニ付先其事を穩に致置候而長州一條にて十分勝を取り只今迄之應接之毎も負候事耳ニ御座候故已後之是が彼之非を打決して負を取らざる様ニ致答ニて御座候と御返答御座候由右談判中會津兩人が申上候ニ之此節自然泉岳寺御借渡ニ相成候ハ、肥後土州久留米之正義之三藩も連も關東之是迄ニ而如何相成申候も難計と大ニ力を落し歎息仕居候と申上候處閣老が之御答ニ之前文之通實以借渡可申儀ニ無御座候間決して力を落し不申様辯解いたし吳候様と兩人に御頼ニ相成將又三藩之面々之自然氣付候事件又之疑惑之筋有之候ハ、何とても罷出無遠慮話し致候様と只今迄無之旨キ御返答にて爲有之由ニ御座候  
 前條英夷長州と相通居候事發覺いたし候之日本人長崎にて英夷之また建るひと相成長州之國產同人が取次居候處其者長崎にて被召捕大坂に當時罷在候由長崎ニ而之不容易事余有之候儀下使白狀ニ而相顯レ候由ニ御座候右下使英方四百金一ヶ年之給金を取り長州も同様にて爲有之由ニ御座候(下略以下は七月廿六日の條に出つ)

七月廿二日一橋慶喜大坂に下る

〔大坂返達御用狀扣〕

文久三年四月以來 八月朔日 同六日着

慶應元年

青地佐野河口より

(前略)

一橋中納言様先月廿二日御下坂ニ付翌廿三日亥一郎參上伺動仕候處何之御障茂無御座廿二日夕七時頃被成御下坂候由御取次衆被申聞候

七月廿五日幕府は萬石以下知行取の者に對し征長につき來月十日迄に兵賦を出すべきを命ず

〔尊攘錄皇武令〕

七月廿五日周防守様御渡

兼而相觸置候通万石以下知行取之而々兵賦差出此度防長御征伐ニ付而茂御用ニ相成候事ニ候然處未御定通不差出向茂有之又之病兵代り之者延着或者知行所人別少ニ而代ニ可差出者無之旨申立遲延ニ及候向茂有之候當節御用も有之折柄ニ付聊無遲滞早々可指出若知行所人別少ニ而差出方差支候儀ニ候ハ、今抱人ニ而も不苦候間身體強壯之者相撰來月十日迄ニ指出候様可被致候此上等閑置候輩茂有之候ハ、急度御沙汰之品も可有之候  
右之趣万石以下之向々には不洩様早々可被達候

七月

七月廿六日松平左兵衛督上野矢野主横濱に金銀座設置のことを會藩士に語る

〔尊攘錄探索書〕

一當月廿六日會津林三郎松平左兵衛督様に罷出候處同公之御話ニ之此度横濱に金銀座造之坐出來ニ相成筈ニて御座候昨年佛國に器械傳習ニ被差立候も又横濱に製鐵所御取立皆金銀之坐横濱に御取立ニ相成候譯ニて御座候只今迄日本ニ而之一ヶ月金銀兩坐ニて六万計鑄造ニ相成候得共此節西洋之方ニて相始り候ハ、大概毎月七拾万金位之出來可仕右御取

懸り當十月比方之御始メニ相成可申公邊御逼迫ニ之御座候得共比迄御取積ニ相成候ハ、何之御差支も無御座長州之御所置も可有御座自然攝州兵庫御開港ニ相成候ハ、大坂にも金銀兩坐御始メニ相成候ハ、日本金銀之不足決して無之と御話有之候由林三郎之金銀之權自然と外國に執らま候處ニ御氣付なく左兵衛様御議論御座候を歎息いたし話仕申候  
七月三十日  
益 田 勇  
森 井 惣 四 郎

七月廿九日小倉派遣の本藩物頭等は同地に着警衛場受取等の件を藩政府に報告す

〔長州再征帳〕

小倉表方雇飛脚差立一筆申達候然私共儀御地追々ニ致出立候處善右衛門(渡)儀は去ル十二日左助(中村)儀ハ同十七日彌平左衛門(武)儀は同廿三日小倉表に致着候  
一善右衛門出立之節山鹿迄被差越候塚原但馬守様に御家老業方之文箱一善右衛門着即日届上御落手ニ相成申候  
一右同小倉御家老中之文箱一是又同様即日相届返書差出候間則差出申候  
一此許御警衛場所之儀但馬守様より別紙之通被仰出候間小倉御役方に懸合申候處平松口外引渡申候右ニ付菜園場村と申所ニ宿所引渡ニ相成致止宿居申候  
惣躰私共着後何事も承り不申無事之様子ニ御座候以上

七月廿九日

御奉行衆中

別紙

固場所之儀者平松口内外並大里二ヶ所之内と可被相心得且又近傍晝夜巡邏いたし候様可被心得候猶模様ニより外場所

慶應元年

警衛之儀申達候儀可有之候尤右ニテ所之内ハ小笠原左京大夫家來に委細可被談候

七月廿九日在小倉本藩歩小姓中尾万助等は小倉平松口内警衛を命せられたる諸藩出兵の状況を報告す

〔長州再征帳〕

(七月廿九日歩小姓中尾万助磯谷少右衛門報告)

覺

久留米物頭	府内物頭
平松口内固	増田茂太夫
下坂五郎兵衛	組共
人数四十八人	組共
杵築物頭	人数二十五人
淺井主殿	柳川物頭
宮部春三郎	岡田右門
足輕共	組共
人数三拾七人	人数貳拾三人

右之通當時諸藩參居申候處久留米様に者大小笠ヲ猶御人数差出相成候様御沙汰ニ相成候付貳百人計御差出ニ相成候様子ニ承り申候柳川様に茂右同様御沙汰ニ相成申候付是又貳百人計參候様子ニ承り申候杵築府内柳川之未々固場所被仰付無御座候以上

七月

八月三日

右二通小倉に被差越置候歩御小姓ハ差越候由ニ而御歩頭ハ指出ニ相成候段演舌を添柏木殿<sup>御奉行也</sup>被相渡候事

八月三日日本藩秋吉久左衛門太宰府に於ける三條實美等の動靜筑藩政變の概況を其上司に報告す

〔尊攘録五卿一件帳〕

太宰府表聞取書(抄) 丑八月

- 一 宰府表當時相持り候儀も無之五卿身附之者も格別勢イ強様子ニ茂無御座土州脱藩土方楠左衛門當三月末ハ長州に參居候哉ニ而閏五月下旬ニ罷歸候後取縮向一統格別ニ示方<sup>ハ</sup>其後之極忍々ニ大町内登樓茂仕候様子ニ見聞仕候
- 一 五卿遊歩茂格別無之三條様六月廿六日ニ湯町に湯治御座候處尙又廿七日ハ湯治ニ相成七月二日迄滞留ニ相成候由
- 一 横井半右衛門列宰府引拂候後之五卿附之者<sup>ハ</sup>頼少キ様子ニ而其後ハ專断にたより候由
- 一 五卿方手元金余計ニ溜り申候由ニ而宰府に銀細工人を呼寄太刀長刀拵ニ相成來年中ニ茂<sup>ハ</sup>應せ不申<sup>ハ</sup>細細工人咄之由御謹心中ニ之々様之物御拵ニ之及中間敷をの<sup>ハ</sup>宰府一社中之説右同人<sup>ハ</sup>承り申候

筑前宰相様御直達之寫

此節公武眞之御和合御整<sup>レ</sup>成候段ニ 皇國永久御安全之基ニ無此上至極恐悅奉存候然之近年諸國之休勢ニ依浮説流言難言之説不少人心不和乘之分外之儀申立候者を皇國之御爲<sup>ト</sup>相心得同氣相集黨を結候等ニ至或之密ニ他藩に通主命を蔑ニ致我意主張し又ハ流言を以衆人を驚怖可致候段以之外ニ存候我等不肖ニ候得共 御兩公様御規則を守公平正大之國政を以執行候ニ付右様之輩於有之<sup>ト</sup>無用捨嚴重ニ可申付此段爲相心得組中入念教導可致事

一 筑藩六月半比<sup>ハ</sup>一體打替り諸役人激徒加藤司書列幽閉一族預ケ放役等被 仰付大跡正儀派ニ一變<sup>ハ</sup>たし五卿守衛掛り役人激徒之面々悉ク引替り被 仰付云々

慶應元年

一筑藩右様打替り候所ニ而之激徒之内茂五卿方に心を寄せ可申族茂定而可有之風聞有之若五卿方に相通候得之五卿附  
 茂又々勢イ付可申正議之筑藩氣遣いたし候由承り申候  
 一七月上旬福岡表長安寺に激徒七拾人計参り衆議いたし候處へ此面々茂悉ク押込被 仰付候由未タ名前相分り不申候  
 一五卿身附に何方之脱藩人職八月二日比方少々相増申候由風聞いたし土脱米脱之下宿貳軒ニ而納り居候處當時四軒ニ相  
 成候處を不審相起り申候由  
 一筑藩北岡勇平六月廿日比方宰府に守衛用向ニ而参り相滞同廿五日ニ福岡を罷歸り申候其夜勇平宅に忍入蚊帳四方を切  
 落暗殺いたし勇平妻茂少々手紙を負申候由其後專御吟味有之候得共今ニ相知を不申見込之加藤司書列之激徒ニ御不審  
 も有之候由追々ニ御まらへニ相成可申段承り申候  
 一筑藩今度從公義御達之趣ニ付而守衛人數増ニ相成大頭一人鉄炮貳拾挺頭貳人組共ニ八月三日四日兩日ニ宰府に着いた  
 し申候此節大砲貳挺福岡を被差越候由承り申候  
 一薩藩星山矢之助有馬英之助六月上旬方對州に渡海いたし居候處八月二日ニ宰府に歸着仕候ニ付有馬英之助に面會對州  
 之様子承り候處對藩茂正儀派と暴論派と説貳ツニ別を居候ニ就而惑亂いたし御家老勝井五八郎新孫一郎兩人暴論派之  
 巨魁ニ而役權を震不同意之者ハ悉罪ニ覆せ切服又之軒首中付去冬以來常夏迄凡貳百人余殺申候由然ニ當五月勝井五八  
 郎を暗殺いたし新孫一郎之田舎ニ蟄居被 仰付是ニ依而藩中一統穩ニ相成候由右同人方聞取申候  
 一米脱井上善三郎變名幡島三郎四條殿家來櫛田速男四月比より對州に渡海いたし候處七月七日ニ宰府に歸着仕何之爲ニ  
 渡海いたし居候哉探索仕候得共分兼申候  
 一薩藩七月廿三日比交代相濟番頭伊集院伊織物頭肥後直次郎高田平次郎馬廻六人醫師一人都合上下六拾五人番頭之此度  
 初而相詰申候今度從 公義御達之趣ニ付而增人數も有之候哉肥前藩新江與平より薩藩に相尋申候處人數増之致不申  
 此上人數を増申候而ハ五卿方に響き却而害ニも相成可申職も難計先此儘ニ而押移可申と返答之由新江より承り申候

一米藩植植傳八に右同様ニ付人數増之儀問合申候處國許に通議いたし候得共急ニ增人數差越候様様茂無之段返答ニ御座  
 候

一八月三日五卿所持之小筒貳拾三挺程火通之儀頼ニ付福岡表より炮術役兩人罷越内山と申所ニ而明四日打方いたし候答  
 尤雨天之節之日送り之由筑前引合參候ニ付寶滿宮參詣ニ託シ内山に行見聞仕候様津野田儀左衛門列に申談置候  
 右之通御達仕候以上

丑八月

秋吉久左衛門

八月三日日本藩河方半四郎の大砲隊宰判を免す

〔機密間日記〕

八月三日

口上之覺

私儀大砲隊宰判被仰付置候處不吞込之儀御座候付乍恐右宰判断斷申上度奉願候以上

慶應元年七月

河方半四郎

尾藤 金左衛門 殿

其方組河方半四郎儀大砲隊宰判被仰付置候處内意之趣ニ付被遊御免候條此段可被達候以上

八月三日

奉行所

尾藤 金左衛門 殿

八月四日我藩偵吏去る六月長藩より詰問書を受領し小倉藩の返答に窮せる状を報ずる者あり

〔慶應元乙丑年ノ風聞書〕

慶應元年

八月四日  
上方内探

六月下旬長州家老毛利筑前志道安房毛利出雲より小倉家之家老名宛之來書にて今般御再征之儀如何之御趣意ニ候哉於長藩解しかたく候ニ付宇和島家に及内聞候處右は横濱外國奉行柴田日向守殿蘭人ト應接之事有之御再征之義ニ被及候趣ニ有之歟之山心添ニ付折柄馬關滯船之蘭船コンシユルに及應接承合候處右は全く小倉藩が長州之事情追々達公聽候儀ニ付而之御再征ニ可有之則横濱ニおゐて外國奉行應接之趣小倉家之書面も及一見候趣コンシユル之答ニ有之右事件無相違ニおゐてハ已來之所置心得方も有之候間實否問合ニ及候趣之文言ニ付小倉藩ニおゐて全く長州之事情を訴候而御再征之儀等言上之事は努々無之候間長藩に返答振如何可仕哉之旨重臣小笠原甲斐登坂之上御城内に伺出候處聞老方公用人中を以彼是御諭之儀を從來小倉家之盡忠之儀を公邊ニおゐても思召宜敷候折柄右様之儀遮而伺在而は爲筋宜しからざる哉との御利解之趣且は小倉藩之儀は何分横濱ニ而蘭人と外國奉行應接之手續御書類御内々御下ケ不被成候而は長州に返答之廉不立難儀之趣及歎願候處其後囑問老衆御互ニ甲斐に御逢之上猶亦御利解之趣意種々有之候得とも詮る處横濱ニおゐて御應接書面等御下渡之儀は不至露味之御諭しニ付小倉藩ニても慥歎罷在候由(下略)

八月四日

八月五日幕府長州藩銀主大坂島屋又左衛門並に毛利藏方小前等より贖罪金過料等を徴收せし旨を報ずる者あり

慶應元年  
〔風聞書〕

大坂より來狀之内

一大坂島屋又左衛門之長州銀主昨七月京亂妨之節御仕送り金一件ニ付今以御叱被仰付置候處此度同人に御逢ニは長州よ

り預金貳萬兩公邊に御取上ケ早々上納被仰付外ニ貳萬兩御川金被仰付都合四萬兩御受取濟ニ而御叱免ニ相成候  
一大坂ニ而毛利藏方小前之者に昨年藏屋敷立除之節壹人金五兩ツ、長州御留守居より被下候由ニ而此度公邊方御取上ケ外ニ過料一人ニ付三貫文ツ、被仰付候  
一下々ニ而沙汰ニ之當月八日迄ニ御兩家御出坂無御座候節は一橋様御名代播州姫路迄御下りと申風聞ニ御座候右等ニ付日々米共外高直ニ相成申候云々

八月五日

八月五日江戸麻布今井谷及び高輪二本榎毛利淡路の屋敷沒收を了す

慶應元年  
〔風聞書〕

八月五日

伯耆守宅勝手に秋元但馬守方差出候届

麻布今井谷並高輪二本榎毛利淡路土地兼而被仰付置候處今日其筋に家來之者方引渡右土地之内勝光院家作御座候地並通路道且長屋二棟土藏壹ヶ所當分拜借被仰付候ニ付其筋の家來之者に引渡受取申候勝光院儀同所に爲相住候ニ付追而爲引移申候此段御届申上候以上

八月五日

秋元但馬守

八月七日伊達宗城書を長岡護美に贈り時局に關する意見を述べて質問する所あり

〔子爵長岡家文書〕

秋暑未退之候愈御康勝御揃奉拝賀候前後ハ要事無之契調申候故寸楮拜呈近情伺度候如例左陳

大樹公今以御滞阪ニ而徳山岩國爲御尋問御召寄之由兩人不日ニハ出可申哉ニ存候存外諸事遲滯失望仕候此末皇武御合

慶應元年

議英斷注日仕候橋公も過日一封被遣候處頗御焦慮之趣候得共粗着眼ハ付候模様察候得とも難解奉存候賢兄京阪兩地之内へ御出懸ハ如何最早可然弄鑑杯ハ更ニ目的も無御座候尙何度候

○在筑五脱も甚難心得儀ニ御座候様存候處先日改而五藩ニ被仰渡候故近日ハ遊歩杯も無之警衛筋御座候や

○幕より佐賀へ對州處置之儀被仰付候處意外之儀さぞノ閉口と相察候如何取計候哉容子被仰下度

○大芋依然御書通御座候哉不相替儀候や先頃小松杯急ニ歸國故何事歟生候半と存候處遊幕疑候趣尤大鳥杯五脱入京之儀取持之含ニ而ハ上京之都合旁ニ而歸國爲申由全體吉之助之見込も不可解且京攝邊ニ而之薩國內甚不靜謐と巷説有之由右ハ捕風之話ニ心得候へとも御察奉希候

○貴國近來彌富國強兵御國産御開と奉存候土州杯も大ニ此頃ハ狼兄發憤委任ニテ御世話之様子ニ申來候先日ハ同國行兩士も無滞御用向相辨候儀と存候尤爾後狼兄側向之者參候而委曲傳承仕候疾ク歸國四州之光景直奏と存候扱又先鴻陳述之時ハ秋收甚不安心ト存候處其後快晴殘炎相催候間大ニ出來立宜相成降心仕候乍末華國者尙更豐熟と奉大賀候

於崎陽英人砲術直傳習相始候由貴國よりも修業人被遣候や如何先者右等緊要申述度草々頓首

仲秋初七

弄

鐵

長良賢臺侍史

二仲時下御自愛專念乍末兩兄君ニモ可然所希候僕瓦全乍憚御放念可被下候不備

八月某日我藩太宰府詰津野田儀左衛門等は長藩使節野村範輔等の來宰、筑藩其他の宰府詰増員に關する態度等を在藩の上司に報告す

〔尊攘錄五卿一件帳〕

覺

一 萩表之使節野村範輔列上下八人當月朔日當所に着仕候處同六日ニ惣而爰許發足いたし逗留中兩度拜謁いたし候へ共趣向之一切相分不申着翌日三條様諸大夫森寺大和を旅宿に招人拂ニ而密談數刻ノおよひ候而金子百五拾兩程右範輔ハ相渡申候由

一去ル四日福岡表より大組番頭淺山彌右衛門并御物頭貳人組共着仕右者今度公邊より別段御取締之儀御達之趣ニ而被差出候との儀御坐候得共事實者近來筑藩ノ茂勤王之者二百人余茂幽閉被申付置候ニ付自然右之者共黨を結當所に罷越非常之取計いたし候儀も無心元との趣ニ而旁御番頭をも俄増詰ニ相成候由

一 公邊之御達向ニ付薩肥米ともに増詰之儀承繕申候處何方に茂増詰之模様一切相見不申此節福岡より御番頭等着いたし候間筑藩森戸新五郎より薩に相届候由之處只々安心之段まで返答仕候由佐賀藩清水良作杯に茂段々咄合申候處矢張此方様御同様之趣ニ而未タ一切國許ヲ通路無御坐山海相隔居候へ公邊より之御達筋國許に到着之程も難計併先日當藩より御達書持參ニ相成段々懸合等御坐候末ニ付其儘打拾置候儀ハ如何敷依而此上猶當藩に御依頼ニ相成候而者何程御坐候哉自然此方様御決議も相達候ハ、何卒ニらせ吳候様願曰御同様ニ右御坐度との趣ニ御坐候右之口上振を以勘考仕候得之何様御依頼之儀御相談を以一同ニ仕度との様子ニ相見申候

一 先月初之比三條様口取之者壹人金子八拾兩は盜取大町駿河屋と申所之酌女を連レ出シ箱崎より出帆いたし候處中ノ關ニ而押捕直ニ森寺大和ニ引渡ニ相成候處暫福岡表ニ御預ニ相成度旨頼談ニ付圍に被入置候處其後福岡表ノおゐて死刑ニ相行吳候様との頼ニ相成候得共當時御憤内と云彼是ニ而一先京都に相伺候上如何様共相計可申段申向ニ相成候處右様御手數ニ相成候而者心外ニ被存候ニ付猶此方に引渡吳候様との儀ニ付當所ニおゐて死刑等之儀者堅相斷去ル五日森寺に引渡ニ相成候處翌六日萩使節野村範助列歸國之砌長州に連越申候

一 當表應接役森戸新五郎杯に御人數増詰之儀よ所ながら咄合申候處當時之殊之外御靜謐ニ相見申候間御人數増方も急申間敷哉之趣ニ而格別増詰之好とも相見不申候

右之外去ル五日迄之事件者委細秋吉久左衛門に咄合置申候間同人より夫々御達可仕奉存候間差省右迄御達申上候以上

八月

津野 田儀 左衛門  
島 田 俊兵衛  
大塚 郁太郎  
佐藤 貞彦  
藤木 源左衛門  
井田 戸三郎

八月八日八幡山崎に壘壁關門船役所等を設く

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

(八月八日)

伊豆守殿御渡御書付寫

此度從京都大坂に之東西兩街道筋八幡山崎に壘壁關門船役所御建相成候間淀川通船陸地往來之者荷物等も相改候筈ニ付右川陸通行致し候者之姓名等相斷不作法無之様改を受可申旨家來末々之者にも不洩様可被申付置候  
右之趣万石以上以下之面々に不洩様可被相觸候

八月

八月九日德山家老福間式部岩國家老吉川采女廣島に到り毛利淡路吉川監物が直に幕府の召に應ずる能はざる所以を具狀す

〔慶應元乙丑年  
尊攘録探索書〕

一 筆奉啓上候秋冷之砌ニ御座候得とも益御機嫌能被遊御座恐悅奉存候然は長防之模様少々相分申候間奉言上候  
一 德山家老 福間 式部 上下四十人余

一 岩國家老 吉川 采女  
一 同用人 長新 兵衛

右兩人上下八十人余

右者當月九日藝州表に罷出口上之趣ニ之先達而方德山岩國御呼出ニ付罷出可申筈之處當時國元世帶向取締方最中其上兩人共病中ニ罷在候間何分只今罷出候儀御斷申上候尤病氣全快且國中鎮靜ニ趣候ハ、早速罷出可申段を以御斷申上候由左候而同十三日歸國

一 萩家老

穴 戸 備 前

上下七十人余

右之同十三日ニ藝州に罷出口上之趣右兩人御召出ニ付罷出可申筈之處病中其上兩人罷出候ハ、逆徒之内脱走京攝之間ニ罷越一昨年來之振舞いたし共仕候得之決而不相濟儀ニ付兩人出方之儀今暫御有免奉願との儀ニ御座候由左候而同十六日ニ歸國

右ニ付而藝州侯方御中老野村帶刀大坂に罷出申候由左候得ハ不遠跡之御所置も相分り可申歟と何をも相伺居申候由右ハ薩州藩藝州に探索ニ參居候者に京都詰替之物頭面會嘶之由御座候右薩州物頭ハ當月十八日ニ京都出立仕藝州にも立寄申候由當所滞在之薩藩園田彦左衛門土岐新兵衛列座ニ而承申候事

右之通御座候間御小姓頭業御奉行業に之御内達被成下置候様奉願上候尤只今御國方御便之歸御座候間右薩州方聞取候儘御内達申上候間實否之儀尙委細後便を以言上可仕候以上

慶應 元年



八月廿六日夜

藤本九兵衛  
石井新左衛門

仁田也 四郎左衛門様

津田也 山三郎様

御内儀 中様

尊下

慶應元年也

九月三日

右來簡安東彌太郎に御奉行中紙面を以返す

八月某日防長士民歎願書を藝藩に出して斡旋を請ふ

〔長防再征帳〕

謹上寡君父子癸丑甲寅已來人心不折合上已上元等之義種々此餘之禍變も不可測之儀と皇國之御爲深く不堪懸念遂ニ公武に建白をも仕辱くも微心微上件々不被爲捨置御採用ニも相成彌増勉勵人心を鼓舞し抛身命御奉公申上候覺悟有之候處不圖も去ル亥八月以來上京をも被爲差留候次第實以其由所を不知國之士民日夜悲泣罷在候然處血氣壯年之者慨嘆之餘自ら疑惑を生し乍恐從來之 微慮一定不拔之處尙寡君父子多年之心事哀訴歎願可仕ため追々國內を脱走し去秋に至り恐多も闕下近ニ罷出候者不少寡君父子不堪驚愕迅速鎮靜として益田右衛門介其外爲差登候處指揮不届よりして歎願之旨趣は通徹不仕却而妄動ニ至り 天幕にの忠敬も殆と燼滅之姿と相成東西藩邸をも被打毀官位等被召放との御沙汰も有之臣子之至情血泣慨歎之至不堪罷在候然處昨冬尾州老公御下向父子無他心事御洞見右衛門介其外萬事

御所置被爲在 御解散ニ相成依之寡君父子積年之誠意も天朝幕府にも明瞭徹上乍恐皇國大義名も分斷然相立退降僻壤ニ至る迄徹底仕り最早平常之 御沙汰有之歎と上下一統奉渴望居候處豈圖らん再征長との御事にて軍師浪華屯集 大樹公御上洛之由相聞國舉て何たる故を不覺甚以奉怨望候事ニ有之候右様の次第ニ付てハ國國之疑惑素より一朝一夕の事ニあらず日夜不堪憂悶候折柄今般徳山岩國ニ御尋之旨趣有之大阪へ罷登候様閣下より御知達被爲在候由ニ御座候處元來去秋京師變動よりして尼老公御下向夫々御處置被爲濟候儀ハ閣下においても既ニ詳く御傳承も可被爲在候事ニて其餘又候今般之 御沙汰被 仰出弓箭旌旗之間に御召出有之候ニ付てハ馬角之難責如何様の御取扱も難計と人心疑惑益増長臣子之至情彌切迫萬一も右兩家致登阪候様相成候てハ國內一統物議沸騰不可得止事に立至り可申候左候てハ奉對 天幕殊ニ奉恐入候次第且父子誠意も更ニ貫徹仕間敷と恐愕此事ニ奉存候伏願くハ皇國之御爲と隣交之情誼を以一片之微衷御垂憐を賜り前條之次第 天朝幕府に明瞭御辨解被成下候て速ニ邦土安堵之 御沙汰被仰出候様御盡力被成下度國舉て不堪切願之至誠恐誠惶稽顙首再拜

乙丑八月

防長士民

〔防長回天史〕

(前略) 宍戸備前亦七日(八)を以て山口を發し十二日を以て廣島に着し上城して陳情の旨趣(淡路監物上坂)を陳ふ(中略)是時に當り諸隊は益々激昂し防長士民の名を以て嘆願書を作り梅田三郎(石川小野村靖之助南木狂介吉田家祐中川文吾小野虎之允山田宇三郎森政茂三郎松本鼎三石光徳三郎等俱ニ宍戸備前に先づ國を出で、廣島に至りて之れを藝藩に致し既にして山口に歸り謹慎して越境の罪を待つ政府其心事を察し特に謹慎を免す

八月十一日在京郡夷則は朝議攘夷鎖港の處置は防長の鎮靜を待ちて而して後に行ふべきに決せし旨を藩政府に報告す

慶應元年

〔京郡自筆狀控〕

元治二年正月より  
以別紙申達候攘夷鎮港之儀付而之當地之近狀先便申進候通ニ而其後 朝議之御模様追々及探索候處御有職方之御見  
込異同有之未々御定論ニ至兼其上長防鎮靜迄之間者右之事件之御疊置と申所ニ御土臺駘と相据り候間今分ニ而之急ニ  
破綻之心遣ハ無之可被成御放念候此一件内輪委細之事情之近日葉宰慎助罷下候節篤と申含差立候筈ニ候間左様御含可  
被下候以上

八月十一日

郡

惣 連 名 充

猶々探索書三冊差越申候以上

八月十一日 日本藩江戸留守居は末家細川利永か千住宿の警備と共に佃島砲臺を管守するは其堪ふ  
る所にあらざるを以て二者其一を免せられん事を幕府に稟請す

〔江戸返達御用狀控〕

越中守末家細川若狭守儀先月十日佃島砲臺御預被仰付候處同人儀先達而中より千住宿勤番被仰付置人數差出置候付而  
者佃島御固人數配相整兼富感仕候付何卒千住宿勤番者御免被成下候様仕度段同十一日若狭守より奉願置候由未御沙汰  
之筋ハ無御座候處去四日御勘定御奉行様御目付様より若狭守家來之もの御呼出ニ而佃島砲臺近々御引渡之旨御達御座  
候處右之通兩様之手當何分ニ茂相整兼候付不得止御引渡之儀今暫御猶豫奉願置候由然處佃島之儀如御達非常之節御警  
衛嚴重相立候様兼而手管仕置不申候而者難相成候處双方之請持ニ而者何分人數行き足不申非常之節ニ臨御警衛行届兼  
候而者甚奉恐入候間若狭守始家來ともニ茂一同深心痛當感仕居候儀相違も無御座候小身之儀殊内分之事ニ御座候得者  
一分立之備不仕置以兩様之手當如何體ニ茂行届兼候儀ニ御座候間甚以奉恐入候得共千住宿佃島之内いつれそ一方相勤

一方ハ何卒御免被成下候様仕度幾重ニ茂奉願候尤右之趣ハ若狭守より御内慮を茂奉伺筈ニ御座候處最前差上置候願書  
未御沙汰の筋茂無御座儀ニ付此段各様迄御内意申上候間可然様奉願候以上

細川越中守家來

八月十一日

深 村 脩 藏

八月十三日幕府大坂に於て百文錢鑄造の事及び時勢の變化に應し舊例古格に泥まらず諸事を改革  
すべき事を達す

〔慶應元年八月以後  
江戸探索書〕

丑九月十七日町方同心大關孝作より御城使里内官右衛門迄差越候書付寫

慶應元年八月十三日

付札 本文之通ニは御座候得共江戸表ニ而は未々御觸達無御座候事

此度上方筋錢貨融通之爲當分之内於大坂表百文錢吹立被仰出候間其方共引受諸事江戸表之振台連以御金改役所座方之  
もの爲呼登吹立方急速可被取計候尤御觸達之儀者於江戸表取計候様在府同役共ニ可被申越候  
右之通松平對馬守井上信濃守小野友五郎若菜三男三郎に申渡候間被得其意町奉行可被達候事  
同日達

當時町奉行所之儀元和年中より取立置候儀にて追々奉行所規則茂相立既數百年之昌平相續候へ共時勢之變化ニ茂不拘  
自然舊例古格等相泥ミ品々流弊之所置茂不少哉ニ相聞候右は當今之時勢ニ隨ヒ所置を施し可然筋ニ付偏ニ國之舊例古  
格等ハ悉ク相改實地ニ渡り市民不致難産業衰微不相成且御役所取締向等嚴重相立候様改革可被致候就而は當時幸ひ  
御藩被爲在候事ニ付相改可然廉々は篤も勘辨以らし見込取調被相伺永久之御取締筋相立候様入精可被相勤候

慶 應 元 年

右之通當地町奉行に相達候間可被得其意候

八月十六日藝藩は毛利淡路吉川監物が幕府の召喚に應ずる能はざる所以の具狀を幕府に傳達す

〔大坂返達御用狀扣〕

文久三年四月以來  
毛利淡路吉川監物より左之者共罷越別紙之通中間候ニ付奉入御披見候委細之儀ハ不日重役之者差登申上候得共一應別紙差出申候以上

八月十六日

毛利淡路家老

松平安藝守

福間式部

吉川監物家老

吉川采女

今般御尋之趣被爲在候付御使者を以被仰渡候ニ付而者早速發程可仕筈ニ御座候處尾州總督御陣拂後茂恭順を旨とし謹而御寛大之御沙汰をのみ奉待居候折柄不圖御進發被仰出候哉之風聞有之上民とも虚實を茂不相辨驚愕不一方別而登阪之義を承候而者國之衆心安堵不仕一統疑惑を抱キ候間只今強而發程仕候ハ、士民掛念之餘り紛擾候茂難計と深痛心罷在候且年來痔疾並痛氣不相勝候處此節別而相難儀仕居候ニ付而は千萬奉畏入候得共右無據譯柄ニ付進退相窮候次第御垂憐被成下此節之儀一先延引仕候而茂不苦候様程克御執成可被下偏ニ奉懇願候以上

八月七日

毛利淡路

今般御尋之儀被爲在大阪表に被召出御沙汰之旨蒙仰候ニ付而は早々登阪可仕筈ニ御座候處申談有之本家に罷越候段先達申上置候通御座候然處今度御再討被仰出候風聞仄ニ傳承仕如何様之次第ニ可有御座やと人心安堵不仕此節早速登阪

仕候時は自然紛擾ニ立至候哉も難計左候而ハ却而奉恐入候次第ニ茂成行可申やと誠以恐惶不過之憂苦之至ニ御座候加之秋暑之砌病中押而本家へ罷越候處病勢相加難滋彌増候付被是此節發足難仕奉存候就而は萬々奉恐入候得共頭靜之實効相立猶容體少々ニ而も快方ニ差向候迄之發足之儀御猶豫被仰付被下候様奉願候右之次第何卒御波取被下候様御執成之程偏ニ奉懇願候以上

八月七日

吉川監物

八月某日我藩太宰府詰津野田儀左衛門等書を在藩の上司に贈り三條實美等の守衛出役に關する筑藩よりの交渉に對し回答の件を伺ひ且つ脱藩隨從者の宿所動靜及び之と薩人との關係等を報告す

〔尊攘錄五卿一件帳〕

覺

一去ル十三日東久世殿壬生殿四條殿瀧門山參詣ニ相成候ニ付筑藩より森戸新五郎組足輕召連出役仕右足輕之半途ニ殘し置候由然處以來五卿衆遊歩等之節之各藩より壹兩人充出役有之候而は何程ニ御座候哉併此儀之未々重役共に茂咄合不申候得共氣付候儘不聞御咄台仕候との儀右新五郎より贈仕候間弊藩ニ而之是迄之通相心得罷在度段不取敢返答仕置候得共退而篤斗勘考仕候得は各藩より出役相談之儀ハ當時正義専ら之御取扱ニ御座候へ之諸事各藩之嫌疑を請申間敷との趣意共ニてハ無之候哉自然右等之存付も御座候得之重役談判之上重而猶屹と掛合可申儀も難計右様之節之如何之心得よて返答仕可申哉四藩之同意ニ而出役いたし此方様迄出役無之と申儀も如何敷各藩之矢張御守衛之取扱いたし誠ニ重疊心痛之儀ニ御座候間御模様奉伺置度奉存候

一去ル五日五卿衆所持之小筒二十五挺程瀧門山之麓内山と申處ニおゐて火通之儀頼談御座候由ニ而福岡表より炮衛役兩

慶應元年

一七一

人罷越打方仕苦ニ御座候處雨天ニ而差延ニ相成猶十日ニ右筒之内五挺程火通仕吳候様との儀ニ付森戸新五郎組足輕召連打方仕せ候由尤三條様之内より兩人拜見として罷越申候由

一宰府大町松屋孫兵衛と申者春以來長州使節且脱藩之者定宿ニいたし居候處去ル十二日福岡より御呼出ニ相成町役共同道罷越候處宰府より廿五丁程有之候關屋と申處に役人被差出置同所ニおゐて押方いたし一通り吟味之上入牢被仰付候由

一五卿業社内に御入ニ付而ハ祭禮之儀式茂段々御差留ニ相成右ニ付社家社僧ニ茂内輪申分差起り追々寄合杯いたし歎願筋持出様子ニ承り申候

但歎願之趣者恐ながら 禁裏御祈禱所ニ脱走脱藩等を初メ大炮など被關候儀者勿論往古より見合も無之重疊神慮之程も奉恐入杯と申立候様子ニ御坐候

一筑前侯御父子ニ茂當時御病氣之御申立よて御佛詣等を初一切御出等無御坐候由

當時三條西殿水戸浪人之由齋藤左次右衛門變名

藤 岡 彦 次 郎

右者去月廿九日より博多甘木屋に六七日留逗留いたし福岡表重役は應接いたし度段種々歎願仕候處五卿一件應接之儀者宰府表に掛り之役人差置候間萬事此向に應接ニ相成候様との趣ニ而一切取合不申候間右彦次郎儀茂空敷宰府表ニ引取申候由

年之比三十二三位平面中肩色黒キ方之由姓名相分不申

右者先月中旬比より松屋孫兵衛方に一兩日止宿いたし候處右之者間内より間内迄傘をまぼめ面體を隠し出入仕重疊不審之者ニ御座候付種々探索仕候處肥後藩と申候様子ニ付博多福岡に懸所々手を分吟味仕候得とも手ニ入不申其殘念之儀ニ御坐候且近來之形勢ニ御坐候へ者筑内に重而入込候儀出來申間敷と相見申候

丹後改

水 野 溪 雲 齋

牧和泉弟

鏡 伍 助

大鳥居家來

芳 木 俊 太 郎

右者小野阿波方に下宿いたし居候處溪雲齋儀ハ近日池ノ端と申處之小家ニ轉宿之旨ニ御坐候一體脱藩等之下宿々々當時之形勢ゆへ斷り勝之模様ニ相成候由

水 戸 藤 岡 彦 次 郎

右者佐田主殿方に止宿

土方補右衛門變名

南 大 一 若 薫 一 郎

右者執行坊に止宿

土 州

島 村 左 傳 次	上 杉 鐵 三 郎	山 木 忠 彦	盛 岡 延 太 郎	武 部 諫 尾	安 藝 盛 衛	小 藤 又 兵 衛	谷 晉
-----------	-----------	---------	-----------	---------	---------	-----------	-----

右者本願寺に止宿

膳所 三郎改 榎田 速男  
 米 幡 島 彈 正△付札  
 米 深山 虎之 介  
 薩敷 志記 芳太郎  
 對敷 三島 某  
 外下人壹人

右迎壽院に止宿

△合印付札

幡島彈正儀當五月中旬比より對州表に罷越居候由之處七月廿日比罷歸其砌志記芳太郎三島某兩人同道いたし直ニ迎  
 壽院に同宿仕候得共如何之釣合ニ御坐候哉五卿方より未タ賄料杯茂配當無之由且脱走脫藩等に者筑を初肥米とも集  
 會等一切無御坐候得共薩者必多度出入いたし至而心易様子ニ相見既ニ當二日ニ有馬米之助列對州より罷歸候杯者  
 同人下宿に晝夜之無差別兩三人充罷越密談等可有之たる様子ニ相見一體當時之形勢者薩を頻ニ幕中候趣ニ見聞仕候

和泉末子 小松 泉 四郎

右者當夏之比下關ニおろて暗殺致され候由

右之通承繕申候間則一書を以御達申上候以上

八月

津野田儀左衛門  
 島田俊兵衛  
 大塚郁太郎  
 佐藤貞彦  
 藤木源左衛門

井田戸三郎

八月十八日幕府更に長藩末家並に重臣に九月廿七日迄に上坂すべきを命ず

〔大坂返達御用狀控〕  
文久三年四月以來 御國家返達御用狀控

廿八月廿三日阿部豊後守様より御呼出ニ而御渡之御書付(大坂押立御用狀卷込)

毛利淡路吉川監物出阪之儀兼而相達置候處若病氣等ニ而押而茂難罷出節者毛利左京毛利讃岐并大膳家老共之内申合來  
 ル九月二十七日迄ニ大阪表に罷出候様其方可申達候

八月十八日

右之通松平安鑿守に相達候間爲心得相達候

八月十九日

〔大坂返達御用狀控〕

大坂押立御用狀卷込

阿部豊後守様より今日中御呼出ニ付私參上仕候處別紙御書付一通御用人を以御渡相成申候畢而右被仰付之通御請不申  
 上國許發程不仕候節ハ不被得止を斷然之御所置不被爲在候而ハ難相濟候間最前御達ニ茂相成居候通御國許に御人數御  
 揃被置何時ニ茂御繰出無御差支様兼而御手配被成置候間其期ニ至候而之急速ニ御繰出之御沙汰有之筈ニ付此段爲御合  
 申達候様豊後守様被仰聞候段右同人申聞候

八月廿三日

右一通 河口一名ニ而差越候内之書取也

青地源右衛門

慶應元年

藝州江戸留福永助左衛門上坂ニ而此節長州へ御達筋取扱居候間定而御内密邊聞込可有御坐と今日青地源右衛門態と面會聞繕有之候處何そ相替候間込ハ無御座聞老方御逢ニ而被仰聞候之全躰此節大膳父子を被召寄御糺明可被仰付處從來之國主夫ニ而之國內人心動搖ニも可至敷と各別寛宥之御趣意を以末家等を被召寄御沙汰有之候ニ不罷出之甚以不心得一日改早罷出候得之其罪狀只今之様ニ成行候而ハ罪ニ罪を重候譯ニ付是非々々外末家又之家老共の内早々罷出候様致周旋候様と之意味合を以助左衛門に御説得御座候付委細奉畏候迎夫を一々書留御國元へおつノ申向ニ相成居候計之事之由外ニ無御坐ニ付別段書上ハ無御座旨尊承候事

八月廿四日

〔林新九郎日記〕

一同(月)十九日云々

去ル十四日一橋公當所(坂大) 出立登京長州徳岩兩家出坂不致候ニ付長府清末兩家召之儀朝議御伺出之風説此許論之長清兩家召之議不宜夫ニ而之彼猖獗ヲ増候迄云々會桑同意也

一同廿日云々

今日上田(久兵衛) 承候處防長に猶御使者被差立清末長府兩人ニ家老差添四十日限出坂云々御達有之由今晚上田參り胡服此變革云々の儀桑ノ松浦(秀八) 森(彌一左) 參相談ハムし候由且松前聞老之面諳大樹之得失等承之

同廿二日(中略) 晝比青地河豚振舞ニ付參居候處會ノ外島(彌兵衛) 急ニ申談候儀有之北濱淡路やに參候様申來候付直ニ參候處毛利吉川出坂御斷書面ニ付紙之儀相談ニ付別紙持歸ル

一同廿三日朝飯後徳岩登坂延引之書付佐野に持參今日阿部聞老ノ留守居呼出右延引猶登坂期限之儀被仰聞夕方會ノ入江來訪

八月廿一日小倉に於ける我藩兵の巡邏所を變更す

〔長州再征帳〕

御警衛場所之儀先便相達置候通ニ御座候處去ル廿一日尙御徒目付を以別紙寫之通被 仰渡候此段相達申候以上

小倉詰

八月廿四日

御 物 頭 中

御 奉 行 衆 中

寫

巡邏場所之儀是迄菜園場村より宇高松鼻迄被相心得候處向後地獄橋迄と可被心得候委細小笠原左京大夫家來に可被談候

〔慶應元丑年(風) 聞 書〕

細川越中守家來に之達書

巡邏場所之儀云々(前項の達書に同じ)

有馬中務大輔家來に之達書

巡邏場所之儀是迄齋物師町通干上り口邊海岸筋被心得候之處向後宇高松鼻迄と可被相心得候尤小笠原左京大夫家來可被談候

右之通細川越中守家來并有馬中務大輔家來出張之者に相達候間委細可被申談候

九月

八月廿五日藝藩老臣野村帶刀長藩使節來藝の事に關する要務を帯びて大坂に到る

慶應元丑年

〔林新九郎日記〕

一同(八)廿七日土州手島(助)森岡(連)來訪七ツ過歸ル幕前(會)ノ諏訪(常)柴(太一)依田(次)來訪初夜後歸る穴戸備前廣島に出候事ニ付野村帶刀一昨廿五日登坂

〔防長回天史〕

是時に當り藝藩野村帶刀既ニ大坂に着し八月廿七日上城し穴戸備前の演說書及び防長士民の嘆願書を幕府に呈す

(穴戸備前陳情の旨趣)

淡路吉川藩方

今般御尋之儀有之毛利。監物登坂仕候様被仰出早速罷出御尋之趣拜承可仕儀は勿論に御座候然處先達て私共より末家中迄歎願仕置候趣定て御承知可被爲在不容易企有之との御事にて御再討被仰出候段仄に傳承仕實以驚愕之至只管苦心罷在候折柄兩人御召寄之儀御沙汰被爲在園國之人心疑惑を生じ大膽父子日夜不安寢食謹慎申再ひ紛擾々間敷事件自然差起り候ては 天朝幕府へ奉對恐懼痛心此事に御座候素より御尋之趣は條理明白御答可申上候得共只今之形勢にて急連登坂と相成候時は國內之動搖無覺束御斷申出候ては彌以不相濟彼是苦心之至に御座候右人心疑惑之原因を申上候得ば昨年来父子謹慎恭順を盡し官位御稱號等被召上候儀をも尖に御請申上猶又益田右衛門介を始三老臣並參謀之者天々處嚴科御訖申上微衷聊貫徹仕候哉尾州前大納言様を始御陣拂に相成其後無間於領内争鬪之儀も有之候得共外向へ係り候譯にては無之爾來も彌謹慎罷在不遠御寛大之御沙汰可被仰出と奉待候處不圖も此度御進發の御様子に付ては士民一統泣血悲歎に不堪固より僻境頑固之風習にて鎮靜方行届兼畢竟不肖之私共不當其任慚愧之至に御座候得共右等之情實篤と御亮察被成下御隣藩御交誼不被爲捨置何と歎可然様御周旋被成下度偏に奉懇願候尙淡路監物兩人よりも可申上候以上

八月 (防長士民の歎願書は八月某日の條に出つ)

八月廿六日松平春嶽答書を長岡護美に贈り時局に關して其見聞する所を通告す

〔續再夢紀事〕

廿六日長岡良之助殿に書翰を發せらる左の如し書翰録

晚夏念六之貴東秋分前二日相違雪手開誠數回誦讀仕候當今金風玉露願適宜之候ニ御座候如垂示 至尊萬安隨而大樹公益御機嫌能華城御滞在被爲在候段御同意重疊奉悉賀候隨而足下起居清宜可賀々々如仰方今時體切迫ニ候得とも京垣間と相違弊邑も亦貴國御同前至極無事ニ御座候次ニ老生碌々瓦全消光仕候條乍憚御放念被下度奉希上候扱は從是社意外之契滿打過誠ニ以多罪伏而奉仰御海恕候不相替委讓御懇厚之御緒上深忝奉存候一々不能裁答候此段は御宥恕被下度候一近來之風説ニ而は兵庫開港談判ニ付異船滿海渡來之趣御聞及之由老生も過日承り候得共虛説と存候乍去宮津閣老俄ニ東下之趣意は外國より當年兵庫開港之期限ニ付朝廷へ直ニ罷出官人と應接仕度旨外國人申出候風説承り申候一唐津世子小笠原並松山侯上阪被命候山兩人共復職相成候哉之旨切に其筋より承り申候松山は未だ阪着無之唐世子ハ已ニ此節ニ而は着坂と存候

一幕府參侯へ被命毛利淡路吉川監物被爲召候阪ノ本願寺應接場之趣ニ候此節ニ而は兩人とも登阪可相成處第一萩へ罷出末藩を始集會篤々遂評議之上にて上阪夫故暫御猶豫相願出候趣過日之京報にて致承知候足下最早御承知と奉存候扱又此茶例之弊産不珍鹿少恐懼候得共寸楮を呈し候寸誠を表し候御慰ニも相成候ハ、幸々甚々奉存候芦田信濃献上物いたし候ニ付彩筆二枚御衣被投候旨被仰下於老生も奉多謝候其餘被仰越候事共一々不申上候只今御同事ニ將來之御成功爲皇國奉至禱候如何相成候事哉前途更ニ渺々御さ候一日も早ふ天下公明正大之御所置並國是相立天幕御一和夫而已存詰申候勘解山仁右衛門へも爲天下深自愛候様被仰傳被下度奉希候海山之節意長紙短中々短日難書盡先是迄と閣筆奉報而已得貴意候例之亂筆ハ多罪々々時は冷氣增加爲天下國家強食自愛專祈專禱不一

八月廿六日書于寸碧書屋

成山賢公子

玉几下

尙々御端書忝奉存候越前守ニも兎角レウマチスとやらにて手足變痛未だ上坂不仕候十之丞も此表ニ罷在申候高吟一首惠示感服々々早々不一

八月廿七日英國公使館を泉岳寺境内に建設するに決せる由を報する者あり

慶應元年八月廿七日

八月廿七日

大概取極

芝泉岳寺境内松山御臺場御築立御入用土取候跡新規町家願濟ニ相成候地所貳千六百五十七坪此度御用地ニ被召上外國接寓所御取建相成御作事方御掛リニ而御普請出來之上當分之内英吉利人に御貸渡ニ相成候積リ尤地代之儀之追而可被下置筈

外ニ南隣り如來寺境内八百七十五坪者當分御用地御借り地圍込ニ相成候積リ

芝車町ニ而町家取拂役々諸所に之入口道式とも五百三十五坪程御用地之儀御調へ中ニ御座候

但し繪圖面壹枚添差上申候

(繪圖略す)

右繪圖面之通り取極り候ニ付此段申上候事

九月

岩井四郎左衛門

八月廿九日安場一平書を志水典左衛門に贈り藩吏の談話に係る吉川監物等上坂遅延の理由、更に長藩末家及び老臣に上坂の幕命下りし事、公武合躰に關し朝臣の間に異論の發生せし事等を報す

〔男爵安場家文書〕

三日沼山御傳諭之趣且社中之御端書之旨具ニ中間候處いつをも猶宜ク得貴意候様申聞候

上村角に被爲托候貴輩去ル廿五日持參辱々捧讀仕候如命逐日秋冷相催申候處愈御安康之旨拜喜之至奉存候ニ劣弟碌々無異ニ渡光罷在候乍慮外御放念可被下候春已來ハ打絶呈書茂相解怠慢之至御恕有奉仰候爾來天下之形勢一喜一憂變態無限ニ申内將軍家御下阪後浮説流言様ノ、ニ相聞候得共先ハ公武御一躰ニ而爲差御間隔之姿茂不被爲在恐悅至極ニ奉存候乍併一躰之御運之朝幕共因循苟且之事而已ニ而皇國一新之御英斷絶而不承申既ニ長防御所置筋末家吉川御召之末茂先月末登阪及遅延候趣藝州に吉川方使者を以申向候由

此儀表分之辭令者大膳父子に熟評之上罷登候間暫クハ遅延も難計候間其段御執成被下度との趣ニ候へ共實情ハ萩本藩且暴徒方茂幕府ニ順從ハたし主家を賣候嫌疑有之よしニ而此節登阪いたし候ハ、跡ハ岩國の持こたへ出來兼候ニ付迎茂登阪之儀之六ヶ敷趣歎訴いたし候間藝方聞取之趣直ニ幕府に使者差立ニ相成候由

右ニ付毛利淡路吉川監物登阪遅延之譯柄藝州に御察討ニ相成猶末家之内長府清末ニ萩家老之内壹人差添罷登候様從天朝被仰出當月十八日幕命大阪を發申候由一昨々日京師交代之機密間根取大阪より早打ニ被差下聞取之趣ニ御座候此節迎も出版出來候勢ニ之無之いつをニ一變動差起可申相考申候貴論之通大根本之地人材御登庸之御實跡相立不申候間何事茂被失機會遺憾之事共ニ御座候左候而前條 天朝幕府御合躰之姿も會桑之力ニ而繫留ノ居候得共 宮様攝家方之内ニ茂兩派之萌有之近衛家杯之必至度幕府を相手ニ被取候ものと相見そろノ、違却之論説茂起り可申勢ニ相成横濱鎮

慶應元年

一八一



港之命下り候哉之内情ニ相成候由ニ而又々根本之地ニ申分差起可申誠ニ長歎息之至御座候貴論之通馮河英烈之果斷不可失之大機會ニ可有御座偏ニ廟堂之大號令奉懸願候事ニ御座候 將軍家長々御滯阪ニ付而之御登阪之儀ハ既ニ一旦之御内議之筋も被爲在候而御決評ニ相成候趣ニ相伺居候處其御道家早打ニ而被差上候間いつをニ俗論差起爲申ものと被相考申候近來ハ何之御模様も不奉伺誠ニ痛憤之至ニ御座候何事も相接ならてハ御承知被下候通り之愚筆心緒盡兼概略之貴報迄早々如此御座候以上

八月廿九日

安 場 一 平

志水 典左衛門様

尙々時下折角被成御脈候様奉萬祈候愛甲出崎前一書拜呈後ハ御出府茂可有御座と相樂居申候處一向御模様も相分不申如何哉と案勞罷在候得共御許之御都合次第毎度呈書茂如何敷態ト差控居申候處此節之貴翰且上村直話ニ而御模様承り兩度御紙上を茂被成下候由未々到着不仕候間御序ニ御探案被下候様奉祈候何も拜接ニ讓略仕候以上

八月晦日一橋慶喜答書を長岡護美に贈り幕閣の不振を歎すと雖も騎虎の勢不得止防長再征を遂行せんとするの意を洩す

〔子爵長岡家文書〕

客月念三之御狀相達忙手披展先以而秋氣相加候處愈御清穉令遙祝候拙者頭健只々京阪之間奔走ニ相疲を剛情も是ニは辟易罷在候防長事務御尋被越且西州形勢御内示縷々令承知候近日之情態何をニも最下之勢と相成り所詮内外上策と申所には出兼可申長州も到底暴ニ倒を候義と相察申候御申越之通幕廷内情も不相振極め而痛嘆之事のミ候得共只今ニ至候而は騎虎之勢共可申哉此儘ニ相止候譯ニは勿論參り不申結局國內之大亂相問候とり外ニ運ひ方無之委ニ有之痛心之段御察可給候對州邊之一條も相聞へ自然九州筋之動亂と相成諸國へも波及可致何分御良考有之度江山間之閑日月御

過し之由御申越健羨ニ不堪愚拙も滯阪中偷閑一日川口邊垂竿消鬱々たし候得とも詰り忙務中之義前後紛冗垣々相困り申候何卒遺世獨樂之身と罷成度候得共夫も出来不申執着ニ打過ぎ申候御一笑何を來月中ニは東西相決し可申時勢得と御洞察爲國家一と御憤發御座候様相祈居申候書餘後鴻可申進草々聞筆如此御座候頓首

八月三十日認

一 剛 情

長 岡 良 兄

貴酬

猶々多事ニ紛を意外之御無音何卒御一家中にも宜敷御致意之程相祈り申候已上

九月四日小笠原長行老中格に復す

〔元治二年御國江戸往來狀控〕

以別紙申達候

九月四日

老 中 格

小 笠 原 壹 岐 守 様

右之通被仰付候由御留守居より相達申候此段爲可申達如是御座候以上

九月七日

郡 夷 則

御 家 老 充

御 中 老 充

九月五日我藩京都留守居上田久兵衛會桑兩藩の依頼により防長處置布告書の案文を作る

〔肥後上田久兵衛先生略傳並年譜〕

鈴木登編

〔肥後上田久兵衛先生略傳並年譜〕

九月二日

○早飯桑名行、晝迄一飯、會津行、長防御處置之論、天下布告之露板認見可申との申談、會大ニ同意(原註)(日録)

九月四日

○夕、會ノ手代木(直右)諷訪(常)桑の森(彌一左)松浦(秀)來り一昨日之後ヲ論ス、余カ布告ニ擬スルノ書間然ふし、御處置筋咄し合、岩國を以、天王山ニ比ス皆大ニ同ス、唯怨堀尾吉晴なき事を(原註)(日録)

九月五日

○平明起坐、布告ノ筆ヲ二道ツ、認會桑え遣ス會大ニ謝して速ニ京ニ達し、其事を遂ん事を報ス(原註)(日録)

九月六日

○朝飯後佐野行、全日三時限ヲ以、布告ノ書ヲ京師ニ達せん事を約す……林(新九)行咄居候内佐野(玄一)來ルト告、歸路、黎明迄話ス、劇論(原註)(日録)

九月八日

○夕佐野行、木村と論、辭職之決心歸、飯(原註)(日録)

九月九日

○枯坐辭表認、林來、昨夜木村と論談、今朝、尙一場追付木村可來との事ニて大分都合替り、無程木村青地(源右)佐野來、論落合一酌、木村へ行、又一酌、河豚、夕歸り、會桑へ紙而遣し置(原註)(日録)

〔林新九郎日記〕

一同(九)三日(中略)昨日上田會に相尋候處來ル廿七日期限相過候ハ、直ニ御討入之筈ニ相決居候ニ付一統に布告之御書出來申候筈

一同(四)日(中略)夕方會ノ手代木諷訪桑の森松浦同寓ニ而出會期限ニ付天下に布告之案文上田相認試候ニ付書面討論ニ而暮方酒

一同(六)日(中略)書上田寓ニ而松山服部(嘉)岡ノ伊藤(亭)出會夕刻木村得(我藩奉行木)京より下坂右之上田申談征長ニ付天下布告之書付ニ不及何國迄も穩之取扱致度云々之論ニ而上田論と合兼候事

一同(九)日朝飯後木村に參上田と今一應咄合様申談子細之云々木村同意ニ而直ニ上田寓に參咄合一途ニ歸着ハムし夕方小倉甲斐(小笠原)招ニ應シ大野又七(唐津)郎誘引ニ而參幕後歸ル云々

九日六日外國奉行山口駿河守大坂出張を命ぜらる

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

丑九月十日立之御飛脚

一左之通御書方に及上候事

外國御奉行

山口駿河守様

御目付

小笠原刑部様

右者急御用ニ而大坂表に御出立之儀去ル六日御達ニ相成翌七日御出立之由ニ付

御城之御模様探索仕せ候處外國之儀ニ付而被成御出立候との風説ニ而相分不申候尤御差急東海道五日限之御旅行之由

慶應元年

一八五

御座候

九月八日

澤村 脩 藏

九月七日在京郡夷則是我藩國議の決せる所に基きて長州再征を非とし幕會桑の間に盡力斡旋せし顛末を藩政府に報告す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月より  
以別紙申達候長州家老宍戸備前藝州に罷出願出之趣有之候處於華城御取揚無之其以前御達ニ相成居候通長府清未并萩家老之内九月廿七日を限登阪之儀及遲延候ハ、直様將軍様御征伐として御押詰之御評議有之候由右付而此許考議之次第別紙書取差進入御披見申候尤右一件御國議ニ茂關係仕重大之御事柄ニ付一應御取遣ニ茂及可申處其間合無之而已ならず大阪表之御模様大略御議定之場ニ赴居候由ニ候得者一刻茂見込之趣ハ上田久兵衛列に談判ニ及せ申度木村得太郎を早打ニて昨朝より大阪に差下候事ニ御座候於彼地周旋之次第等相分候上ハ上村彦次郎歸郷之儀内意之趣も有之候付委曲中含早打ニ而指下申管ニ候條左様御聞置可被下候右期限後之御處置筋等遠境相隔彼是御懸念も可有之乍恐上ニ茂定而御配慮可被爲在し先右之趣爲可申上態と早打飛脚を以申達候事ニ御座候以上

九月七日

郡

惣 連 名 殿

向々長州より之願書且御差圖振等寫一綴御留守居より相達候付共儘差進申候〔本文寫一綴とあるは蓋則に掲け置し長府岩國の願書及八月廿三日の幕達なるへし〕

付札  
本文之通候處大阪より之雇着華城之御評議戰期豫メ御布告と申處ニ相決右草稿京地へ指廻會津侯へ御一覽ニ入朝廷御伺之一段ニ相運居候由ニ而草稿上田久兵衛より差越候付別紙入御披見申候右草稿之御文面ニ而ハ名義繁然と

相立兼猶更不安意之次第ニ御座候併斯迄御堅リニ相成候末御國論を以挽回ハ不頼事ニ候へとも得太郎儀篤く吞込居候筋ニ付定而御趣意貫徹可致しハ相考候得共居多之心配仕居可申と夫のミ遙想いたし候且又淺井新九郎橋會桑に談判之末昨日ハ橋府へ會合茂有之候由ニ而橋公ニ御尤ニ御聞揚ニ相成候段川村惠十郎より中越大略御國議ニ落合可申と存候右之趣追懸認添申候事

別紙

今度長州家老宍戸備前廣島表に罷出德岩上阪之儀御猶豫願出之趣有之候處先達而外末藩并萩家老之内九月廿七日を限上阪いたし候様と之御達を御押張右願書ハ御一覽之上御取揚無之直ニ藝藩に御指返ニ相成候由此末若期限迄不致上阪候ハ、斷然大旗を被進長防に御押詰御征討を不被遂候てハ難相濟と之趣會桑よりも申立右之圍老方も其御はまりニハ被爲在候由尤是迄追々御寛容之御取扱ニ相成候末幕命ニ戻必多物及遲延候ニ付テハ猶罪狀を被鳴御討入之儀長防ハ不及申天下ニ御布告ニ相成候上大旗を被指可然との論も起り居候哉ニ未御決議ニハ至兼居候由然處長州願立之趣を以致熟考候得ハ、國下變動以來父子謹慎恭順を盡し剩三暴臣之首を斬て飽迄ニ謝只管寛大之御沙汰を相待居候處不圖も再征御進發之命下り圍國の人心疑惑を生し候折柄德岩兩家急ニ登城之儀御沙汰ニ付テ國內勅搦再紛擾ケ間敷事件差起候てハ奉對 朝暮奉恐入候條右等之情實御亮察被下度と之文意ニて是迄國內鎮靜父子慎中無名之師を被出候より猶又人心沸騰鎮撫届兼候哉之趣ニ表分申立何等之非を以御征伐被爲在候哉と一同不服之姿顯然相見申候匹夫匹婦に刑戮を加候さへ罪狀明白不致候へハ人心安着不仕況一大藩を被征候重大之御事件猶更名義正敷無之候てハ難相成儀ニ處其罪狀をも御糺明無之此儘討入と申ハ所謂輕舉暴動ニて至公平之御筋ニハ有之間敷左候へハ第一 勅諭之御趣意ニも被爲戻且ハ列藩之人心を被爲失一人も應候者連ハ有之間敷然時ハ長防激徒之術中ニ御陥り正激一致必死之防戦ニ相成候ハ、中々御成功之程も無覺束のみならず華城之近狀惣軍之士氣相撓實地之戰鬪何程ニ可有之哉必勝之御目算無之一步も御踏出ニ相成候てハ又々御失計ニて却而幕威を被唾候様ニも成行可申ハ必然之勢ニ相見申候然ニ右御呼出之期

慶應元年

一八七

限迄上阪ハ萬々無覺東候間豫メ御胸算を被定彌御討入之御覺悟ニテ專士氣を御貯置先閣老方の内御一人且大小監官御差添彼境界又ハ藝州邊迄御出張ニテ兼而御聞込之件々屹と御糾問ニ相成御請之趣ニ應シ正激御分斷寛猛御處置之品も可被爲在若又御詰問之件々明白之申譯相立候儀も有之候ハ、夫々御聞揚相成右實證御見届無之候てハ復命ニ難被及是より直ニ長防之先導いたし候様被仰付山口城破却之體父子誹謗激徒鎮定之稜様等逐一御見届之上御歸城ニ相成父子を初五卿激徒等之御處置筋都而至理至當ニ出 朝幕一致之御刑斷相立候様有御座度儀と考議仕直様木村得太郎尹宮様に參殿思召をも奉伺候處至極被遊御同意直様會津侯ニも御談合可被成との御事ニ御座候由且又淺井新九郎ハ橋會桑之公用局等に馳廻談判ニ及候處少々異論も有之たる哉ニ候得共積ル處右談判之趣意ニ大略落合候由依之得太郎儀早打ニテ華城に差越此許評議之次第篤と談判ニ及せ候事

但此方様ニハ御先鋒をも被爲蒙仰無名之師ニ御荷擔可被爲在様も無御座專御建白之筋を遂盡力いたし若貫徹仕兼候節ハ御先鋒御斷切と申意氣込を以周旋之儀精々申含置候事

九月

九月十日日本藩江戸留守居澤村脩藏は大久保逸翁永井主水正戸川鉾三郎來廿五日迄に着坂すべきの命を受け明後十二日頃江戸を出發すべき由を報告す

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

九月十一日立之御飛脚ニ及上

越中守様御事

大久保逸翁様  
永井主水正様

戸川鉾三郎様

右御三方様大坂表より被爲 召來ル廿五日迄ニ御着坂ニ相成候様被 仰付候由ニ付御出立之御比合等今日之 御城出ニ而御城使探索仕候由之處逸翁様より御出坂御斷被仰置候由主水正様鉾三郎様ニハ明後十二日比御出立之筈ニ有之候段御城防主より申聞候旨申出候以上

九月十日

澤村脩藏

九月十一日幕府海陸軍惣奉行を海陸兩軍總裁と改稱す

〔慶應元年八月  
京都大探 坂長崎 索書〕

覺

海陸軍惣奉行之儀以來海陸兩軍總裁と相唱候様被仰出候右之通被仰出候間得其意相違可然向々に可被違置候

九月

〔文久三年  
御同席觸寫大目附様御廻狀並御書扣〕

九月廿日水野和泉守渡大目付觸達

大目付に

伊豆守事海陸軍總奉行被仰付置候處以來海陸兩軍總裁と相唱候様去ル十一日於大坂表被仰出候間此段向々に可被違候

九月十七日

九月十一日在京郡夷則は長州再征の幕議を醸さん事に盡力し若其效なくんば先鋒の命を辭する

慶應元年

に如じと評決したる旨を藩政府に報告す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月より  
以別紙申達候今度御布告御討入之御評定一件付而者去ル七日急脚を以委曲得御意置候通ニ候處此許考議之次第正論順  
序何方茂重疊敬服之由ニ者候得共會桑邊之見込之華城之近狀士氣自然と相境居候折柄此上戰期遅延ニ及候而者兵氣之  
利鈍ニ關係いたし再奮起之期者無之一步ニ而も兵を進不申候而難相成との趣一途ニ存込外ニ格別之定論も無之且華城  
を被發候後奮發之士氣を持通し候目算逆者無之哉ニ而先淺計之趣ニ被考此體ニ而者華城之御議を挽回者何程ニ可有之  
哉甚以掛念之次第ニ御座候仍而拙者拙考之趣得失を分別紙之通書取ニいたし淺井新九郎へ相渡其趣意を以猶一層周旋  
いたし候様中含橋會桑にも談判ニ及せ置申候尤宮様關白様にも至極御同意之由ニ候得共少シハ先入いたし居候儀も可  
有之歟と彼是痛心之至ニ御座候若此末然再征之名義相立不申此儘御討入と申ニ相成候而者此方様御建白之御趣意茂  
貫兼無名之師ニ御荷撥被遊候而者所謂非義之義とも可申此節國論之次第於華城御採用無之候ハ、不得止御先鋒者斷然  
御斷被爲在候外有之間敷此上談判之運ニ因而者是非其筋ニ落合不申而者難相濟右御斷之御趣意ハ於御許御取らへ至  
急ニ被指越置候様有御座度存候勿論可成丈ハ盡力いたし迎茂貫徹之見耳無之節者機會ニ乘し此許限御斷之見込丈ハ申  
立置早々御國許へ申上候様可仕候尤木村得太郎下阪後之模様一切相分不申如何之都合ニ相成居候哉深致安勞候右之次  
第御國之御覺悟ニ茂可相成と上村彦次郎儀早打ニ而此許指立大阪之模様ニ因り暫被地ニ滯善惡共御運之概略相分候處  
ニ而至急ニ罷下現實之光景委細言上仕候様中含候事ニ御座候以上

九月十一日  
惣 連 名 殿  
別紙

(郡 夷 則)

失計

- 一 問罪之御處置を被缺無名之師を被出候ハ、諸藩不應天下之人心を可被爲失事
- 一 虛聲を以被成御通候ハ、激家之術中ニ陥止激一致之防戰御勝算難測事
- 一 敵地ニ近つき官軍之兵氣疲候而ハ長防者不及申諸藩之侮を茂可被爲受事
- 得計
- 一 御處置至當ニ出候ハ、正義之徒自ら信服激家孤立之勢ニ可相成事
- 一 名義を正し大旗を被進候ハ、列藩響の如クニ應可申事
- 一 仁義之軍を以天下之人心を御攬幕威御更張之事

九月十二日日本藩林三太郎は幕吏田邊太一杉浦愛藏の談話にかゝる四國軍艦大坂廻航の事につき  
山口駿河守の上坂、英人雇人傳吉の放還、長州事件の償金仕拂の理由、兵庫開港延期等の事を  
報告す

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

- 今日外國御書留掛り田邊太一并外國懸り御目付杉浦愛藏方ニ而承り候事柄左之通奉申上候
- 但杉浦ハ當月七日横濱出張同十一日歸府之由
- 一 先月晦日フランススミントル申達候事件ニ付日本政府御役人之内山口駿河守殿栗本潮兵衛殿御目ニ掛り度儀御座候ニ  
付當月五日右兩人横濱に出張被致候處種々談事機密ニ而有之翌六日山口駿河守殿道中六日切ニ而上坂被致候山通詞役  
召連  
之由
- 一 右本國より申達候事件機密ニ而不相分候得共和親定之儀ニ付一昨年竹本淡路守殿談判之節是迄取結候條約政府切ニ而

慶 應 元 年

一九一

天朝之御許容之無之事故鎖港等之儀

天朝を被 仰出候とも決而破約に申譯合無之に被申候書付有之外國人甚不安心ニ存し毎ニ 天朝を通商御許容有之度

に申居候間此度本國を申遣事件定而右之事ニ可有之に申事ニ御座候

一英國ミンストル之泉州侯之御差留ニ而大概相留り可申様様ニ候得共佛國ミンストル之決而留り候様子無御座候由

一阿蘭之右兩國次第ニ相成居候由

一亞米利加ハ當時内亂ニ付ミンストル參り居不申由

一長崎ニ而被召捕候傳吉之儀甚御不都合之由ニ而明十三日英國ミンストル手許に御返し被成候山右之最初長崎ニ而召捕

候節英人より何故ニ御召捕被成候哉に申候節右御奉行衆を江戸表より召捕可申御達シ有之候ニ付召捕候事ニ而何之罪

哉一向不存よし被答候ニ付英國商人<sup>傳吉を便ひ</sup>より横濱ミンストルに右之段申越候ニ付ミンストル之方申出候ニ傳

吉ト申者兼而私ニて相抱ひ置候事御承知之上御召捕被成候哉に相尋候得共御答ニ一向其儀之承知不致但傳吉元來勝

田伊賀守家來ニ而箱館ニ而出奔いたし夫々所々關所等相破り候ニ付日本國中に召捕候様申觸置候ニ付長崎奉行召捕候

ニ而其許商人ニ被抱居候之承知不致趣御答ひ相成候ニ付然ら一ト先御返し被下又々御尋之筋有之候節差出可申にミ

ンストル申候ニ付先つミンストルに御預被成候由

一英國人ハ長州御征伐以外之不宜由申居候由

一先達而長州之爲償金三百萬ドル御渡被成候譯ハ長州之暴發ハ政府ニ而被仰付候儀ニ而之有之間敷儀ニ候得共右様御國

内之者暴發いふし候様ニ而之矢張政府之和親信實ふらざる故ニ御座候間其信實を御明らしの爲速ニ兵庫開港可被成然

ざれハ政府御落度ニ相成候間夫れ丈々御償び物無之而之不相成に英佛亞蘭共申出候ニ付

公邊ニ而御評儀ニ相成候處只今兵庫を開き候而之人心ニを相障り候連三百萬ドル御渡御決定之由然所英亞蘭ハ右償金

之本國之命を待て受納可致間夫迄御預置申候由答候處佛ハ直ニ受取申候由

一兵庫開港之儀之都合ニ而此度別期期限相延候譯ニ而之無之兼而延期之談判之先年相濟居候處長州暴後信實を御表しの

爲急ニ御開き可被成様申出候由ニ御座候間右償金不受取者ハ兵庫開港申立候も難計由ニ御座候

一外國奉行星野備中守殿之此度大坂に外國相巡り候之至極御國是御定めニ之宜敷機會に申され候由

九月十二日

林 三 太郎

九月十三日英米佛蘭四國の公使軍艦九隻を率ゐ横濱を發して大坂に向ふ

〔尊攘録新聞紙並夷情探索等〕

土州探索生手ニ入候書付

一各國軍艦今朝正四時英佛亞ミンストル蘭コンシユルセネラール乗船之上當港出帆仕候英五艘佛三艘蘭壹艘而九艘ニ

而御座候當港に殘居候軍艦ハ英而已ニ御座候即左之通

英大船壹艘小船三艘附屬食料船壹艘

一今朝亞人バラト申仁に委敷儀相尋候處同人噂ニハ京師に罷越條約取結度主意ニ而ミンストル等罷越候趣申聞候尤同人

も彌是と申極かふきよし申聞候

一同斷英アジウタント<sup>名</sup>ハクレイン<sup>名</sup>コロス<sup>名</sup>人即大隊差圖役此人に相尋候處此度之ミンストルハ先年支那ニ而五人囚人

とあり其内三人被害殘貳人之壹人ニ而寒苦を経る人物ゆへ事物ニ寛ふる事をまゐす故へニ京師に至り直ニ約定を以

てすふらんと申聞候尤右クレインコロス右之儀委敷ハ不存趣申聞候依之少シふまゝ候處同人云マコヤもミンストル所

に尋ニも難參且又アレキ流ニ相尋候ハ一突可被致と察し候ニ付只士官仲間之風説右之如ト申聞候

一其外にも相尋候得共浪華開港ハ第二ニ而先ツ條約を取結んと欲するの意と相見へ候由申聞候彌如此御座候ハ實以恐

心之至開港以來之大事事件ニ御座候

一右九艘之船も乗組ふらして三百人宛位と相見へ申候

一居留地衆人實の主意ハまらざる模様ニ御座候衆人の言ミミンストルアトミラールの外實説を知るものおしと

一山手兵卒ハ壹人も罷越不申候

右去ル十三日横濱出同十五日達ス

〔全書〕

日本新聞外編卷五

西曆一千八百六十五年十一月四日我慶應元年乙丑九月十六日刊行日本雜報第百九十三號抄出

近日出帆軍船表

英國軍船	プリンセス、ロヤール	英國欽差乗込
同	レオバルド	
同	ペロリュス	亞國欽差乗込
同	ブンセル	
同	アルギユス	
佛國軍船	ギューリール	佛國欽差乗込
同	ドブレイ	
同	キン、サン	
荷蘭國軍船	リウトマン	荷蘭欽差乗込

以上九艘西曆十一月一日即我九月十三日大坂へ出帆

殘留英國軍船	ベルシウス	ケストレル
	ブスタルド	エドヘンチユール

右四艘

右諸船所載の砲數及び甲必丹の姓名等ハ前冊ニ記する所を參考も可し

四ヶ國の全權使臣出帆の事

本月水曜日の朝八時半過即ち我九月十三日朝五時半頃英國甲必丹フロウントの手ニ屬する兵隊新波戸場ニ出張し引續きて大砲隊も同し處ニ排列して欽差全權の來るを待ち受けたり玆此度英國の全權ミニストル、ハルリー、バルクス者プリンセス、ロヤールと名くる軍艦ニ乗じ佛朗西、荷蘭、亞墨利加の公使と共に中國海の兵庫を指して出帆せんとかくて九時半頃即ち我四時前ニ至りて先一番佛朗西のミニストルレオン、ローセス波戸場よりして其國の蒸氣フレガット船號ギューリールニ乗移らんと端舟ニ乗て漕出せバ兵士ハ悉く銃を捧げて禮を施しバルタン、ラシーリールと名くる樂譜の調子を合せて鼓樂を奏せり稍二三ミニユート後をて英國ミニストルハルリーバルクス日本在留公使館のセクリテリ、イウステン格羅拿フロウン並ニマغدナルド、サトウ、シーボルド等打揃ひて波戸場ニ來りしかハ兵士ハ常式の如く禮を行ひ暇乞も頓て相濟ハルリールとマغدナルド先づ端舟ニ打乗をば砲隊は即ち祝砲を放ち樂手はゴツトサーブ、ゼ、クイーン天佑女の樂を奏せり次の端舟ニハ通辯官サトウ、シーボルド乗込ミテ何をモ本船ニ乗移をバ程無く碇を揚げよと號令せり此時最初ニ運用を始めしは荷蘭全權ミニストルフロン、ボルスブルツクの乗込ミたるコルヘット軍船ソウトマンホリプリンセス、ロヤールも是ニ續きて運動し其他の諸船列を亂さず相並べ英船ペロリュスニハ亞國の欽差公使之ニ乗込ミ同しく爰に進みしが佛船ギューリールを待ち合せて一齊ニ船を進めぬり扱船隊は二行ニ並びて一方ハ荷蘭船ソウトマン之ニ續きて英船プリンセス、ロヤール佛船ギューリール同國の快船キン、サン英船アルギユス同國の砲船ブンセル合て五艘直ちニ此港を出帆し未だ針盤の方向を改むる暇もあらじと思ふ間ニ霧ニ隠れ

て見え成りぬ海上最穩ふれハ不日ニ恙なく着船せるふる可し

此度諸國ニニストル發向の趣意ハ疑ふ所も無く第一重大の事件にして事務とせる一條は外國との條約ニ付きて

御門の保證を乞ひ求むるより他無し此事件ハ諸國の公使兼てより深く希望せる所にして一切の事務ニ關係せる事少ら

らす此度吾等望む所の如く 御門の調印を得るからハ日本と外國の交際益々親切にして是迄既ニ結びたる通信貿易の

諸件方ニ完全ニ至るべきなり

第二條の目的は兵庫開港の事なり此一條ハ本國政府ニ於て最も切ニ希望せる事件なり淺く考ふれば方今横濱在留の者

の爲めニ稍不利ならん歟と云ふ説もあれとも深く後來を思へハ此事件亦缺く可らざるの要務にして全世界の交際ニ永

久の利あるのみならず日本の開化ニ於けるの利益最大なる可し第三條ハ稅則改正の事なり其餘の事件ハ推して知る

へし必しも爰に論するを俟たず

此度出帆の船隊、多分今月、即ち日本十月中旬までニハ當港ニ歸着を可し

九月廿一日譯成

柳 河 春 三  
黒 澤 孫 四 郎 同職

〔全書〕

日本新聞第九號

西曆一千八百六十五年十一月三日即

我慶應元年乙丑九月十五日 横濱開版

大坂開港の一條ハ去る一千八百五十八年第八月<sup>戊午年</sup>の秋ニ於て日本と英國と取替せし條約中の重大事件なる事ハ衆人の

知る所なり

倫敦政院の會議ニ於て日本人各國の爲ニ大坂港を開く可きや否の評論甚紛々たり然れども理を以て推し時ハ既ニ條約を取結びたる上ハ必ず此港を開るざる事を得ざるハ當然の事なり衆人の知れる如く西洋諸國へ初めて日本より使節を遣りしハ則ち右條約書第三の條の言延の趣意なり是を即ち倫敦政院ニ於て種々評論を起すの所以なり

英國女主ハ他の日本と條約を結びし諸國と共に日本政府を助けて日本國內ニ於て外國人ニ難を結べんとする黨を打ち減す可き威勢を得せしめんと欲せり但し是ハ既ニ一千八百六十三年<sup>癸亥</sup>大坂開港の約定をなすニ付て決定したる條あり

今夫を 大君政府斷然として不羈貿易を免許し日本人と外國人との交を自由ならしめバ諸大名皆其役人ニ命して當ニ國産を送らしめん事疑ひ無し此の如く舊き習弊を捨て不羈の交を許ニ於てハ日本國の繁榮隆盛目前ニ在るべし

本月一日<sup>我九月十三日</sup>英、佛、荷、米四ヶ國のミニストル等軍艦十隻ニ乗して大坂ニ向て出帆せる趣意ハ既ニ人の知る所の如し畢竟此事件ハ日本政府の役人中開國を好む者あり又ハ理も無く外國人を惡みて和親を破らんとする黨ありて甚た入組たる形勢あるを説得せん爲として實ニ容易の事情ニあらず

外國人の希望する所ハ未だ世界の事情ニ通せざる日本の人民を教導し古來の弊風を改革せしめて文明隆盛の國となさん爲メニ多年勞苦周旋をこ難も

御門及び其黨は尙外國人を讎敵の如く惡むが故ニ諄々として之を説得し其意を翻して和親を結ばん事を希ふのみ

内 田 孫 太 郎 譯

九月某日幕府は長藩末家及び家老等上坂の命に従はずんば將軍直に發向討伐すべき旨を布告す  
〔長州再征帳、尊攘錄皇武令〕



九月廿四日上村彦次郎早打ニ而着下廻ニ來る

去年七月長防之者共於國下暴動ニおよび候儀未曾有之大罪ニ付尾張前大納言殿を以御征討有之候處三暴臣斬殺山口新城破却毛利大膳父子謝罪國內之儀ハ屹度取鎮可申趣ニ而前大納言殿御陣拂有之候以後國內再沸騰山口城再築私ニ外夷ニ交通不容易企等有之趣相聞候付而之今度爲御征伐被遊御進發 朝命御伺取之上大阪城迄被爲入尙此上寛大之御處置可被仰付被思召兼而軟頤之趣茂有之旁を以毛利淡路吉川監物被召出前條之次第御糺問被仰付大膳父子其外恭順之筋を守居候者共ハ夫々御寛典ニ被仰付暴激之餘黨跋扈いたし實以大膳父子鎮撫心底ニ任せ不申儀ニも有之候ハ、御旗を被進拒命之者迄御追討長防二國之士民速ニ安堵いたし候様被遊度被思召候處淡路監物登阪延引ニ付若病氣等ニ茂候ハ、毛利左京毛利讃岐并大膳家老之内申談當月廿七日迄ニ無相違登阪いたし候様松平安藝守を以申渡置候然處近日淡路監物并穴戸備前等より安藝守迄申立候趣御取上之筋ニ無之若又萬一左京列茂登阪不仕節者最早御猶豫難相成直様被遊御發向二國鎮撫之御處置有之筈ニ候尤御討入之節ハ前以大膳父子を始二國之者共ニ茂可被仰渡候依て豫々攻口割合之書付相渡置候間此後之御沙汰次第兼而國邑ニ捕置候人數早々繰出候様可致候事

九月

九月十五日將軍家茂大坂を發して上京す

〔大坂返達御用狀扣〕

九月十五日 同廿四日着

青地河口より

〔前略〕

一公方様爲御上洛今朝六半時御供揃ニ而五時比大坂御城御發途備前島御召場より御乗船被爲濟候右ニ付小笠原壹岐守様

に御留守居代として國部善之允參上伺勤仕候

一左之御方々様御供ニ而御出立ニ付善之允參上伺勤仕候

阿部 豊後 守様  
松平 周防 守様

一右ニ付御滯京等之御模様御城ニおゐて承繕候處伏見御一宿ニ而十六日御入京十七日御參内被爲濟十八日御發京御歸坂被爲在候御模様之由御座候

〔文久四年慶應二年迄御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

水野和泉守殿御渡候御書付寫登通相達候間被得其意云々

九月廿日

大 目 付

松平 大和 守殿

津輕 越中 守殿

右 留守 居

大 目 付に

長防御所置之儀此程被仰出候趣も有之候付天機爲御伺去ル十五日六半時前之御供揃ニ而大坂御城御發途伏見御一泊翌十六日二條御城に被爲入候段去ル十三日於大坂表被仰出候間其段向々ニ可被達候

九月十九日

九月十六日英米佛蘭四國の軍艦兵庫に入る

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以別紙申達候横濱滞在之夷艦攝海に乘廻候儀付而森井惣四郎を早打ニ而被指立委曲被申越趣具ニ致承知有付而探索書等夫々遂被見御國許にも直ニ申向候事ニ候關東之近狀兎角ハ難申只々切齒慨歎之至ニ御坐候右夷艦九艘去ル十六日安治川口に乘込夫々兵庫へ漕泊近日之都合十三艘ニ相成候由然處關老方御驚愕之躰ニも無之攝海御手當等之儀何之御沙汰ニ茂相成不申處ニ而ハ猶更不審不少萬一夷船を征長之後櫓ニ被爲取候様之儀ニも有之候ハ、幕府者は限ニ而皇國之禍害眼前ニ有之最可恐之形勢ニ御坐候併夷情之所向幕議之所出茂一向相分兼候付而者幸森井惣四郎横濱ニ而知晉之者も乘組居候由ニ付爲探索早打ニ而一昨日方兵庫へ罷越中候少ニ而茂事情相分候ハ、急脚を以可申達候此節森井を被指越候儀ハ萬端大ニ都合を得申候 (下略)

九月廿五日

井上 加左衛門 殿

郡 (夷 則)

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

一去ル十六日英佛蘭三夷八艘攝海廻着天保山方上陸致候段財津民助大坂方今十九日着見聞之趣演達候事

〔新美記録〕

九月十六日英佛米蘭之軍艦九艘攝海エ渡來同日漢文之尺牘一通差出同十九日大坂御老中に佛之ミニストル方口達書二通兵庫支配役人に佛蘭西國水軍提督オリヘル方書翰二通差出候事

〔肥後藩士 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

九月十六日

○(前略)異船九艘計保山洋ニ至ルヲ聞、佐野方へ行申談、會へ知セ、林物見ニ行、會追々往復、手代木ヲ明山公へ出ス

原註  
異船兵庫へ去ルト聞(日録)

〔尊攘録探索書〕

慶應二ノ二月廿九日

聞取

(前略)

一酒井雅樂侯之迷懷ニ昨秋夷船兵庫に廻り候之被之存意京師より定約御許容懇願ニて兼而兵庫に廻り度と申出候故關東ニて之定約御許容無之節と直と兵庫に罷越可申之一言京師に言上いゝ候ハ、必京師より御許容可有之と見込居候ニ付其段京師に奉伺候得共御許容無御座を故夷人より之是非京師へ迫ルト申勢ニ相成最初ニハ内分此方よりも廻り候様心なく相頼候得之彌相廻候時ニ至強而差留候ニも至兼斯く々々の次第と相成申候然處京師ニ而不都合と相成候得之水野和泉根源自身謀主ニ在なるら夷船兵庫に廻り候ハ兩酒井之謀計ニ出候と京師に申越候ニ付兩人之罪と相成謀主之水野之反而依然として罷在候と甚々不平ニ而内話有之候由承申候(下略)

二月廿九日

益 田 勇  
森 井 惣 四 郎

〔風 聞 書〕

慶應元丑年  
(九月十三日已來京大坂邊混雜之次第の一節)

兵庫開港之儀ニ付夷人共より申立之儀有之於横濱應接有之候處決答成兼候付當所に罷越應接致し候旨強而申立彌當所に相廻り候様相成候故外國之尹山口信濃守鑒察小笠原刑部早追ニて上坂九月十三日着横濱應接之模様委敷言上之處關老ニ之驚き候躰も無之平日之如く彼のドンタク杯いゝし居候間心ある人は甚不審ニ存居候

慶 應 元 年

一十六日外夷船天保に貳艘兵庫に八艘河帆之趣注進有之候ニ付市尹井上主水正出張應接致し候處此度襲來之儀之意味有之候ニ付閑老ニ無之候而之應接不致旨申聞候間罷歸り小笠原登州侯兩監察會藩兩三人引連出張天保ニおゐて應接被致候處襲來之次第一ト通申同旅館遊歩之場所等彼是相願候事件之阿部豊後守ニ而無之候而之應接致し兼候ニ付同人に面會致度旨強而申立候間小笠原侯も其段御聞届兵庫ニ而應接可致候付同所に相廻り可申旨被仰聞御引取夷人共も兵庫に相廻候(以下は九月廿三日の條にあり)

九月十七日異艦大坂に回航し閑老に見えんことを要求す

〔大坂返達御用狀扣〕

九月廿六日

十月七日着

青地河口

兵庫淀泊夷國船聞取之趣御城使共より差出候書付一通差進申候以上

横濱出帆之外國船九月十六日兵庫に着翌十七日右之内壹艘大坂に相越候付於目標山通稱應接有之外國奉行山口駿

河守様大坂町御奉行松平大隅守様御越之由

一阿部豊後守様に及御面會度段云々(九月廿三日阿部正外バークスと會見の條に出づるを以て茲に略之)

一初外國人大坂渡來之儀申立候由之處云々(九月廿日松平宗秀蒲坂の條に出づるを以て茲に略之)

一滯帆之外國船概ネ三十日計之糶持越居候山風聞仕候

江戸へ出張

御城使共

九月廿六日

〔新美記録〕

一翌十七日ハツテイラ貳艘ニ英人貳人佛人蘭人清朝人各一人何を茂上官其外英之水夫七人佛之水夫六人都合拾八人乗組天保山沖に漕付直ニ安治川浜り天保山東之つをを上陸南河塘を上り候付郡山番所へ何歟申候由之處何ト通さぬト云ふ歟理屈をいへ々々と云ふ通り候由凡半道計上手ニ參候處小笠原閑老々之使者參り天保山ニ引退居候様直様罷越應接可致との義申參居候由ニ而夷人共も引歸候由之處右閑老兼天保山ニ御出御談判爲有之由

一同廿日夷人共再ハツテイラニ而安治川ニ浜り天保山下迄參候由

一同廿三日夷人共六七人ハツテイラニ乗組三度安治川ニ浜り八軒屋迄參候處會藩上田傳次見咎呵り候付夷人共恐怖致し直様引歸候由

〔慶應元年十月六日風聞書〕

浪華來飛之内

二本橋蒸氣軍艦

フランクス國船名キンシヤン

天保山沖淀泊致し候ニ付町奉行組之者支配向立合差遣し來意相違候處奉行に面會致し度旨申聞候ニ付松平大隅守井上主水正爲立會赤松左京支配向共右船に罷越佛國カシユン英國シーボルト・アレキサンドル即面會應接左之通

大隅守、今度當地に罷越候ハ何等之用向ニ候哉

カシユン、御老中方に御面會申上度候阿部豊後守様ニ御在坂ニ候哉

豊後守者上京いたし居候

大松平周防守様之御在坂ニ候哉

大カ人も上京致し居候用向之趣意一ト通り承知致し度候

御話申上度候得とも御老中方に御面會之上申上候様命令を受罷越候事ニ付御氣之毒ふら御話難申上候御老中之當時

慶應元年

誰様御在坂ニ候哉

小笠原登岐守在坂ニ候

左候ハ、登岐守様は御面會願度候尤御逢相聞候もの之私共兩人外ニ英國より亞墨利加人名代マリタナリハン阿蘭陀國

エースリン都合四人ニ御座候

從是引取一應申聞候上尙可及挨拶尤承知之上之天保山最寄迄登岐守出張可致哉も存候否申入候迄相待候様可被致候

四字まで相待候様可致候乍去其已前上陸致し度候間案内之者壹人御殘し可被下候

應接所まで上陸之儀之不苦候案内之者殘し置可申候

應接申上候場所之何れニ候哉

天保山最寄に相應之家居有之候間右に案内可致候

山口駿河守殿之當地ニ被參候哉

當時在坂ニ候

幾日頃大坂表に被參候哉

五日程已前ニ參り候

小笠原刑部殿向山榮五郎殿之在坂ニ候哉

刑部之在坂榮五郎之上京致し居候

可相成之登岐守様は御面會以前駿河守殿刑部殿に御面會之方都合宜敷哉

大君幾日頃御上京相成候哉

昨十六日上京相成候

大

アレキサントル、中國毛利之未だ降參不致候哉

カシユン、此度彼地之模様爲一見下ノ關邊に罷越候迄降參相成候様取計度候無左候而之政府御多忙ニ而各國之た其不

宜候

いまた降參不致候尤來ル廿七日期限ニ付夫までニ降參不致候ハ、順序を以所置ニ取掛候筈ニ候

畢而一同引取候事

〔肥後藩士上田久兵衛先生略傳並年譜〕

九月十七日

○早朝會津へ異船ノ狀ヲ通ス、訪カ、小笠原(長行)より來ル

今日二船天保山沖迄來り、應接有之筈との話、即時ニ諏方、林、財津、明石と乗船斥候ヲ約ス、伊藤貞來ル、同舟發

ス、且飯且話ス、保山の岸ニ夷ノ小舟二隻アリ、舟ヲ急ニシテ其傍ニ達ス、一ハ十字一ハ箭ヲ畫、英、佛ナルヘシ、

舟奴十餘人烟ヲ喫ス、余諏方ヲ促シテ上岸セシメ、應接ノ信ヲ得ントス、諏方甚遲シ、待ニ不堪、林、伊藤ト上岸、

異人之跡ヲ問、東向岸ヲ逼ト云、電走シテ追失策々々ト痛歎ス、走ルコト七八丁ニシテ及ブ、洋夷四名(英佛米蘭)

清人一名辯髮扈從、可耻、然ルニ他ハ是餘餘ノ卑人稍可恕、吾邦人變刀ヲ横へ前後ニ陪隨可羞死、一二言吏人ニ問話

ス、夷人前進ヲ勸ム、吏ヲシテ夷ニ通セシム、夷左右ヲ開テ路ヲ讓、御先ニ御出被成よと云余一語ヲ交ヘス、急ニ進

ンテ前導ノ更ニ及フ、蓋夷ニ先ツ事半了、余夷人上陸ノ緣山ヲ糾問ス、吏語塞ツテ却走ス、余電奔シテ郡山ノ沢ニ至

テ云、余ハ肥藩人也、分外ノ問アリ夷人近ク至ル、定テ此門ヲ過ル事アルヘカラズト、營士云敢テ禁ゼスト、余大ニ

憤テ其說ヲ乞、云已ニ松平大隅侯ノ命アリ、傳命ノ人即是ニアリト、余云難息ノ極ト雖、己ニ命アラハ不得止ト却立

原註(成王ノ與ル伯)夷至ル云、番所より通さぬといふの理屈ヲいへノと、其不遜無禮醜態悔懣不忍見、從容として東

慶應元年

ニ去、余林伊藤と退去テ保山ニ至ル諷方と逢、流ニ浜テ大ニ論ス、僅ニ四五名ノ夷ヲ拒ク事不能シテ如何ソ長防ヲ討  
シ、余自今時事ヲ談ゼジト、諷方且謝シ且怒、明山公ニ至テ今日ノ形勢ヲ詳悉ニ達セント云、原註再郡山ノ汎ドニテ、夷ヲ見吏ヲ罵ル舟安  
治橋ヲ距ル事三四丁、橋上ニ諸侯ノ行アリ、皆一時ニ聲ヲ發シテ云明山公と、舟人ヲ叱シテ岸ニ至リ諷方ヲ勸メテ駕  
前ニ達ス、余輿ニ隨テ走り進ム、諷方詳ニ演述、侯丁寧之語アリ、隨行七八丁ニシテ歸ル、稍夷息ヲ濯フノ様ヲ見ル  
原註  
(日録)

九月十八日

○唐津館ニ至リ山田勘ヲ以昨日之不敬ヲ謝ス、諷方至酒、家老多賀長兵衛來ル、侯命ヲ傳ヘ昨日之應接愉快之事ヲ承  
テ歎呼ニ不堪原註談判ノ持論ヲ呈ス原註午前歸ル(日録)

九月十九日

○堀内喜衛門京より着云々土州手島來話、夷情ヲ論ス、  
兵庫ヨリ成木松三郎來、夷人猖獗之暴狀ヲ説(日録)

〔林新九郎日記〕

一同(九)十七日朝飯後會ノ諏訪上田に參り今日英佛蘭安治川に乘廻候段從兵庫爲知候由ニ付諏訪岡ノ伊藤(亭)予(九郎)  
上田財津(辰)明石(直)茶船ニ而川口に參候處端舟貳艘波塘に繫居夷人上陸之模様ニ付上陸いたし塘ヲ上り候而夷人五  
人に追付駈拔テ御番所に參上田論判等云々奇事也安治川町にて  
一同十八日上田早朝小笠原家に參ル松浦來訪中津佐竹夷人聞籍之ため來訪延岡井上(眞太)同敷酒ヲ出ス無程歸ル夕方上

田ニ而松浦出會電話財津今晚乘船登京ニ付見立  
夷人明山公御談判之處上陸被差留候よし阿部侯に拜顔之儀願出候由

九月十九日佛國公使書を閣老に贈りて開港の要を説き且つ薩長既に開港の約を英人に結はんと  
するの狀を告ぐ

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

御城より里内持歸り

佛國方内々差出候書翰

口達

一此度某各様方に得御面談可議處之大事件ニ付吾隊之支配頭「カシヨン」と申者先其趣之意を逐一申上候様申付候就同人  
演述中ニ萬一申落等可有之哉と心附別紙之通則書取を以差上申候御熱覺之上可然御存意可被仰聞候以上

慶應元年九月

佛蘭西全權 ミンストル

御 老 中 様

口達書

一佛蘭西全權「ミンストル、レオンロセス」申上候我政府大君殿下於テ長州ノ重罪ヲ猶豫スル事更ニ其趣意を語カ。不知大君殿  
下於テ今日迄急度其罪ヲ不責唯彼ヲ自ラ過を語カ悔テ降參スルヲ。追々日數ヲ費給フト云共今ニ至迄其證ナク或ハ偽リ降  
參ノ約定ヲ申立或者餘人立入テ終ニハ大君殿下ノ御進發ノ徒事ニ成ラン哉ト某頻ニ此事ヲ懸念シテ推參致シ候抑國民  
ヲ哀憐スル事ハ專人君ノ所務ト雖併

天子ヨリ預リ先祖ヨリ受嗣處ノ天下泰平ヲ亂ハ仁心却而不仁と成ヘシ情方今日木形勢ヲ考フルニ上ハ

天子ノ 微慮ヲ定次ニハ非義ナル謀反アリ貴國ノ泰平ニ禍スル者ハ不外ナラ此兩條ニ在シカ故如何トナレハ素ヨリ政  
府ハ

天子ヨリ國政ヲ委任セラレシナレハ世界ノ變ヲ見テ時宜ニ從フ故ニ各國ト交易ヲ取結ヒシ也素條約取結フ事ハ日本ニ於テモ

天子及ヒ諸侯方モ政府ト同意不成ルハ却テ不慮ノ擾亂ヲ醸スヘシ既ニ政府。背キテ内亂ヲ爲ス處ノ逆徒ヲ日本政府ニ於テ連ニ鎮靜方不行届ハ各國ヨリ其逆徒ヲ擊ント議定シタリ左スレハ其期ニ及ンテ貴政府ヨリ如何程制シ給フモ不可從就中英吉利政府ノ所置ヲ考フルニ交易ヲ專ラトシ自己ノ利益ノミヲ先トシ追々疑念ヲ生シ彼ノ心 大君ハ最早無實意專ラ鎖港ノ思召ナラント思ヒ居ル所ニ薩州長州ノ大名英吉利ニ密ニ使者ヲ遣シ何時トナクニ於テ開港可致ノ存意ヲ顯シ候故ニ却テ諸大名ト外國ト睦敷交ルニ獨政府ノ志有ト英ノ政府深ク疑ヒ居候右ノ事實ハ貴政府ニ於テモ未タ疑ヒ玉ハンカ右ハ某篤ニ親定タル所アリテ斯申候故ニ英公使ハ是等ノ疑念ヲ晴シカ爲上阪シテ右ノ實否ヲ自辨明致サン存意ニ候得ハ過月某熱海ニ於テ山口駿河守栗本潮兵衛ヲ以テ大君殿下ハ何レニ茂武威ヲ振ヒ玉フ様ト閣老衆迄申上置候其比英ノ公使頻ニ上阪セントスルヲ延日爲致又ハ前ニ述ル如キ大名ノ其言ニ不都合ナルヘシ併右ハ如何ナル不都合ナリモ其各國ト兵端ヲ開カハ猶又禍ナルヘシ亦日本ニテハ發明シタル武器モ未タ少ク西洋ニハ大國有テ其大國ノ兵士ハ年々ノ戰場ヲ經テ新ニ發明シタル武器モ多アレハ日本政府ノ未タ西洋ニ敵對スル心ナキハ必定ノ理ナリ既ニ條約書ヲ取替セシ上ハ妄ニ變ルヲ叶フヘカラス且鎖港センニハ武備未タ不調各國ニ使節ヲ差遣シ屢鎖港ノ談判ニ及フトイヘトモ各國ノ政府敢テ不承引左スレハ戰爭ノ外他ノ策略不可有依テ右等ヲ貴國ノ泰平ニ災スルモノト申昨年モ毛利大膽意恨ヲ含テ外國船ヲ妄ニ擊惱シタル一件モ速ニ僅ノ軍艦ヲ差向テ憤ヲ晴ント欲スレトモ大君殿下制止難默止無餘儀軍艦ヲ引上候シカ長防二國ヲ攻撃シテハ素ヨリ各國政府ノ嚴命ナリ且貴政府ノ主意ニ不戻爲各軍艦ヲ引上ケテ長防ヲ擊事ハ止タリ依テ思フニ所詮外國條約ノ儀ニ付テハ不惑様篤ニ日本ノ事情ヲ說示シ候故英公使今日迄出帆延引シタレトモ最早待兼頻ニ上阪センコトヲ望ム若一人ニテ致サンモ難計ケレハ猶又英公使ト會議シテ某ノ意見ヲ說シ故英公使ハ某ト同意シテ何事モ卒爾ノ舉動無之様堅ク約シテ既ニ横濱ヲ出帆セントセルノ日阿部豊後守松平周防守

様ヨリノ御書翰ヲ得タリ就テハ此度某推參セシコトハ各様方ト計テ諸事速ニ決斷致サン事ヲ欲ス左スレハ英公使ニ理不盡ナル舉動爲致間敷各様方格別ノ御配慮モアリ御盡力モナキニ於テハ無餘儀某モ英公使ト同意シテ不日京師迄モ推參可致候就テハ佛公使至極ノ實情ヲ以テ申進スルノ條ハ萬一條約ノ儀ニ付テ

天子大君ヲ永ク不被爲御同意ニ於テハ進テ四公使上京ノ上推テ

天子ヘ可奉調ト公使等ノ衆議ハ既ニ決セリ素ヨリ京師ニ於條約許容アラセラレサレハ自然各國ノ疑心モ不解シテ總テノ交際大ニ親睦スルヲ得然ルトキハ近來新ニ發明シタル武器及ヒ戰爭ノ珍書奇術モ不可傳授左スレバ日本堅國強兵ノ策モ不被行貴國堅強セサレハ國不得貴國不貴ハ

天子及政府モ不貴就テハ大君

天子ヲ貴フセントシ給ハ、

天子暫ク各國ノ條約ヲ被爲有 勅許而交際之親睦ヲ結合候様貴政府ニ於テ宜敷御盡力肝要ニ可有之候亦暫ク各國ト親睦。給ハ、多年ヲ經スシテ貴國實ニ堅強スルヲ可得若極テ堅強ナルノ後ハタトヘハ一二ノ外國ヨリ異論ヲ發シテ貴國人情ニ逆ヒ若クハ貴國ノ疆界ヲ犯サントスル理不盡ノ處置致ス其期ニ及大ニ防禦ノ力充ナハ各國ノ人心其時ニ貴國ノ天子ヲ可貴又可恐且貴國ノ形勢ヲ篤ニ按スルニ或諸侯不忠ノ働有テ表ハ鎖港ノ議論ヲ立且

天子迄モ及 奏聞裏ニハ開港ノ志ヲ抱キ薩州長州ノ如キ密ニ英國ヘ使節ヲ遣シ英政府ト熱談シテ右二箇國ノ中海等ニ可然ノ地ヲ撰ヒ一個ノ港ヲ開カンコトノ情ヲ顯ハセリ然ラハ所謂兵庫ヲ連ニ開港被成英吉利政府ノ疑念ヲモ解カシメ不忠ナル諸侯ノ邪謀を可挫御所置無之候テハ夥多ノ不都合ヲ可釀モ難計ケレハ此段篤ト御賢察ノ上ニ速ニ御明斷被有度存上候拜具謹言

慶應元年丑年九月十九日

九月廿日朝議あり防長處分に關し幕議を採用するに決す是日一橋慶喜異船の到來に關し朝廷の

詰問に奉答す

〔長防再御追討一件〕

去ル廿日一橋様會津侯桑名侯御參内御退出廿一日曉寅半刻右御參之趣之將軍様御參前朝廷御一決ニ相成候様との御趣意ニ相伺申候最初玉座前ニ而宮様關白様議奏衆方御列位一會桑侯被召出防長御處置御尋ニ付中納言様御受被仰上乍恐玉音ニ而此節一學次第順序相立輕舉無之様との 愼慮御沙汰被爲在候右一通被爲濟候間猶御列席して右御方々御列位三侯同御論談數刻御議論之趣之宮殿下奉初議奏衆方惣而是迄周旋仕候趣深御採用ニ相成候間其論被押立候御談判ニ相成候處一橋中納言様御辨解ニ相成是迄寛宥之處置ニ而再度登坂候様沙汰ニ及候得共言を左右ニ寄せ背命いたし候得之不得止大旗相進候而其罪を糺候外無之使者迄差越糺明仕候而ハ彼より被引付候様有之候而之朝暮之命茂輕ク相成且大膳父子伏罪幽居罷在候と申候得共當時之實跡之尾張前大納言申付置候通ニ無之矢張昨年來之姿ニ有之候様子ニ付而之矢張朝敵ニ相違無之候儘何分難開大旗相進候へ共正激一致防戰之手當ニ相成不申様條理順序相立無遺算處置可仕云々被仰上宮様關白様大旗相進候ハ、却而彼を激し成シ玉石共ニ燒候勢ニ相成候而之成效茂速ニ無之列藩應否も何程ニ有之哉云々御互ニ御論談ニ相成積ル處一橋様之御説通ニ御決議ニ相成候由

一朝廷々此節夷船到來之様子御尋ニ付一橋様御請未應接無之候得共兵庫等開港之唱茂有之候得共素より横濱ニ未落着不仕候内右相願候得共差免候様無之又長を討候様唱候得共勿論長防混雜之中ニ候得共土地之皇國之御國ニ相違無之夷人より討候様ニ相成候ハ、其儘差置候儀之難相成又長之和議取扱と唱候得共彼之和議を請候而之於將軍家難相濟何様辭令恭順を盡條理明白ニ談判可仕候様被仰上候事

右六條中納言様々昨日奉伺候

一此節將軍様御伺取ニ相成候大旗被進候様被遊御治定候列藩ニ茂布告攻口等茂一同御達ニ相成候筈且期限來月末頃と被

仰出候趣有之候其内關老大小監藝州に御出張ニ相成末藩井家老廣島に御呼出ニ而御糺明可有之管御人ハ關老未御治定無之大小監之永井主水正様戸川鉾三郎様廿五日頃迄ニ御登坂ニ付直ニ被差越候筈願く御出張之御方ハ來月初頃ニ之御發途之由ニ有之候筈一會桑公用局より追々承候事

一昨日會藩會澤九兵衛此節御進發ニ付懇切之趣不相替致論談候段追々肥後守様ニ相達至極御同意相成同僚一決仕候而涯分丈盡力いたし候得共充分之所ニ成兼候段心痛千萬ニ候併御内輪之運御國より申立ニ相成候通ニ可相成段此上盡力可仕筈ニ付重役衆に茂左様申述置被吳候様との趣ニ御座候

九月廿三日

淺井新九郎

九月廿日關老松平宗秀江戸より大坂に着す

〔大坂返達御用狀扣〕

〔文久三年四月以來〕  
〔前後の文は九月十七日異〕  
〔大坂へ回航の條に出つ〕

一初外國人渡來之儀申立候由之處右様無之様松平伯耆守様七月六日江戸表に御出立相成候得共猶此節出坂之儀申立聞入不申候付伯耆守様ニも九月九日江戸御發足同廿日御着坂相成候由ニ御座候

九月廿日外國軍艦攝海へ入津につき松平伊豆守立花出雲守田澤對馬守竹内日向守等上京す

〔御國京返達御用狀扣〕

松平伊豆守様  
立花出雲守様(若年)  
田澤對馬守様(大目)

右者今度兵庫表に夷國船渡來一件ニ付一昨廿日之夜御京着ニ相成候由安木眞平より知せ來申候以上  
九月廿二日 淺井新九郎

九月廿一日將軍家茂參内して征長の已む可らざるを奏し勅許を蒙る

〔新美記録〕

一大樹公ニ之長防御所置御伺且御暇乞として九月十四日大坂御發駕十五日伏見御一泊十六日御上洛二條御入城十七日御參内之筈之處 朝廷御差支ニ而御延引廿一日御參 内長防御所置御伺取眞之御太刀御陣羽織等御頂戴有之實之刻御下參廿三日之朝二條御發駕從淀川御下阪

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

將軍様昨廿一日辰半刻御供揃午上刻御出門ニ而施藥院に被爲成申半刻御參内被遊今晚寅半刻二條城に還御被爲濟候段安木眞平より知せ來申候間此段御達仕候以上

九月廿二日

郡 夷 則 殿

淺井新九郎

〔京都自筆狀控、大坂返達御用狀扣〕

元治二年正月ヨリ 文久三年四月以來  
防長處置之儀ニ付而之兼而 奏聞仕置候通條理順序を逐不審之件々篤々糺問之上夫々處置可仕奉存候毛利淡路吉川監物大坂に早々罷出候様申達候處登坂延引仕候ニ付自然兩人差支候ハ、外末家並大膳家老共之内申合當月廿七日迄ニ無相違出坂候様重而申達候得共今以登坂之模様も無之此上調音命ニ及候ハ、最早寛宥之取計も難仕候付無餘儀旣成を進罪狀相糺可申奉存候尤兵機緩急其外篤々熟考之上遺算無之様處置可仕奉存候此段

奏聞仕候以上

九月

家 茂

勅答之寫

言上之趣被 聞召乃賜御暇候猶長州一舉相濟候ハ、御用之儀有之候間早速上京之事兼而被 仰出候

九月

〔慶應元年の風聞書〕

九月廿四日附

浪華來翰極々秘物

公方様廿一日御參内無御滞相濟尤朝四時施藥院迄御入込ニ而夜ニ入候得共賀陽宮二條殿御參朝無之右ニ而御參内も難被遊漸く夜五時頃賦追々御上リニ相成夫より之御手續ニ而御參内有之御手都合都而無御滞相濟昨廿三日二條御發し直様夜五時之頃御着城相成申候右御參内御遅刻ニ相成候之全く薩州より色々申上有之長征を相拒有之候處御決斷ニ而御上京ニ相成候ニ付而之被是六ヶ敷品も有之哉、存候別紙極内々之書付差出申候是之今日手ニ入大新聞ニ而實事ニ疑無之大事故御秘し可被下候

一長州御征伐彌御極り難有事ふり彌御威光相立此御一舉ニ而幕府再ひ大變之御固被遊候實ニ御大事之御盛舉ニ候得者難有雀窟之限也無程御武威海外ニ輝き候事益々可待候廿七日後ニ之速ニ被仰出御發行存候云々

別紙

昨日賀陽宮御方並二條殿下御參内夕刻迄御遅引之内情之朝四時過二條殿既ニ御參内之際ニ至り薩州大久保一藏參殿いたし拜謁相願候處御斷ニ相成候得共賀陽宮御聲懸り之儀も有之候ニ付無御據拜謁被仰付候處一藏議論言上之處要之

慶應元年



長州伏罪之儀御寛容之御沙汰無之再ひ御征伐之御所置諸藩人心向背ニ差響き御爲筋不宜猶深く朝議被爲在候様との主意之旨依而殿下仰ニ之今更ニ至り右舛之御所置之難被遊旨御理解御座候得とも何分一藏議論主張言上ニ付右之會而被及御沙汰筋ニ之候得共一應參朝之上有司にも可達衆議と御返答有之即刻御參内相成候山此時暮六時也依之於宮御方も御評議有之候得とも是迄御確定之御一舉今更不可變との御内評相決し程なく大樹公御參内之上思食御伺相成候處尤不被遊御變動候旨被仰出候ニ付其段傳奏衆を以殿下に御返答被爲在候山因而無程御對顔之御運ひニ相成則天盃御頂戴且長征之儀御治定前以御伺之趣勅許被爲在候段被仰出候且眞之御太刀並御發向之儀御苦勞思召候旨御懇之勅語御陣羽織地三卷御拜領被爲在都而宮中之御首尾無御滯被爲濟則丑中刻被遊御退朝候事

本文御趣意ニ而御節刀可賜之御廉々御座候得とも幕府おるて何敷御差含之儀有之右之段御發表無之眞之御太刀之全

一薩藩搦擾不珍候得共殊更今般之儀者被爲拾大樹公ニ而も御不興ニ可被思召敷一橋會桑等之大ニ御憤激之趣と承り候扱

又宮御方御許又々御不興ニ至へき哉之密説ニ御座候

右極密々ふり深く御秘し可被下候

九月廿二日

猶以兵庫渡來之夷艦之開港之儀切迫之願ニ候得とも華港に入津之一艘士官に在坂唐津侯より應接しおよひ候處彌以長征御一決ニ付而之願意暫延引之段承伏仕退帆之筈候云々

〔全書〕

十月十一日朝着江

同五日夜五ツ時京都出立

越前侯之早駈之由京師模樣書

過日御上洛相成御參内已前關白殿下を以長征之儀は暫く差置此度攝海來舶之外夷掃攘之所置之方即今急務之事ニ付早々可取計方可然旨被仰出候處幕府ニおるて之彌進發治定ニ付爲御伺 天機上洛御暇も可被仰出手續之處右様相違之御沙汰幕府御直之事哉又は尾一會殿下對面之上過刻被仰出候長征差置外夷掃攘之所置可然義と今更何等之廉を以被仰出候事哉定而此儀ニ付而之何を敷彼是申上候義ニも可有之其趣意柄相伺度旨嚴敷被申上候處殿下ニも無餘義共儀之薩州より建白之次第有之儀と被仰出候ニ付恐ふら長征ニ付而之將軍家進發寬大之所置ニ付長々之滯坂被其意を背候ニ付彌進發ニも可及次第然ルニ今更薩州倍臣壹人之建白より右様御動搖被爲在候様ニ而之將軍家職掌無面目辭職之外他事無御座旨被申立候處終ニ去ル廿一日長征進發ニ付御參内御拜領物之次第ニ至り候由之事(十月朔日の條につづく)

九月廿一日薩藩大久保一藏賀陽宮に謁し征長の不可を陳す

〔長防再御追討一件〕

昨廿一日薩大久保市藏尹宮様に參殿今度大樹公上洛之御趣意之防長御征伐御所置筋御伺取之爲て奉察候處昨年尾張前大納言殿御惣督ニ而御征伐被仰出御同方藝州迄御進御糺明被成候處大膳父子悔悟三暴臣之首を打實驗ニ供山口之城を破壊等件々歎願伏罪之次第御聞届御陣拂有之候處猶不容易企有之趣ニ而再御征伐被仰出既ニ花城迄被成御進候處於大膳父子は伏罪發居名分を押し居候内大旗を被進候ハ、無名之軍を被出全御暴舉ニ申者ニ付朝廷を賜御暇候儀何程ニ可有之哉至當之御所置無之而ハ大小藩之内一二藩ハ相應可申候得共其餘ハ皆々傍觀可仕於防長之正激一致必死相拒候ハ、幕府御獨立連ニ御成功何程ニ可有之哉云々建言いたし候付宮様御思惟被遊殿下に茂罷出候様被仰付直ニ參殿前條之件々及言上候付夕七時過御參内被遊候後將軍様御參内被仰出候付去迄施藥院へ御扣及幕御參内被遊候山右之通ニ付今日山科宮様尹宮様殿下様内府様御列坐ニ而右市藏御説諭有之筈之由

右之通六條中納言様より伺取申候事

九月廿二日

淺井新九郎

九月廿一日横濱發行日本新聞は日本交易會所創設に決せし旨を報す

〔開成所おゐて横濱新聞紙寫取差上候控〕

日本新聞第十號

西曆一千八百六十五年十一月十日

横濱開版

我慶應元年九月廿二日

此一週間最重大なる事件として殆ど當年中の一大緊要事件とも謂ふ可きハ日本交易會所新規取立の事あり昨日も其事  
に付寄合ありしが吾等ハ多用として其席に列せず然とも出席せし者の話ハ商人三十名の議定にて駈と決定せり其  
内四人ハ此會所の仕法を考案可き旨を託せらるる由あり又其後聞けバ彌其事に取掛まりと云  
今日英國軍船ベルシウス大坂を差して出帆せり是ハ諸ミニストル并に諸國同盟軍艦に急信を送らんが爲メあり又我方  
にてハ日々佛人の便を待のミ

九月廿二日閣老阿部正外大坂に下る

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

阿部豊後守様

右者今朝此元御發途御下坂ニ相成候段外使共より聞取相達申候此段御達仕候以上

九月廿二日

淺井新九郎

郡 夷 則 殿

〔肥後編 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

九月廿二日

○(前略)阿松兩閣老今日御下坂之山明山公(小笠原)余ヲ召之約アリ一諾、明後日兵庫談判之筈、如何々々、天下之安危  
僅ニ相距ル事兩日而已(中略)林來話勇退之機を謀(日録)

九月廿三日

○早曉、白川閣老(阿部)西下之山傳聞、大野へ書を出以承合、佐野行、上田傳次來、會候阿部閣老へ御書之寫持參劄ニ  
見スル、丁寧應接、若不相用節ハ斷然接戦、日本燒土之覺悟云々余が兼而呈論之趣意ニ同し

九月廿二日兵庫奉行池野山城守任地に着す

〔大坂返達御用狀扣〕

九月廿六日 十月七日着

河口より

別紙を以申達候兵庫御奉行池野山城守様去廿一日大坂御着翌廿二日曉御出立即日兵庫御着同所勤番所御旅宿相成居候  
段御出入之者々爲知來候山佐野亥一郎より相達申候以上

九月廿三日將軍家茂大坂に下る

〔長防二度目御征伐一件〕(御觸書)

一水野和泉守様御渡之御書付十月三日大目付を御渡

大 目 付 記

公方様去月廿一日爲御伺

慶 應 元 年

天機御參

内被遊同廿三日二條御城

御發途伏見御小休夫より淀川通

御乗船大坂城に御着座被遊候此段向々に可被遊候

十月

〔文久三年四月以來  
大坂返達御用狀扣〕

九月廿六日 十月七日着

青地河口より

去十一日江戸被指立候御飛脚着今日爰許を致乗船候付致啓達候

一公方様當月廿三日二條御發駕伏見御晝休ニ而淀川御通船夜五半時頃大坂被遊御歸城候右ニ付一昨廿四日松平周防守様御旅館に御留守居代として國部善之允參上伺勤仕候處昨夜五時過益御機嫌能被遊御着城候段御用人を以被仰聞候右畢而周防守様御着坂之伺も同人相勤申候

九月廿三日閣老阿部正外兵庫に赴き英國公使パークスと會見す彼五事の申出をなし時局頗る切迫につき將軍家茂特使を發して一橋慶喜の下坂を促す

〔文久三年四月以來  
大坂返達御用狀扣〕

（九月廿六日青地河口より用狀の一節）（前後の文は九月十七日與  
大坂へ回航の條に出づ）

一阿部豊後守様に及御面會度段外國人申出候由之處御同人様京都御供御留守中ニ付松前伊豆守様九月廿一日爲御上京御出立豊後守様ニ之翌廿二日夕御着坂同廿三日曉爲御應接兵庫に御越同廿四日夕七半時比御歸猶今廿六日も同所に被成御越候尤伊豆守様之御供ニ而廿三日御歸坂之由

〔文久三年四月以來  
風聞書〕

九月十三日已來京坂邊混雜之次第

（前文は九月十六  
日の條にあり）

一此度夷人襲來ニ付而之京師ニ而も御評議ニ相成會津家ニ而も大樹公二條御滞留ニ付而之君侯藩士迄も御城に罷出夷人襲來之趣意之兵庫開港之儀ニ有之候間應接寛宥ニ而之彼等承引仕間敷假令何様之儀有之候とも御取用被遊間敷若願之趣一ト事ニ而も御取用ニ相成候得之徳川氏之御興廢のみならず皇國之御興廢ニ付公然と御應接有之模様ニ寄直ニ御手切ニ相成候様閣老迄屢御議論有之候得共御取用無之廿三日阿部侯御登人ニ而役向御引連レ兵庫に御越御應接ニ相成候ニ付會侯始一統歎息ニ被存候

一過日小笠原侯應接之節兵庫に相越候様被仰聞候付同所に罷越候得共日々壹艘ツ、天保に罷越形勢探索致し居候處廿三日日バツテラヌて川口より乗込候處御番所御固之向とも會而構不申候ニ付追々乗込候得共此日之大樹公御下坂ニ而市中混雜之折柄故格別見留候ものも無之終ニ京橋迄罷越猶乘込可中と致し候處八軒屋旅宿之會藩承り直ニ出張様子窺候處差留候ものも無之ニ付上田傳次外貳人之者罷出差留候處附屬之者大ニ腹立兼而被仰渡も有之候ニ何之之藩士ニ而誰か差圖を請差留候哉以之外之儀と中間彼是爭故夷人共ニも腰ニ帶候ビストール取出し筒口を向候ニ付會藩之甚立腹致し我々之會藩也兼而之應接も有之天保邊に滞留候も御制禁相成候處理不盡ニ乗込候儀何をも附添居ふら不差留之如何成故ニ而誰人之差圖を受是迄參り候そ我々之兼而肥後守之差圖を請居候故差留候也速ニ召連不歸節之品ニ寄各方迄

打捨可申と論談ニ及び候内京橋邊御固之者大砲之筒口差向放發も可致形勢を致し候ニ付夷人共恐怖致し天保に引歸も今日之有様見聞候市人之忿憤切齒いたし居候

〔慶應元年八月  
京都大坂  
坂長崎探 索書〕

淺井新九郎書上

九月廿二日阿部閣老大坂一泊直ニ兵庫に被罷越候節初小笠原閣老共ニ御應接被仰付置候處阿部侯より小笠原侯に書翰を以被申越候趣之此節不快ニ而爲御相談罷出得不申直ニ兵庫に罷越可申との趣ニ而同廿三日御登人應接ニ相成申候外夷より殊外六ヶ敷申候而十一時を限御返答承候由阿部侯より御報命ニ相成候付華城御驚愕ニ相成候由同廿四日四半時分之期限ニ而將軍様より一橋公に御直書猶宮様殿下様拜見之儘退出後書取左之通  
一筆申進候外國人に應接ニ遣候處豊後守只今罷歸委細致承知候重大之事件絶言語候速ニ御下坂可有之候書外猶可申入候不備

九月廿三日

家 茂

中 納 言 殿

尙々肥後守之御同道可有之危急存亡此秋候云々以上

閣老より御書

一事體切迫速ニ御下坂可被遊候事

一右之事件ニ付關白殿に被仰上置候事

一云々近々御上洛被遊候事

九月廿三日

閣 老 連 名

\*續再夢記  
トニ廿四日共  
アリ

尙々書右之候得共

將軍様御端書ト大同小異

右者事体切迫速ニ六ヶ敷右之候由候得共小笠原閣老御存付之由ニ而橋會公御下坂ニ相成候ハ、如何様共可被成との御趣意ニ而右之由(以下は九月廿六日の條にあり)

〔慶應元年  
風聞書〕

十月三日着江

浪華狀九月廿八日發

一廿二日早曉閣老阿部豊後守殿夷船渡來ニ付兵庫表に下向夷人御談判

一廿五日大坂表より御目付京都に早朝御入引續御使番も御入京從大樹公一橋公に御直書之趣眼目之處左之通

一國家重大危急存亡之事件差起候間下坂可被致候事

一閣老一橋公會津侯に

事實絶言語候間傳奏案に届之儘御下坂可被成候事

右一橋公會津侯午刻後御乗切り關白殿下に御出御暇直様同夜御馬ニ而御下坂

一京橋迄夷人乗込切迫申出候五ヶ條

第一御征長御因循ニ付如何之御時台ニ候哉御様子伺度

第二御征長難被爲出來御譯柄も御座候得之何時ニ而も御助成仕度

第三兵庫開港之條

第四兵庫開港之條御許容無之候ハ、上京之上

慶 應 元 年

天朝に直願仕度

第五御征長御助勢御聞入無之且兵庫開港之義御征長御成功之上ニ無之候而之御許容無之申場合ニ候得之夫迄之處當港ニ碇泊御模様拜見仕度段

右之通今晚承知仕候ニ付而之兵庫ニ而開港御免ニ可相成よし風聞云々

九月廿三日幕府は將に防長の處置に着手せんとするを以て大坂市中其他の警戒を嚴ならしむ

〔肥後元年八月  
風聞書〕

九月廿三日

大坂表ニおゐて

(中略)

伊豆守殿御達

向々に

長防御所置御取掛御聞近ニ相成候ニ付而之間隙之もの潛入候程も難計候旨市中其外巡邏之面々持場之儀尙一際嚴重相心得若怪敷者見掛候ハ、速ニ召捕候様可被致候

九月

九月廿三日閣老小笠原長行本藩留守居上田久兵衛を引見して對外處置に關する意見を問ふ

〔慶應元年八月  
京都大坂  
坂長崎探索書〕

上田久兵衛書取

去ル廿三日小笠原登岐守様より御内々御尋之筋有之由ニ而夷情切迫ニ付談判筋見込之趣被成御聞度段御尋ニ付乍恐申

上候夷人者算用委敷者ニ御坐候得共是迄幾度損をハムし候事聞及不申軍艦數艘仕立日本ニ差越候得ハ入費夥敷相懸り候へとも日本將軍長防征伐と出懸候而茂士氣一切振不申浪花城ニ滞留此大機會ニ乘し兵威を以浪花ニ迫り模様次第少々戰爭日本之膽を挫キ其價金を取大坂兵庫之開港ハムし候へハ此一舉ニ何百萬之利を得候も難計且長州よりも頼まを旁以過激ニ踏詰京都に迫り開港之談判可仕杯申立候事と相察し申候御談判ニ而事濟申候へハ軍艦之入費全損失ニ相成申候事故決し而此儘引取候見込無御坐屹度御接戦之御腹を御居へ談判之語ハ如何ニ茂丁寧ニして貴國者兼而戰爭御功者故此長防之征伐何之大事ニ茂無之可被存候へとも日本ニ而者二百余年僱武之末誠ニ合戦ハ不案内有之候故長防之征伐皆々心配無限趣ハ逐一御察しも可有之然ルニ此折柄縱令開港之期限ニ相成候へとも懇親之實意ニ候ハ、今暫見合せ可申とこそ可被中答之處期限ニ先手強而被申出若聞入不申時者兵端を開可申ふと申立軍艦を以被相迫候而ハ如何ニ可聞入存候事も何分難聞濟候得ハ何とそ長防之處置相濟候迄ハ退船仕吳候様此方之誠意打顯し懇ニ御説諭有之夫も不聞入暴ニ相迫り候ハ、最早此上ハムし方無之迎も御相手ニ者成兼可申候へとも日本焦土と相成候外無之候間勝手ニ戦を初メ可被申此小島ニ而五大州中第一有名之御強國方を引受義理之爲ニ滅亡ハムしたると申候ハ、日本ニ取て如何計面目と相成可申と決心御答勝敗ハ不論日本之死際ニ未練之振舞無之様被遊御盡力度と懇ニ申上候得者逐一御聞届至極尤ニ被成御承知候間豊後守様御歸坂之上駕斗御申談其邊ニ屹度御決定可有之との御返答御坐候而引取申候事  
(以下は九月廿五日の條にあり)

〔肥後元年八月  
肥後上田久兵衛先生略傳並年譜〕

九月廿三日

○早曉云々(中略)明山公之召狀來ル林佐野と話す、高野より來書、急ニ梶木町ニ來吳候様申遣ス故、急奔、森松浦已ニ八軒屋ニ在、高野と共に至、頻ニ夷變ヲ論ス、河上有聲、窓ヲ開ケハ樓下ニ異船アリ浜流如箭、早ク留ムヘシト周章狼

慶應元年

二二三

狼、上田傳憤激、余事ヲ破ルナカレト論ス、諷方高野松浦も船ノ處ニ至、余ヲ促シテ登城せしめ命を乞、復命之後申鳥邸前ニシテ夷人ヲ銃撃せんことを託ス、須臾ニ夷人舟ヲ反シ去ル、遺憾不堪言、再論喧嘩、唐浦ノ催促アリ急奔シテ行、明山侯ニ謁シ奉ル侯余カ天下ノ御爲筋心配いたし候段、逐一御承知ニ相成感心不斜段懇々御沙汰、且又夷人御所置筋、長防之事件、朝廷之御模様、諸藩之人氣等、委敷御尋之筈ニテ御呼出有之候へとも、今晚御着御ニ付、尙又登城差懸り、何分委細之尋出來兼候、尙近日くり合せて申遣、今日ハ差急キ候見込之儀有之候ハ、可承との事故、豊前侯(阿部豊)今朝御出張之事不審ヲ立呈論、隨而事情詳細持論ヲ述、日本ノ死際未練之事無之様、有御座度段、懇々申上、一々御採用、尙他日ヲ期シテ退(日録)

九月廿四日郡夷則は防長處置に關する朝幕間の内情及び外船去來の狀況を藩政府に報告す

〔京都自筆狀控〕

致追啓候將軍様去ル廿一日御參 内之處御陣羽織眞御太刀御頂戴 奏聞之趣被爲 聞召上長防御一舉被爲濟候ハ、猶御用有之候間早々御上京ニ相成候様 勅諭被爲在猶 玉音を以長防御所置聊御輕舉無之様條理順序を逐玉石共ニ不燒様ニとの御沙汰被爲在候山右御處置筋ニ付而此許考議之次第申立置候通朝廷御一般御同意之筋ニ而既ニ 天聽ニも被奉達候由ニ而御參 内前日於 玉座前橋會桑も御出座大御評議有之候處橋公御一人御進發御札問を御主張ニ相成御論談強ク積り其處ニ落合候山宿陸之大久保一藏此節之御進發ハ無名之師ニ而全く暴舉と申ものニ付此儘從 朝廷御暇給り候儀ハ如何成御子細ニ候哉と激論を發し殿下を初大ニ御心配ニ相成右御 參内も夫か爲ニ御遅刻ニ及候由六條様より直ニ伺取候段淺井新九郎より申出候將又於會藩ハ此方之論說深體認いたし君侯はしめ專其筋御盡力有之たる由ニ候へとも右之通ニ而充分貫徹ニ至兼候處を甚致心痛尤涯分丈ハ相盡決而等閑ニ不致儀ハ何卒重役初へ宜申達吳候様淺井迄懇切之挨拶致候由會藩之直實于今不始事と存候橋公ニハ最前御國論尤ニ御開揚御自身丈ハ屹と御盡力可被成旨態と

公用人を以御沙汰も被爲在候末右之次第ハ勢を被謀候而之御權略歟と被考申候然處會藩之密話ニハ前文之通御伺ニも相成候得共現實之御運ハ永井様戸川様不日御着阪ニ付直様御談判として御出張之筈ニ候由且御進發御札問之御布告ニハ可相成候へとも將軍様華城御動ハ先不被爲在趣ニ而内輪之御切組ハ大概御國說ニ相成居候様被考申候委細之儀ハ別紙言上寫ニ而御承知候様存候

一從江戸之來札並探索書等遂披見指進申候攝海之夷艦近日十三艘ニ相成候山右付而御談判之御模様等爲探索幸ヒ森井惣四郎參居候付昨日より早打ニ而兵庫表に差立候事ニ御座候右夷艦一件種々懸念之次第ハ別紙得御意候通ニ而内々會藩等承籍候處於彼方も段々研究之趣有之此方之見込をも相尋謀合候程之事ニ付公正を以盡力之覺悟と相見既ニ同藩廣澤富次郎も森井へ同道之申談いたし兵庫へ罷越居申候此節こそ屹と御廟算を被定義理明白之御談判有之度懇願仕候一賀陽宮様は御暇乞旁拜謁之儀申入置候處昨日四時比參殿いたし候様と之事ニ付罷出申候處前條國論之筋は殿下を初傳議奏ニ至る迄至極御同意之事ニ付不一方御盡力ニ相成候へ共橋公之論烈敷稍前文之處ニ落着之段重疊御心外ニ被思召旨追々御沙汰有之殿下別而御張込始末橋公と大議論ニ而有之たる由尤見込之通關老等出張談判と申運ニハ相成居候と之趣も被仰聞候儀夷船之一條懸念之次第等具ニ申上候處御尤ニ御聞上ニ相成且大阪兵庫開港之儀ハ横濱鎖之事さへ起り居候ニ猶此上兩港開ハ決而不宜と之御事ニ付横濱鎖港之儀は如何之御心算ニ可有之哉と伺見申候處攘夷鎖港ハ今日之事ニ無之先紀律節制を立交易等不當之筋無之様及談判候を手始ニして夫より順序を逐鎖港之事ニも及可申勿論攘夷之 徵慮ハ始終相立不申而ハ難相成旨被仰聞候且九州目之事情御憂慮之次第等ハ速ニ罷下太守様御始に篤と申上候様と之御沙汰も有之右等筆頭ニ難顯儀ハ下着之上直と及御相談可申候得共概略爲御含得御意置申候以上

九月廿四日

(郡 夷 則)

家 老 宛  
中 老 宛

慶 應 元 年

二二五

〔全書〕

先度長州家老穴戸備前廣島表に罷出徳山岩國上坂之儀御猶豫願出之趣有之候處先達而外末家並萩家老之内九月廿七日を限致上坂候様との御達ニ付右願書は御取上無之藝藩に御差返ニ相成候由此末若期限迄不致上坂候ハ、斷然御所置不被爲在候て難相濟云々被仰出候處猶於華城御内議之趣ニ追々御寛宥之御取扱ニ相成候末不應命候ハ、長防ハ不及申天下ニ御布告大旗被差向候様との趣傳承仕候此許ニ而評決之大意長防二國名義を押し立正激一致之勢ニ而再命といへ共御猶豫相願於名義欠闕無之様可仕候中々速ニ大旗被進候ハ、彼術中ニ陥と申ニ相成候且大藩を被征候至大之事件猶更名義正敷無之候而ハ難相成候付其罪狀篤斗御糺明無之此儘御討入と申ハ第一勅諭之御旨趣ニ茂被爲戻且は列藩之人心を被爲失御成績難相立加之於華城之旗下之士數日滯坂上氣陵夷實地戰鬪何程ニ可有之哉徒ニ虚聲被爲張候様之儀有之候而ハ此節御一舉無覺束候付五月此方様御建白之御旨趣を以衆決ニ相成候趣ハ御呼出之日限登坂不仕候ハ、閣老之内一人大小監之内ニ而も藝州へ御出張ニ相成兼而御不審之件々屹ト御糺問御請之趣ニ應正激御分斷寛御所置可被爲在若又御詰問件々明白之申譯相立候儀茂有之候ハ、夫々御開揚ニ相成實跡御見届無之候而ハ復命ニ難被及直ニ長防之致先導候様被仰付再願覽ニ相成夫々之御所置有之勿論激徒御誅伐ニ相成候ハ、速ニ大旗被進其機會緩急は其時ニ被應候様有之度若又是非大旗被進候而も御尋ヒ被仰出候御旨趣何方までも徹底仕候様有之度且御押出ニ而も御詰問有之候而其罪然明白仕候ハ、玉石共不燒様御所置有之候ハ、御征伐之御條理之相立可申候併前文之通猶華城御内議之通候ハ、乍恐御建白之趣御採用無之御征伐之名義難相立候付御國許御内々被仰付越候趣ニ而御先鋒御斷被仰上候武家當決ニ相成申候然之御勤之別段此許評決ニ相成申候同日木村得太郎尹宮様へ參殿右之趣を以思召奉伺候處至極御採用之由ニ而御合被置候様との御沙汰有之候新九郎一會桑三藩へ參り公用局へ申入候處三藩共少々宛異論有之候得共大略落合局中に申談君侯に茂可申上候との趣ニ御座候同日六日得太郎下坂仕大坂表詰御役々於此許評決之旨爲申談ニ下坂仕候同日一橋様御公用人面會仕候様申來候間罷出候處原市之進對面今一應申入之趣承度由一付御建白之趣且前條之次第具ニ申入候處

及承知申納言様は直様可申上候由ニ御座候同日七日一橋様御呼出ニ付罷出市之進應對昨日申入之趣具ニ中納言様に申上候處兼而被思召候御趣意ニも有之此節長州御所置之次第順序ニ無之候而之難相濟中納言様被成御承知候趣ニ而會津侯桑名侯に篤斗被仰談不違御下坂ニ付於華城茂閣老方に茂被仰談御使者にて御糺問之所ニ相成可申哉又大旗被進候而御糺問ニ相成候被豫メ難被仰聞候へとも何様御建白之趣且申上候趣々御聞置被成御盡力候由ニ付太守様御二方様は者御内々申上候様との御達ニ御座候同日桑藩に參り築摩市左衛門に而會猶不審之處有之候付夫々申入置候夫々會藩に參り公用人野村左兵衛外島機兵衛廣澤富次郎に而會仕委曲細談仕候處孰承知之由ニ御座候同日尹宮様は他之用向ニ而參殿仕候處直ニ被召出得太郎申上候通り御同意之由猶備ニ御尋ニ付申上候處殿下様に之申上候哉との御沙汰ニ付未々申上不仕候段御請申上候處夫ニ而ハ相成間敷直ニ參殿申上候様被仰付候得共日入前夕刻ニ而余り御無禮ニ有之候間御斷申上候得共此時勢ニ候へハ其等之事ハ御差支無之御書被下直ニ二條様に參殿拜謁被仰付近被召候而御尋被爲在候付巨細申上候其間御不審御詰問被爲在候得共御建白之趣且前條之通申上候處深御採用之由ニ而逆茂長征之所置ハ輕舉無之順序相立不申候而ハ難相濟候付申上候趣至極御採用ニ而被成御盡力候趣被仰聞候同日會藩に河添彌右衛門同道參り小野權之允面會段々論談仕候處局中申談君侯に申上候趣ニ御座候同日十二日六條様に參殿仕候處最早御承知之由ニ而被爲在候得共猶委敷申上候付至極御採用ニ而御同僚様何程ニ被爲在候哉奉伺候處兼而右邊之御論茂有之候尙委敷被仰談置候との御沙汰有之候十四日倉藩倉澤右兵衛に出會大坂方昨夕登京仕候由大坂表之様子相尋候處急ニ御進發御糺問之所ニ御運之様申事ニ付利害得失之所篤斗論談仕候大略落合候得共御先手計坊境ニ押詰御糺問ニ茂相成可申由ニ有之候間御糺問之時分列藩之兵ハ攻口々々ニ押詰候哉ヒ相尋候處未々其邊之心得不申由猶明日爰許御小屋ニ參り委細談合可申由ニ而同日十五日倉澤參り談合之内得太郎參り懸同席ニ而得太郎より委細論談仕候内桑藩築摩市左衛門參り一座ニ談合申候處築摩少々宛不審有之候得共積ル處倉澤築摩共同意ニ而罷歸申候同日十六日將軍様爲伺天氣御登京ニ相成候十七日會藩外島機兵衛去ル八日方立歸ニ致下坂一昨十九日之夕上京仕候付早朝ニ外島に參り様子相尋候處一昨日

同僚倉澤に談合之趣至極同意仕候而局中一議ニ相成已ニ昨日二條に登城いたし一橋中納言様會津侯桑名侯其外ニ茂御一座之處ニ而小野外島倉澤罷出備ニ中上候少々宛御異論有之候由ニ候へ共大略御順序相立御糺問罪狀明白仕候上正激共ニ被討候様ニ無之様御所置ニ相成可申との趣ニ被爲在候由同十九日桑藩森彌一左衛門參り是又談合數刻前文同様於二條御城追々御議論有之此節朝廷に御伺之草稿御出來之由ニ而未々他ニ露布堅相斷可申段ニ而遺候書付別紙之通御座候

一夷船追々到來兵庫並近海都合十三艘來船仕候處閣老方左程御驚愕無之余程嚴重成御居り被爲在候御様子ニ有之段森略仕候事

九月廿四日

淺井新九郎

九月廿五日閣老小笠原長行は更に本藩上田久兵衛林新九郎會藩上田傳次廣澤富次郎桑藩高野一郎左衛門松浦秀八等を引見して對外處置に關する意見を徴す

〔慶應元年八月  
坂長崎探 索書〕

上田久兵衛書取

(前文は九月廿三日の條にあり)

一今朝尙又壹岐守様より御呼出有之林新九郎も同道仕候様會津桑名に茂一同御逢之筈ニ付左様相心得候様との儀ニ而新九郎同導參上會藩上田傳次廣澤富次郎桑藩高野一郎左衛門松浦秀八一同罷出候尤壹岐守様ニ者御病後數日之御配慮昨夕より徹夜之御論談散々御不快之由ニ而御臥床之儘御逢先以豐州侯兵庫之御應接殊之外手強ク有之廿三日四ツ過方七ッ比迄御談判中頃ニ而暫時者御都合宜敷相成居候處各船ニ薩人頭ニ入込何敷參譯仕候趣ニ而日本之事情一々ニ承知此

節御上洛御參 内之御都合等委細然知々し居候より種々申察終ニ明廿六日京都に罷出兵庫開港之儀ハ直と 朝廷に御談判仕候段斷然決心如何ニ御止メ有之候而も一切取合不申前日之英佛とハ頓斗譯達全薩人參謀故之儀ト御當惑至極ニ而御物別レニ相成申候由就而ハ昨夕より徹夜之御論談有之一旦ハ壹岐守様ハ今一應兵庫ニ御出御談判有之候様且又誰ニ而茂志有之候ものハ被召速可然との事ニ而會桑并ニ久兵衛ふとも被召速管ニ御決定有之候處尙又打替り逆茂開港之儀御決答無之候而ハ對面仕間敷折角御出ニ相成對面不仕節ハ御失體之事故何様京地に出候儀ハ被差止明廿六日御城に出方ハ仕候様可被仰付との事ニ而今日立花出雲守様兵庫に御出ニ相成申候由此未如何いたし可然哉見込之筋御尋ニ付廣澤富次郎方此節御應接割服之御方二三人位無御坐候而者とても被行中間敷周防様外國御奉行之時分使節ニ御出全權之譯を以兵庫開港之期限等一己ニ御取極メ夫迄ニ日本ニ而開キ出來兼候ハ、英國之力を以勝手ニ開キ候様との條約御立ニ相成候ふと今日大ナル害ニ相成居申候由何様周防様御出張篤斗御談判御誠意を被顯候御處置も有之候ハ、承伏も可仕其上ニ而も彼より強而申候儀有之節ハ曲彼に在ル譯ニ相成可申今日曲直處を替居候而ハ日本焦土と相成候而も残念之段申上候處至極尤ニ者被思召候へとも右之通ニ相連ひ候御見込無之周防様ハ此節夷人之前ニ出候儀成兼候と不怪御迷惑迄ニ而一向御憤發之躰者無之趣ニ御座候久兵衛申上候ハ十七日ニ天保山に上陸陸路之御固場を破り過廿日ニハ安治川橋近く迄來込船番所を乗破り廿三日ニ者京橋迄來込順序を違相試候躰誠ニ可惡事共ニ而最早水陸共相防不申處を見究メ今度ハ大舉して淀川ニ浜り出京之覺悟ニ相違無之様相考申候明日御城に召之儀ハ如何ニも御失體残念ニ奉存候洋夷江戸ニ而登城仕候故爰許ニ而も同様との御見込ニ茂可有之候へとも治世之江戸城ハ御居館と見申候而も宜今日之浪華城ハ錦旗斧鉞之下ニ御坐候得者洋夷之可入地ニ無之重疊御不同意ニ奉存候へとも今更ハし方も無之候尤御城ニ而如何ニ御説諭有之候得とも迎も夫レニ而ハ濟中間敷是非出京之胸算ニ可有御坐然處征夷大將軍大兵を提ケ御出張之地ニ而穢之夷人御防留出來兼京地へ御入レニ相成候而征夷之御職掌相立可申哉乍恐將軍様御割服ニ而も遊し候外有之間敷敷々奉存候然ハ屹度其御覺悟相立押而登京仕候節ハ御討取ニ相成候様有之度兼而御用意無之節ハ俄ニ御



手管違ニ御不覺を御取ニ相成可申段申上候處是以至極御同意之段被仰聞候へとも寸斗御返答も明白不仕今日久兵衛登城ハムし豊後様伊豆様に篤斗申上候様御差圖有之候へとも御尋ニ付分外之儀茂如此申上候天下之大政ニ是より強而申上候儀ハ決し而有之間敷奉存其段ハ御斷申上候扱退出之上ニ一統申談候處逆も出京之御差留メ出来候休ニ無之此上ハ會津侯守護職之御場ニ而夷人を京に御入レニ相成候譯有之間敷乾度御差留之上相用不申節ハ無二念御討取之外有之間敷ヒツも評決私共見込候如此御取次を以申上置引取申候廣澤富次郎上田傳次ハ直様登城申談候件々委細申上見候由之處中々左様之場ニ無之各國ニストルハ日本國中何方に罷越候而茂差支無之候段兼而條約相決候事故京都に參候而も少茂不苦との趣夷人とハ成丈懇親仕候方乾度日本之御爲筋ニ而世界一統開國之時ニ相成候而ハ其開國を主張し日本を調和ハムし候儀則將軍之御職掌との御議論ニ而兎角薩之術中ニ陥り不申様との事而已專一ニ御沙汰御坐候由此分ニ而長州御征伐ホと申儀ハ如何相成可申哉土崩瓦解之勢 皇國覆滅之時節到來痛歎ニ堪兼申候昨夜四ツ過比御城より早馬ニ而橋公に者御直書會候に者召狀出申候由いつを兩公共今晚ハ御着坂可有之との事ニ御坐候へとも京地ニ而も殊之外薩を御氣遣之由ニ付兩公御一同之御下坂ハ如何可有之哉縱令御一同御出御評議有之候而も最早不可救之勢長大息之外無御坐候事

九月廿五日

九月廿五日閣老松前崇廣は其用人をして防長處置に關する將軍の奏狀寫を我藩及び兩支藩に傳達せしむ

〔大坂返達御用狀扣〕

九月廿六日 十月七日着

青地河口より

(前略)

一松前伊豆守様昨夕御呼出ニ付善之尤參上之處御封物一通御用人を以被成御渡今度御上洛ニ而御奏聞且勅諭之御書付入之由右一封差上申候且又兩御末家方に御差廻相成候様との趣ニ而各同様之御書付二封右同人を以被成御渡候付細川豊前守殿方一封差進申候右之趣を以可被有御達ニ存候

但御書付之諸家一統に御達ニ相成候哉相改候處御一統ニ申譯ニ之無之候得共西國筋之御業様に之大概御渡ニ相成候由御座候

一細川若狭守殿に之一通之近便を以江戸に差廻相達候様被取計可申候

(奏狀及勅答の寫は九月廿一日の條に在り)

九月廿五日長藩老臣宏戸備前藝藩によりて歎願書を幕府に提出す

〔尊攘錄探索書、風聞書〕

慶應元丑年

藝州家より早打を以差出候書付

今午刻過毛利大膳より毛利出雲を以差出候書而恐入候得共急速之儀ニ付其儘國元より差越候ニ付不取敢御達申上候

九月

早略御許容可被下候此頃追々承り候得ハ攝海に異船數艘來入何歎願立之儀御座候由恐察之至奉存候然處其内大膳所持之蒸汽船ニ而異賊共同様之姿ニ而致碇泊居候由甚以恐懼之至深奉恐入候右乘込居候人數も見聞ニ不及儀ニ付駭と確證難申上候得共兼而貴藩ニも昨年來御聞込之通騎兵隊戰炮隊と唱來候暴徒始終兩隊不折台之處此度御再征之台命右之近々御人數御差向ニも可相成由ニ承候處右戰炮隊之者共如何相心得候哉此程一同蒸汽船ニ乘込夜中遶ニ國元脱走仕候儀此過日委細御同申上候通ニ御座候如何之企も可仕哉と一藩申居候處近頃前件之風評國中專ニ付全右暴徒之姦謀と奉存候甚以恐入候儀ニ

慶應元年

御座候得共何卒此機を無御失礎泊之諸賊共不殘殲滅相成候様何卒此儀貴藩より分而御周旋之程圖藩舉而奉渴望候左モ  
之自國猶滞在之諸隊始追々嚙伏之場ニも可相成候哉と奉存候就而ハ先達而被仰渡候儀も急度奉命之良機會とも可至  
哉と奉存候何卒此段幕下は急度被仰上被下候ハ、大膳父子之申迄も無御座兩國之人民無此上儀と舉而奉懇願候泣血百  
拜

九月廿五日

大 戸 備 前 名判

松平安藝守様 麾下 イニナシ

九月廿五日一橋慶喜將軍の召により今夜大坂に下る

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

一橋中納言様昨夜五半時比御乗切ニ而御下坂相成候段大和屋喜久松より知せ來申候間此段御達仕候以上

九月廿六日

淺 井 新 九 郎

郡 夷 則 殿

九月廿六日一橋慶喜今曉大坂に着す時に井上主水正英艦に至り兵庫開港の決定を十日間延期す  
べき談判をなし其の承諾を得たり尋て閣老阿部正外松前崇廣外交の處置を誤りたるの故を以て  
所對せらる

〔新美記録〕

一同廿五日小監察并御便番登人宛大樹公御直書并閣老方之書翰持參大坂より早打ニ而着京御直書之趣ハ國家重大之事件危

急存亡之義差起候間橋公會候急連御下坂ニ相成候様被仰遣候由ニ而橋公ハ御届限ニ而直様御下坂 大樹大坂留之趣急連  
下坂候様申來候何分火急之義ニ而難延大事と相聞候間只今ハ急足仕候尤留  
守中當時急連御向之義ハ松平肥後守松平越中守厚申合置候段御届ニ相成申候  
會候は御下坂之義御願ニ相成候得共夷人共押而上  
京之唱茂有之候砌ニ而大切之時勢ニ付ケ様ノ時之守護職ニ候得之京師に殘居 禁國致守衛候様被仰付御下坂之義御許  
容無之橋公御乗切ニ而森口云處迄御出ニ相成候處華城方御使者參り最早御下坂ニ及不申段被仰遣候由ニ候得共折角  
是迄罷越候義ニ付華城迄ハ參見可申とて浪華城に御乗付被成候處華城ニ而之白川松前兩閣老申合右十日之期限を十一  
時と彼方切迫ニ中立候趣ニ取成三港之内兵庫ニ是非共開港之意氣込ニ而十一時之内ニ返答致候様若於幕府取計出來兼  
候得之彼閣下は罷出直ニ可申立申張種々論議を盡應接致候得共何分承諾不致中々談判六ヶ敷若返答遅延ニ及候ハ、直  
様押而上京殿下に直ニ談判可致旨申察候間一刻茂兵庫開港差免不申時之忽兵端を開可申趣ニ申立右兩閣老取切ニ而兵  
庫開港御差免ニ御評決ニ相成白川侯ニ之右開港御差免ニ御打立御乗切ニ而御出懸被成候處ハ一橋公御行達被成白川侯  
を御呼返夷情等御尋被成候間一應御話被成候處御論議茂御座候由ニ候得共前條之通至而切迫ニ事差迫候義を以御論議  
ニ相成候間橋公茂左様ニ成行候様候も無是非次第ハ御同意ニ相成候由ニ而尙被仰候之是迄永々天下之爲  
を思ひ致盡力候義茂無其詮ケ様ニ成行候而之禁國御守衛茂無甲斐次第明日方京師引拂可申今日之世中之暇乞被仰  
候由ニ而右開港之義會桑二候に委細被申遣候右御話台等手間取白川侯御出延引致し期限差延候而之大事ニ及可申とて  
大坂町御奉行井上主水正様御乗切ニ而兵庫に御出夷船に御乘込實情御打明斯々之次第ニ付將軍ニ茂大ニ當惑既ニ將軍  
職茂御斷ニ相成可申程御差迫りニ相成居候間最早十一時之期限ニ茂及候得共此節之義ハ何分至急ニ返答出來兼候間今  
暫相待吳候様被仰向候處異人茂不怪仰天仕何故左様迄ハ御差迫ニ相成居候哉全弊此節當港に罷越候義之手前ヲ押而參  
候義ニ之無之既ニ先頃於横濱閣老御應接之砌當港に罷越候様被仰聞候得共長防御征討前御混雜中罷出候而之御妨ニ之  
相成不申哉と申候處能期會ニ付罷出可申左候ハ、兵庫開港出來可申旨被申聞候間罷越候義ニ御座候期限之義茂大事件  
ニ付篤ニ御熱評ニ相成日數十日限御返答ニ相成候様夫迄ハ當港に扣居候御約定ニ御座候段申向候間井上様ニ。大ニ御

仰天被成其座ハ程能御取成直様御乗切ニ而華城に御歸ニ相成候途中白川侯ニは橋公ト御談判相濟橋公茂一旦御同意ニ相成候間御乗切ニ而開港御免ニ御出被成候處に御行逢被成候間何様御引返被成候様夷情は斯々ニ付御出被成候而之不宜ト白川侯之馬之轡ニ取付俱ニ御歸城ニ相成外夷カ申出候件々被仰立候間白川松前兩閣老之姦計露顯致し兩閣老は御引入御登城御差止メ開港之義ハ御取止ニ相成申候橋公カハ會桑二侯に昨夜委細申遣候開港之義豊後守伊豆守不取計之義有之候ニ付兩人之相割し開港之義之御止ニ相成候間否之次第拙者上京ニ而可申上吳々開港之義之御止ニ相成候間申遣候間白様御始に可然被仰上可被下候との義以急飛被申遣候左候而橋公ハ同廿八日御歸京翌廿九日御參 内

〔風聞書〕

慶應元年八月  
九月十三日已來京大坂邊混雜之次第(抄)

(前文は九月廿三日の條にあり)

一阿部侯兵庫に御下り應接被成候處五ヶ條難題申立廿六日晝時迄ニ決答無之候之天保に乘込放致し大坂城乘取候旨申立候閣老始め一同恐怖致し橋府會藩呼下し相談可致と京師に早飛脚差出し種々評議有之候處紛々無量ニ議論生し候其趣意之長征御懸り之折柄此地ニ異變生し候而之御一大事ニ付價金差出し期を延し征伐相濟候ハ、幕威も張可申故御勢ニ乘し思ふ儘開港モへし或之京都ニ而之時勢御辨へ無之鎖攘之儀彼是被仰出候之甚不宜ニ付異人申立候通京師に差登せ候ハ、開港ニ可相成或之長防之御所置御方附無之御多事之折柄外夷渡來若彼兵端を開き候ハ、内外之爭亂ニ相成候故幕之御廟議ニ之至り兼候ニ付強而開港之儀御願若京師ニ而御承引無之節之京師之思召ニ任せ大將軍ニ之御辭職被遊關東八州御守時機を御待被成候方可然ホト々區々ニ而御一決無之處最早期限廿六日ニも相成候故兎も角も開港御心組ニ而日延相談し京師を取拵へ可申と御評議一定致し内々御上洛之御沙汰有之阿部侯ニ之兵庫に御下り被成候處何人之差圖ニ候敷市伊井上主水正兵庫に罷下り應接致し候處十日日延致し候間緩々相談致し其上ニ而決答可致旨夷人共より

申出し意外之事ニ付速ニ言上可及と引返し候處西之宮ニ而阿部侯ニ引合同所ニ而委細之趣言上ニ及候處阿部侯ニも殊之外大悅被致直ニ御引返し登城之上猶御評議有之十日之日延ニ相成候而之急御上洛ニも及間敷橋府會津之下坂も差留可申と飛脚差立候處會侯之御暇出不申橋府のミ乘馬ニ而牧方迄御下りニ相成候ニ付同所ニ而言上ニ及ひ御引返し有之候處是迄下り候事ゆへ兎も角も下坂致し直ニ承り見込之儀も可申入と被仰其儘御下坂直ニ御登城翌朝御上京被成候一廿七日も御評議京師に被仰上候儀有之趣ニ尾州公小笠原侯御一同未明御出立ニ相成候處御評議相變り候處尾州公御引返し相成候様被仰進候付橋本宿迄御引返しニ相成小笠原侯ニ之直ニ御下坂ニ相成申候

〔大坂返達御用狀扣〕

文久三年四月以來

九月廿九日

十月七日着

青地  
河口

京都より之早打御飛脚今日下坂直ニ被指立候付致内啓候此間兵庫砲泊各國軍艦之儀之同港并大坂開港之儀迫り申出御應接も被届兼候勢之趣傳承之儘權兵衛(河)カ追々及御文通候通ニ御座候處一昨廿七日晝幕桑藩森彌一左衛門儀源右衛門方に參り今晝 御城に會藩手代木直右衛門罷出一橋公に拜調仕候處兵庫大坂開港御手限ニ御差免之御返答として白川侯(阿部)兵庫に御遣之處同侯御着前井上主水正殿御應接有之左迄相迫候譯ニも無之右開港之趣ニ 天朝に御伺取其上ニ而いつまをそ御返答有之旨ニ被決凡廿日計之御返答期限被等相待候様談判ニ相成候間 將軍様御直ニ右御伺として御上洛被爲在候御運ひ相成就而之白川松前之兩閣老 上に申上之次第井上殿應接之模様と致相違候間兩閣老之御身分御伺出有之旨之段被仰聞候由一橋公ニ之直ニ 御城より晝後御乗切御歸京ニ相成一昨日之御様子と打替候次第實ニ難有評候間手代等申談不差置有之趣内々知せとして罷越候段申聞候尤右付而ハ京師に先刻急飛差立御屋敷に之申上候様申遣置候間定而御通路爲仕儀ト奉存候段も申聞候付猶昨廿八日挨拶旁前文之趣再問合として彌一左衛門旗宿に罷

越致談合候處白川松前之兩侯ハ一橋公カ之御沙汰ニ而御伺御差扣之筈之處既ニ昨夜今朝、御城ニ而御供待いたし居候由ニ付猶御模様替ニ可有之哉も難計彌一左衛門 御城に罷出見申候處昨日一橋公ハ御歸京ニ相成右兩閣老之御登城ニ相成居候得とも兩侯に伺候譯ニ之無之御應接有之候井上殿に伺可申と存候得共今朝天保山に彼船來船候由ニ而應接として御越ニ付松平大隅守殿に御逢相願伺候處 天朝に御伺として 御上洛之儀之勿論御相違も無之右付而ハ尾州玄同様小笠原壹岐守様一昨日カ御上京ニ相成居候得共御呼返として御途中に急使被差越今夕迄ニ之御歸坂直ニ御登城御評議有之筈ニ相成 朝議御伺濟ニ而御返答之來月七日迄と期限御定御應接相成候由懇ニ致噂扱又板倉周防守様を至急ニ被 召寄候儀御達も出勞能事と存候趣申聞候以上

猶々今日御城ニ而御城使御坊主カ聞取之趣書付猶爲御承知差進申候以上

今日 御城に御城使罷出承候趣ニ而之玄同様小笠原壹岐守様昨夜五半時比御途中より御歸坂ニ而直ニ御登城御役々御一席ニ而御評議有之今曉八半時分御退出ニ相成候而猶御登城直ニ京地に御發足ニ相成候御支度之趣ニ相聞左候而京地之玄同様壹州様御取締ニ相成候間先 御上洛之方ハ御沙汰止ニ相成候との趣ニ御座候由御坊主山本道知カ承候段申出候以上

九月廿九日

青地 源 右衛門

〔京都大探 索書〕

淺井新九郎書上

慶應元年八月  
〔前文は九月廿三日の條にあり〕  
五カマ、  
京都に右御書翰廿三日午刻過ニ相達申候橋公會侯桑名侯ニ條様に御打寄御衆議朝廷より會侯御暇無之候付御下坂無之橋公暮六時比御發馬於伏見御下坂無之様との趣閣老より書翰到來いたし候得共直ニ御下坂御登城ニ相成候處最早開港

之御決評兵庫に被仰遣候時位ニ而被成方無之次第之山候處小笠原閣老に被仰談御盡力有之大坂町御奉行井上主水正様を一橋公被召候而應接之次第御尋ニ付右期限十一時之趣豐後守様より被仰出候得共實之右様ニ切迫ニ無之外夷も皇國政府多難之段ハ承知いたし居候付此切迫之折ニハ兵庫開港之不仕本意候得共幕吏より被迫此機會ニ乘し切迫ニ申立候様被申聞候付來泊仕候由實之期限日數十一日ニ而<sup>十一時十一日</sup>來月五日迄ニ有之候處豐後守様増々切迫ニ被仰出候由始而一橋公右計策御承知ニ相成候間會桑侯に御書翰左之通  
以急飛申進候然之昨夜委細申進候開港之儀豐後守伊豆守不取計之儀有之候付兩人ハ則刻相聞候開港之儀之相止ニ相成申候開否之次第拙者上京ニ而可申上吳々開港之儀之御止ニ相成候間此段申進候不具

九月廿六日

中 納 言

肥 後 守 様  
越 中 守 様

關白様御初可然被仰上可被下候以上

右御書廿七日之夜四時分御使番兩人溝口官兵衛荒川瑛太郎早馬會津に被相達候趣會藩諏訪常吉桑名ハ御使者相勤候辰り直ニ御陣屋に爲知罷越候時分正八時諏訪噂ニ而大略承候得共猶今朝一橋府に參り承候次第荒増如此御座候事  
一 一橋公廿七日迄ニ大概萬事被決會藩倉澤右兵衛御城に被召右之次第被仰聞候節御城中靜成様子ニ有之此通ニ而之相成申聞敷一刻後早御人を被得候外無之候付板倉周防守様被召候筈ニ御沙汰有之候由今朝承候處最早被仰出候由  
一 一橋公昨夜九時比御歸京ニ相成候事  
一 將軍様明日御上洛被仰出候由  
右之通御座候以上

九月廿八日 巳刻罷

慶 應 元 年

淺 井 新 九 郎

二三七

〔肥後〕  
上田久兵衛先生略傳並年譜

九月廿六日

○今日日本崩御

今日橋公御着直ニ御立之模様大ニ疑惑、棚倉侯兵庫行、夷人登城止との事稍緩也ニ喜ぶ  
夕諏訪倉澤來、今日開港被差許奏聞も無之大事去、

會藩是切ニ他人を見ず、決別の爲ニ來、且泣且飲、五過森松浦來、各別手再會之期ナキヲ歎ス、佐野行發其事ヲ然  
ス、佐野同意、直様轡ヲ命シ八軒屋立寄、手代木哭聲、勢(？)屋一酌、飲泣、諏訪一同發轡、擊折七聲(日錄)

○去廿六日朝廷にも奏聞無之兵庫開港御免之儀阿部松前兩閣老御取計ニテ滿城御評決、廿五日之夜半一橋様も御着坂ニ  
て御論談有之候へ共、夫も不被行、壹岐守様にも余程御盡、責而ハ奏聞の上にと被仰立候へとも一切行レ不申、迎も  
朝廷にてハ御許容無之事明白ニ付伺居候中ニハ彼等より兵端ヲ開キ、所詮屬國と成候外ハ有之間敷、徳川之御代ニ而  
皇國ヲ夷人ノ屬國と成し果候而ハ如何にも御面目無之、若奏聞不仕儀御譴責有之候ハ、直ニ將軍職御斷と申處ニ斷然  
御決心、廿六日の晝後ニ阿部閣老御乗切ニ而兵庫へ御出、開港御免ニ相成申候、其跡ニ而會の公用人四五人登城、一  
橋様より右等の始末伺取、最早天下は是切ニ而公武の御扞格、列藩の沸騰、肥後守是迄盡力仕候も水ノ泡と相成、口  
惜キ事無情事を被成候連、皆々一同ニ聲を發し泣申候由、一橋様も殊の外御當惑、しかし致方無之、其儘引取、最早  
外交の面目もふし、會候には御辭職、罪ヲ國ニ御待ノ外ハ有之間敷、何様是迄天下の事ニ世話いたし果候上田ニは、  
是迄の禮を述、且暇乞をいたし、爰許引拂可申との申談ニ而、私下宿へ參り、何分面目も無之次第と落涙、無程、桑  
名も盡參り、離杯を酌、是より東西に引別レ、再會の期ハ無之候へとも、天下戰爭の時ニ相成、西國ニ兵起ル時ハ、  
上田ハ如何、定而未練の死はいたし可不申と御念頭ニ上可申、東國の戰爭有之日ハ會の面々も御想像可被下、是丈懇

切の末ニ付夫を今生の交りといたし可申と、云ては泣ノ、夫ハノ、悲敷事ニ御座候(九月廿八日上田書狀)

○夫より佐野へ行、段々咄し合、兎角此節の大變、御國之御覺悟筋と相成候事故、私御國へ馳下候外有之間敷との見込  
ニ候へとも、何様一應京都え馳上り夷則殿見込次第可仕と共盡打立、駕籠の手配調候迄八軒屋の會の下宿え暇乞、返  
禮ニ立寄候處、此上ハ天下の事ハ何と可申、何とそ肥後守所分筋を失ひ不申様ニ御心を被添可被下と、手代木等豪邁  
の男聲も不惜泣申候、日本の崩御ニ而御座候間、男子の泣時ハ今日ニ可有之、私も共ニ落涙數刻ニおよひ、曉七ツ前  
諏訪常吉一同早追ニ而出立仕候(九月廿八日上田書狀)

九月廿六日所司代松平定敬異船攝海に入り異變豫測すべからざるを以て警衛を嚴にすべきを達  
す

〔長州再征帳〕

慶應元九月廿六日御所司代松平越中守様御渡ニ相成候御書付寫

攝海に異船渡來出願之儀ニ付談判有之候時宜ニ依り非常之儀可有之步難計ニ付猶此上嚴重御警衛可致候

九月廿六日郡夷則は書を藩政府に贈り外人兵庫開港を迫り幕吏逡巡事甚急なるを告げ皇國の爲  
めに一新の國議を確立すべきを陳す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ  
以早打申達候攝海渡來之外國人ハ重大之事件申立十一時を限御返答無之候ハ、押而可致登京との趣ニ而誠ニ危急存亡  
御國家之大事件ニ付 朝廷に之御届拾ニ而橋會へ御下阪之儀從華城被仰下候との趣會藩より承込候昨夕探索生より  
相達候付直ニ御奉行已下申談御陣屋中御用之外御門外差留不慮之備相立居候様一統及達せ御番頭御物頭に別段相含  
置候處今朝從大阪林新九郎早打ニ而着申出之趣之阿部閣老去ル廿三日京地より下阪懸直ニ兵庫へ御越外夷御應接之處

慶應元年

松平周防守様外國御奉行御在勤之節八箇條之約定書有之第一兵出開港期限ニ至候ハ、外國之力を以開發御許容ニ相成居候付此節右開港御免無之候ハ、兵端を開可申趣申立候付 朝廷之御模様且長防之事件等を以斷延之御談判ニ被及候處英蘭之何とか承引之形ニ相見候へ共佛夷一切聞入不申猶渠等談合之上其備閑老手元ニ而難出來候ハ、京都へ罷出城下へ可及直談一途ニ申張御指留出來兼候付今廿六日華城へ罷出候様左候ハ、役々列席猶可及談判との事ニ而御歸城ニ相成候由右御模様相伺會藩士より阿部小笠原兩閣老へ種々獻言御役人様之内御腹を被指出御談判之御方被爲在候ハ、承引茂可仕との趣茂申上候へ共一向御取合無之のみならも滿城倫安廉恥之風なとハ露程も無之只々撫付説迄ニ而何之手段も付兼候由別而周防様ニ之御自身之御仕損故何分談判も出來兼候位之事ニ而一身殉國之御覺悟杯ハ存懸無之由誠ニ絶言語候爲體ニ而積り今日於華城將軍様直と夷人へ御説得と申ニ決着之由定而屈膝御斷之御目算と被考切齒歎慨之至ニ御座候然處於會藩ハ右御説得ニ而承引可致見込ニ無之押而致上京候ハ、縱令幕命ニ戻候共守護職之任其儘難相濟兵力を以防留可申覺悟之段も申上置候由右之次第にて何時押登跋扈之程も難測歩御使番歩御小姓之内山崎伏見兩道に物見を懸置御人數繰出等之儀手配ニ及置申候右ニ付而寺尾交代之御番頭以下御地出立之比合ニ付早打ニ而罷登候様可被及御達ニ存候當御陣屋中至而御人少ニ候得共 朝命ニ從ひ何方に茂押出必死防戰之覺悟ニ而御番頭等に茂夫々申談尤少人數分配之趣茂六ヶ敷一步ニ而茂敵ニ近キケ所ニ候へ之寺町之方御斷之筈ニ御留守居へ申含置候事ニ御座候情前文新九郎委細之咄之中々筆紙ニ難盡實以幕府之近狀一々見聞ニ不忍程之事ニ而二百餘年之御德澤茂今日限之御氣運ニ被察最早御周旋之見込迎之絶而無御座此上之御國之御覺悟筋最御大事と奉存候間於御地篤し御衆議を被擬乍恐上を奉始公子方思召を茂乾し御伺 皇國之御爲一新之御國議御確定被爲在度改而申上候迄も無御座候へとも此交ヒ愈以王守御尊崇之御實意ハ何處々々まで茂徹底仕居不申而ハ後道之變革ニ應御事業上之御差礙ニも相成可申候間夫等之境も猶御研究時宜至當御至誠之御處置被爲在度奉懇願候事ニ御座候以上

九月廿六日

郡 夷 則

惣 連 名 殿

尚々橋公昨夜五半比御乗切ニ而御下阪會公ニと京地へ御滯之由ニ御座候已上

九月廿六日長藩使を廣島に遣し末家並に吉川監物病未だ全く癒えざるを以て先づ家老のみ不日出發せしむべき旨を幕府に傳達せんことを請ふ

〔尊攘錄御建白御國議〕

九月廿六日

長州御使者

中 谷 茂 十 郎

前日以使者及御答置候通從 幕府御達之趣末家並吉川監物に相達候處孰茂舊年已來之病氣確し無御座重キ御沙汰ニ付而も差押候而茂發途仕不申而之不相叶筈ニ候得共常節之躰ニ而は何分不任心底無余儀御斷申上候然ル處重大之御沙汰筋餘り遷延打過候而は如何ニ茂奉恐入候儀ニ付不取敢家老計支度次第發途爲仕候心得ニ御座候尤末家豊人監物共少々快方ニ候ハ、差押可罷出候得共其中名代ニ而可然御事ニ御座候得は御差圖次第早速可差出候旁之趣 幕府へ宜敷様御取計致御頼談候

毛利家より別紙之通國許に以使者申越候ニ付則差出申候書面之趣御差圖被成下候様安藝守申付越候此段申上候以上

松平安藝守家來

宮 宅 萬 大 夫

九月廿九日

書面之趣之末家並吉川監物病氣少ニ而も快候ハ、家老一同大坂表に罷出候様可被相達候

九月廿七日日本藩留守居上田久兵衛馳せて大坂より京師に還り幕議兵庫開港を許し將軍辭職に決せる由を報す

慶 應 元 年

〔慶應元年日記〕

九月廿七日

一(前文略)今日上田方大坂へ早打ニ而歸京 幕議兵庫開港御免ニ相成 將軍職御斷と申ものニ御評議相決候由右ニ付而之早打と相見へ候右等之譯ニ付而歟木村御奉行之明日當り御國へ早打ニ而差越候筈之由

鈴木登編  
〔肥後上田久兵衛先生略傳並年譜〕

九月廿七日

○八ッ過着京、郡大夫へ行、淺井、林、河添一同坂地之概敷談、余西下之説ヲ發ス、採用無之歸り熟考、又郡大夫、河添、木村等へ行、存念之筋逐一申談、尙熟考可有之との事ナリ夜半過、諏訪來り、橋公之御書内々持參、豊、豆兩開老共不取計之筋有之、御答ニ而開港被成御止様との儀申來、諏訪敷無極、七ッ頃歸ル(日録)

九月廿八日

○大夫(郡)より召、行、夜前木村へ早打被命候一件、余ハ今暫拘留之趣意等辯解有之、尤今晚之一左右ニ付、何事も打止、又々下坂之方可然との事

九月廿八日大坂城に於て會議あり尾張玄同小笠原長行上京して將軍の上落は之を中止することに決す

慶應元年八月  
〔京都大探 索 書〕

御坊主より聞取之趣

今日御城に御城使罷出承候趣ニ而ハ玄同様小笠原登岐守様昨夜五半時比御途中より御歸坂ニ而直ニ御登城御役々御一席ニ而御評議有之今晚八半時分御退出ニ相成候而猶御登城直ニ京地に御發足ニ相成候御支度之趣ニ相聞左候而京地ハ玄同様登州様御取締ニ相成候間先御上洛の方ハ御沙汰止ニ相成候との趣ニ御座候由御坊主山本道知より承候段申出候以上

九月廿九日

青地源右衛門

九月廿八日郡夷則更に書を藩政府に贈り幕吏の奸計曝露したるを以て之を處罰し開港中止となりし事情を報告す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ  
以別紙申達候一昨廿六日於華城外夷御談判之管付而者急脚を以委曲得御意置候通ニ候處豈圖ヤ 朝廷ニ御伺茂無之直ニ兵庫開港御免之御評決ニ而阿部開老同所に御越ニ相成候由昨日上田久兵衛早打ニ而上京委細之趣相達申候所迄幕府御衰弱トハ夢々不奉存從御國是迄御誠實之御周旋も水之沫ト成行長大息共何とも言語ニ難述只々茫然たる計ニ御座候就中會藩之心中最可憐之次第ニ而天下ニ而目相立不申進退今日ニ相窮候逆皆々號泣いたし居候由ニ御座候右之通御非禮御失體を被重候而之自ラ征夷之職掌を被爲失四分五裂最早不可救之勢ニ相成此上之御國議之基源ニ派り皇國之御爲義理之上ニ就而御處置被爲在候外有之間敷恐考仕候へ共御國家重大之儀ニ付何様尊慮を奉伺御國議一定之上此許詰一統之覺悟筋を度相示申度其外御用之件々木村得太郎に逐一申含早打引返ニ而今日此許差立候筈之處昨夜半會藩諏訪常吉乗切ニ而淺井新九郎御小屋へ參開港一件阿部松前兩開老不取計之儀有之候付兩人を相罰開港ハ相止候との趣橋公より會桑二侯へ御直書到來ニ付不取敢相知せ候段申出候由右ニ付而新九郎儀今朝橋府に罷出伺取之趣等ハ則別紙書取之通ニ御座候幕吏より外夷之軍艦を促危迫之體ニ取捨兵庫之開港を許可申との企之末末之奸臣ニ茂劣り果實ニ皇國を賣

慶應元年

二四三

之賊肉を喰ても飽足不申候流石國運未盡一人之直言より姦計忽チ相顯候儀之偏ニ神明之御加護歟と感喜之至ニ御座候此上之 朝暮一致之御神算相立義理明白之御談判を被遠度奉萬祈候計ニ御座候右段々之次第ニ付得太郎出立之見合候様及差圖態ト早打飛脚を以申達候事ニ御座候以上

九月廿八日 惣 連 名 殿

郡 夷 則

九月廿九日朝廷時局切迫につき一橋慶喜及び松平容保を召さる

〔慶應元五年〕  
〔風 聞 書〕

九月十三日已來京大坂邊混雜之次第(抄)

(前文は九月廿六日の條にあり)

一會津侯ニも鎖攘之見込ニ而昨今迄も御周旋被成候得共一事も御取用無之ニ付憤愁切齒被致此上京師御見込之通り鎖攘ニ決し候得之幕ニ背き進退致し候方無之退職ニあるすと一身決定退職之儀申出被引籠候處廿九日未之刻過頃不易時勢ニ立至り退職候而之如何ニも不都合ニ付恐入候儀有之候ハ、後日相愼可然候間即刻參 内可致旨從御所被仰出候ニ付橋府御同道ニ而直ニ參 内致し候  
一京師ニ而之鎖攘之内ニ御決定御動之無之肥後土州久留米等是迄開港論之者迄も鎖港之決定ニ候得とも幕ニ而之開港之見込ニ而種々議論有之故外藩諸侯之勿論御譜代草莽之者迄も有司之者之種々周旋致し候由依之公私之奔走夥敷淀川筋之往來之櫛之齒を引ることし

十月朔日朝廷閣老阿部正外同松前崇廣の職を免し謹慎を命ぜらる

〔慶應元五年〕  
〔風 聞 書〕

十月九日

浪華來狀

兵庫表夷人共上陸彼是申立開港條約爲取替不申上之可及戰爭旨申立候右ニ付白川侯松前侯彼地に御越其後御歸坂十月朔日晝之内右御兩人御登城有之候處夕刻ニおよび俄ニ從御所官位被召上於國許愼御沙汰相待候様被仰出ニ相成申候

〔全 書〕

九月十三日已來京大坂邊混雜之次第(抄)

一朔日も廿九日も御退出無之引續御評議也今朝會藩井深某京師より早飛脚ニ而着閣老衆に罷出晝頃小笠原侯京師に御出立七時頃阿部侯松前侯御退出再ひ御召夜九時頃御城代屋敷ニ而御役御免之旨名代之者に申渡有之直ニ松平伯耆守方諸向に左之申渡有之

阿 部 豐 後 守

名代 松 平 信 濃 守

松 前 伊 豆 守

名代 松 前 靱 負

愼慮之旨も被爲在候付官位被召上於國許愼御沙汰相待候様御所より被仰付候依之御役御免被成候在所に罷越愼可罷在候

〔全 書〕

十月十一日朝着江

同五日夜五ツ時京都出立

慶 應 元 年



越前侯之早駟之由京師模樣書(抄)

一兩閣老阿部御免之義相尋候處右之難解候得とも過日京師方今度攝海渡來之夷船ニ付而之兩閣老より外夷に内告之筋有之趣御疑心之筋被仰出候由ニ付御上洛中敷又は御下坂後兩閣老殿下亭に被相越今日被仰出候御疑惑之儀之毛頭覺無之旨種々辯解被及候得とも更ニ殿下御用ひ無之御退座ニ付御衣ニモ入り辯解之程も有之由ニ候得とも御用ひ無之由共儀去ル朝日之次第ニ至り候事之由

一説之外國人應接之儀之阿部侯ニ無之而之難解廉有之ふと申立候由其上薩人も乘込居候由之事

右等之趣迄早駟之雁々之内相洩候事

十月朔日幕府は尾張玄同をして將軍家茂の辭表を携へ上京して之を二條關白に提出せしむ

〔風聞書〕

九月十三日已來京大坂邊混雜之次第(抄)

一廿八日廿九日も御評議種々ニ差違居候處廿九日夜ニ至り彌開港不相叶節之内外之儀致方無之御辭職之御一決三更頃方御願書御草稿有之直ニ御本書御認十月朔日尾州公御持參ニ而御上京之由扱も、泣血憂苦致候

〔全書〕

十月十一日朝着江  
同五日夜五ツ時京都出立

越前侯之早駟之由京師模樣書(抄)

一將軍威御辭退一橋公御相續御政務筋御讓之御願書之玄同殿(前尾張藩主茂德)御持參御上京之處御役方何と敷旅館に被相越候或又之殿下亭中敷不詳一橋公尾州公に今日之上京何等之御用筋と被承候處國事之儀ニ付上京之事と計り被相答候ニ付一橋公誠意柄如何と再三

被仰候處尾州公今日上京之儀之重き台命不容易事柄ニ付奏聞不相濟内之如何様被申候共他言之決而不致被相答押而殿下亭に被相越將軍家名代之趣被仰入候處殿下幕府名代と有之候而之於亭ニ對面之儀不相成被相答候處再應被仰入候ニ付殿下左様之儀ニ候ハ、尾州家之儀之拙家間柄之儀ニも有之事ニ付私用を以對面可致旨被申出則對面之上前文御辭職之御願書御差出之處右様之儀ニ候ハ、參 内之上と被仰出即刻御參 内其節之一會桑何をも參 内被仰出候事

〔新美記錄〕

廿八九日頃ニは大樹公御上洛之唱茂有之候處御上洛ハ無之玄同公御封書御持參十月朔日大坂方御乗切ニ而御上京之段京師に申參候間一橋公會侯桑侯御乗切ニ而伏見迄御出ニ相成候處玄洞公ニは夜半伏見御着將軍職御辭表時勢之儀ニ付御奏聞之御封書等御持參之由ニ候得共三公公此節御上京之次第等直様御尋被成候處御封書御持參ニ之相成居候得共一向何たる義茂辨不申との御返答ニ而まかと御趣意相分不申候由ニ而御引返曉八ツ過御歸京被成候玄洞公ニモ二日之黎明御着京同日橋公玄洞公會侯桑侯殿下に御參殿玄洞公右御封書殿下に御差出被成候得共殿下御取押ニ而表向ニ之相成不申候由

〔京都大坂長崎探索書、長州再征長、長防再御追討一件、江戸返達御用狀控〕

臣家茂幼弱不才之身を以テ是迄叨ニ征夷之大任ヲ蒙リ乍不及日夜勉勵罷在候處内外多事之時ニ膺リ上 宸襟ヲ安シ奉リ下萬民ヲ鎮ムル不能加之國ヲ富シ兵ヲ強シテ 皇威ヲ海外ニ輝シ候力無之竟ニ職掌ヲ汚シ可申ト痛心之餘胸痛強鬱閉致シ罷在候然ル處臣家茂家族之内ニテ慶喜儀八年來 閣下ニ罷在事務ニモ通達仕大任ニ堪可申奉存候付臣家茂退隱慶喜ニ相續爲仕政務相讓申候間臣家茂時ノ如ク諸事御委任被成下置候様偏ニ奉希上候尤當今時務之儀ニ付而ハ以別紙奏聞仕候間右慶喜に御沙汰御座候様奉願置候

(別紙)

慶應元年

臣家茂謹而宇内之形勢ヲ熟考仕候處近來追々變遷イタシ和親ヲ結ヒ有無ヲ通シ五ニ富強ヲ計候風習ニ推移候是天地自然之氣數不得已之勢ニ可有之奉存候就而者皇國ニ限リ一向御外交不被爲在候而者卑怯退縮之姿ニ相成御國體御國威トモ却テ相立申間敷既ニ先年於下田亞墨利加使節ト和親條約取替ニ相成候モ右等斟酌之上途 奏聞御許相成候儀ニ付其以來追々鎖國之舊格ヲ變シ富強之基漸ク相開候處其後外交拒絶之儀被 仰出候ニ付可成丈 聖諭遵奉仕度志願ニ御座候得共無謀之掃攘ハ致間敷旨猶被 仰出候趣モ有之候間何レトモ富國強兵之策相立候上ナラテハ膺懲之典モ難被行就而者彼之所長ヲ採リ貿易之利ヲ以テ多ク船廠ヲ設備シ以夷制夷之術ヲ講シ候事當今第一之急務ト奉存是迄種々苦心罷在候折柄防長之事件相起リ終ニ大阪城迄出張仕候處不料夷船兵庫港に渡來條約之廉々改テ 勅許有之候様申立若臣家茂ニ於テ取計兼候得ハ彼 闕下ニ罷出直ニ可申立旨申張種々論談ヲ盡シ應接仕候得共何分承諾不仕夫逆無謀之干戈ヲ動シ候テハ必勝之利無覺東縱令一時ハ勝算有之候共四方環海之 御國柄東西南北日暮攻掠ヲ受候テ戰爭無已時ハ皇國生民ノ塵燭此時ヨリ相始リ不仁不慈此上ハ有之間敷誠以歎カハ敷儀臣一家之存亡ハ姑ク差置 實祚之御安危ニモ關係仕實以不容易儀ニテ 陛下萬民ヲ覆育被遊候御仁德ニモ相戻リ可申哉臣家茂ニ於テモ職掌相立不申候間右等之處篤ト 思召被爲分乍恐業口ニ御動搖無之斷然ト 御卓識ヲ被爲立何卒改テ條約ニ付去處存實至當之談判仕候儀判然ト勅許被成下候様仕度左候得ハ如何様ニモ盡力仕外ハ外夷制馭ノ實備ヲ立内ハ防長追討ノ功ヲ遂上 宸襟ヲ安シ奉リ下萬民ヲ安堵セシメ臣家茂祖先之志ニ報ヒ可申志願ニ御座候皇國如何様英武之御國ニ候得トモ萬一内亂外寇一時ニ差洩西洋萬國ヲ敵ニ引受候而者終ニハ 聖體之御安危ニモ拘リ萬民塗炭ノ苦ニ陥リ候ハ必然之儀誠以痛哭慟歎之極假ニモ治國安民之任ヲ荷候職掌ニ於テハ如何様御沙汰御座候共施行仕候儀何分ニモ難忍奉存候依テ前文申上候通連ニ勅許之御沙汰被成下候ハ、御 實祚之無窮萬民之大幸無此上千々萬々奉懇願候定ニ不任悲歎號泣之至奉存候尤モ外夷闕下ニ罷出候様相成候テハ深奉恐入候儀ニ付精々盡力談判ヲ遂ケ來ル七日迄兵庫港ニ爲差控候間成丈早々御沙汰被成下候様仕度此段奉 奏聞候

十月二日將軍家茂職を一橋慶喜に譲らんと欲するの内意を傳達せしむ物論篇々あり

〔伊國京 元治二年正月、慶應二年十二月迄  
〔和坂 大坂返 達 御用狀 扣〕

淺井新九郎會藩より手に入候書付

方今内外御事多折柄 宸襟を不被安御次第柄茂有之御職掌ニおゐて御心痛之餘御胸痛御鬱閉ニ被爲在候就而之一橋中納言殿永々京師ニ被在之事務ニ茂被相通候儀ニ付中納言殿ニ御相談御政務御讓被遊度旨御所に御願置被爲在候此段内意申達候様との御沙汰ニ候。

十月。二日新美記録に同(二日)夕方今内外御事多之折  
(柄云々 御沙汰に候段御達に相成とあり)

〔慶應元五年 風 聞 書〕

浪華來狀

十月九日

〔前文は十月朔日の條にあり〕

一同二日溜詰衆始其外に御内談之筋有之右之一橋殿に將軍職之儀御讓ニモ可相成哉之趣御内意之處御供之溜詰衆其餘諸侯方一橋公之御下知受候之心外右様成行候上之即刻還御左候ハ、一同御供可仕旨御答申上候由右ニ付御旗本衆等御城内外不一方動搖不容易騒亂ニ茂可及講武所之向之不殘御暇相願ひ直ニ京都に入込惡徒とも不殘討取其上討死仕候度言上且彦根侯松山侯酒井阿州侯高田侯高松侯等へ領知被台上候とも無是非次第一橋殿之下知受不申還御御供不被仰付候ハ、御先におまとも出立可致し申募人氣騒ケ敷一旦ニ相成候處還御之儀之御沙汰止ニて先々靜ニ相成申候

十月二日在坂の諸侯を華城に會す今夕阿部正外松前崇廣將軍に東歸を迫り幕府遂に明三日を以

て將軍の東下すべき旨を達す

〔慶應元年〕  
〔風聞書〕

九月十三日已來京大坂邊混雜之次第

〔前文は十月朔日の條にあり〕

一二日滯坂之万石已上已下惣登城被仰出評議有之暮ニ至り明三日當地御發途伏見に被爲入御一泊夫より還御被遊旨松平防州より被仰渡有之

今般京師に被仰立之趣も有之候付明三日六半時之御供捕ニ而當地御發途伏見に被爲入御一泊夫より東海道還御可被遊旨被仰出候御供之面々野羽織着可用可致候

〔慶應元年八月〕  
〔京都大坂長崎探索書〕

昨五日二條御城ニ而將軍様御悔悟御内話有之候ニ之去ル二日之夜之阿松二候竊ニ御迫り申上夜半是非共御乘船御東歸有之候様左無之而之迎茂御命無之私共兩人御同船ニ而參可申段頻ニ申立誠ニ御迷惑ニ相成候との事

一前説被行兼候而御陸行被決候付而之猶又被申立候之彌以極會より伏見ニ而御拒可申上其節之歩兵講武所等ニ而防戰之内將軍様ハ速ニ御通り被御東歸を祈候趣頻ニ申込候由

一萬一京地に被爲入候ハ、迎も御命之無之敷敷奉存候なと被申候由

右之通之事ニ而不怪御畏ニ相成候處伏見ニ而極會ニ公拜謝懇ニ被仰上之趣有之大ニ御安心只管御悔悟之段被仰聞尙又京地ニ而御所向之事極會桑三公之御周旋筋御了解豐後伊豆ニ甘々と被誑候現々口惜事ト頻ニ御歎息有之由尤前日以來被仰立候趣も有之旁を以御參内ハ御指扣之由昨日政務御斷之御書達ハ御所より被差返候得共猶今一應御願立ニ相成重疊被恐入若強而被差留候ハ、御參内御禮御斷被仰上御受之御内定今曉竊ニ周防守様之御密話を傳承仕候

一永井戸川兩氏昨今大坂にて歸役被仰付管板倉候も今日共召之儀御取懸之由現夷人無事故退帆仕候ハ、長防之御所置一且相弛ミ不都合之末ニ付永井戸川兩監を以御詰問其上ニ而順序を立御所置有之可然歟との儀今曉桑名ニ而内々申談置候事ニ御座候

一井上主水正様夜前ハ御懇之上意共有之落涙退出此節之談判屆兼候ハ、再度罷歸申間敷段御用部屋ニ而決心被仰置御乗切御出張ニ相成候由候事

十月六日

上田久兵衛

十月三日將軍家茂大坂を發し翌曉伏見に達す

〔慶應元年〕  
〔風聞書〕

九月十三日已來京大坂邊混雜之次第

〔前文は十月二日の條にあり〕

一三日殿中尤混雜九ツ時前頃御沙汰止伏見に御滯留之旨松平伯州侯より達有之

今般還御可被遊旨昨日被仰出候處京師に被仰立候義も有之候ニ付還御之儀之御沙汰止伏見に御滯留可被遊旨被仰出候

〔慶應元年日記〕

十月三日

一〔前略〕今日八時過寺町を下使早打ニ而參り如何成譯らハ存不申候へとも會津ハ五番手を敷人數操出候由申來候由大坂方ハ探索家早打ニ而着 將軍様方今明内外御事多 宸襟を不被安事柄も有之候付而ハ御痛心御鬱氣ニ被有之候付一橋公ニハ京師へ永々被爲在諸事御通事宜敷有之由ニ付一橋公御政務御讓今三日伏見御泊ニ而東海道還御被遊旨被 仰出

慶應元年

候由右ニ付而ハ諸藩共 御所に人數出候由ニ付 此方様にも御勤座梶原小四郎方組ニ鐵炮を持せ直ニ出張引續御郡筒一手御番方三人ニ而引連出張夕刻大塚氏御立寄被下最前之次第ト通御咄申上右台ニ而一盃差上候御引取後緒方新左衛門方見へ暫滯話

〔京都自筆狀控〕

元直二年正月ヨリ  
以寸楮申達候征長一件且攝海夷船之儀ニ付而者追々得貴意置候通ニ而内外御多事之折柄將軍家御辭職被仰立今三日大阪御發途ニ而御東歸之段別紙兩通之通從大阪申來誠以絶言語候次第長大息仕候計ニ御坐候今日ニ相成候而者天下瓦解最早不可濟之勢と相成此末内外之大患一時ニ差迫皇國大至難之秋ニ而各藩登京物論沸騰ハ眼前之事ニ有之此交ヒ一新之御國議確定不仕候而之一日茂難相立其上大藩之内或ハ 禁廷ニ立入 朝命を假而侯伯を驅使し候様之儀も可有之彼是計較仕候へハ此機會ニ乘し 君上又は兩公子 天機御親として迅速御登京從來之御信義を天下ニ被爲仲候様有御座度偏ニ奉懇願候右等重大之事件文通ニ而ハ貫徹可致筋ニ無之木村得太郎儀早打引返ニ而今日爰許差立候條巨細之事情ハ直ニ言上可仕と略申候此許之儀茂如此紛擾中木村廻し候而之甚以無心元事ニ付可成丈御評議御急決之程所希ニ御座候以上〔本文別紙兩通とあるは十月二日の條に掲る所〕  
〔將軍辭職及東歸の懸達なるを以て茲に略す〕

十月三日

郡 夷 則

惣 連 名 殿

向々阿部松前兩閣老被仰付之趣別紙寫も入御披見申候以上〔此別紙亦十月朔日ノ條に掲る所なるを以て略す〕

鈴木 登編

〔肥後藩土上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十月三日

○未明歸〔原註、前後ハ八軒屋ニ詰む〕佐野行、次第を述、八軒屋より至急ニ被招行、手代木夜來、登城孤軍難支趣ニ付憤激登城、大監神保佐渡守小監赤松左京等へ調し、血誠を演、先伏見御滯との儀ニ替り被仰出、手代木と余兩人ニ舟ヲ被渡、走歸り又八軒屋へ走行發船、

松平周防守閣老ニ尸諫を勸メ余も乞て共ニ城中ニ死せんことを決す〔原註、日録〕

○朝飯後御供揃ニ相成居候を、強而奉留候覺悟にて登城、大小監察え存意之筋申立、尤其中伏見迄御出朝廷え御伺と申方ニ相成、私申立候存意ハ重機尤と御聞届有之、御老中様え早速御申上ニ相成候との事ニ御座候徳川の天下是切と申處を先ハすこしかけ留メ申候

扱手代木より申上、私と兩人え御舟壹艘被渡下、直ニ乗込、伏見え翌晝着仕候處〔原註、十月六日上田書狀〕

十月三日所司代松平定敬異船攝海に入るを以て更に警備を嚴にすべき旨を達す

〔長防再征帳〕

〔十月三日所司代方〕

細 川 越 中 守

攝海に異船渡來ニ付兼而嚴重御警衛可致旨相達置候處猶此上人數相増嚴重ニ可致旨從 御所被仰出候間此段相達候

十月

十月四日將軍家茂一橋慶喜等に諫止せられ是夜伏見を發して二條城に入る

〔慶應元年日記〕

十月四日

慶 應 元 年

一(前略)昨夕御使番津村滿喜歩御小姓町野良助伏見方外聞として被差越置候由ノ處町野ハ昨夜半早追ニ而一日罷歸り外聞之様子承候處太樹公今晚牧方泊ニ申事御觸ニ相成居候由ニ而其段同所方早打ニ而言上之上猶罷越候由津村ハ今朝五時方是又同様早打ニ而歸り

大樹公今晚七時分伏見へ御着ニ相成居候由注進畢而直様猶相越候由今夕八ツ半時分津村町野罷歸候付伏見ニ而大樹公御模様如何ニ有之哉ト承合候處伏見表ハ全躰昨夜方殊外混雜一日肥後清ニ罷越咄合候へとも何も一切出来不申一橋公會津侯尾州玄同公桑名侯等同所ニ押懸ニ相成是非ニ御引留之御談判ニ而東西へ早打實ニ戰爭之狀も斯や有らんかと存候位ニ有之由之處無難一橋公方御説得ニ而關東へ御下りハ御見合ニ相成御上洛ニ相決候由承り候付引取候由阿部松前兩閣老御役御免ニ而官位被召放早々國許へ引込罷罷在候様昨晚か御沙汰ニ相成候由町野列同所ニ而承及候由此外若年寄大御目附等都合一味之連黨拾壹人か有之由之處兩閣老之外ハ御沙汰筋承不申候由

〔新美記錄〕

其夜尙又今般京師に被仰上候趣茂有之候ニ付明三日六半時之御供揃ニ而當地御發途先伏見に被爲入被遊御泊夫方東海道還御被遊旨被仰出候段御供之面々に御觸出ニ相成候由翌三日四ツ時分京師に注進有之會候は即刻橋公桑侯は午後御發途御乗切ニ而御下坂華城ニ而は御東歸之命下候而も誰壹人拒申候者も無之唯豫州松山世子御諫争一日七度迄御目見御願被成以死御諫争被成候由一旦は白川松前兩閣老御守衛ニ而蒸氣船を御東歸之管ニ而去ル二日四時方山口駿河守様大監察外國 大坂御發足兵庫に御出被成候蒸氣船御廻し申事ニ御座候右之次第ニ付而之夷船も此節大樹公に申立置候件々御取捌も無之此儘御東下ニ相成候ハ、最早此上ハ關東を敵ト見口々ニ戰艦ヲ廻し戰を始可申旨申出候由ニ而御東下之義ハ御止ニ相成伏見迄御入ト申事ニ相成候會候ハ牧方迄御出被成候處大樹公茂最早浪華御出城ニ相成淀川御乗船之由ニ而伏見に御引返橋公茂同斷ニ而御待受桑侯は伏見に御引返し夜半御歸京三日之夕玄洞公御下坂同四日之曉大

〔應慶元五年 風聞書〕

樹公御着伏橋公會御目見御願御諫争被成候處御誠意徹底大樹公ニ茂不怪御悔悟之御様子ニ而被仰聞候ニは兩人話を聞大ニ安心翌後守共兩人ニ被欺ケ様之次第ニ相成返々茂口惜次第御後悔被成候由ニ而直ニ御上洛ト申事ニ相成同日入夜二條御入城橋公玄洞公會侯茂御歸京被成候内實は兩閣老官位被止御役御免ニ相成候後も竊ニ華城に入込居被申御政柄ニ總て此手ニ出候由ニ而右之御運ニ茂相成候哉ニ相聞候事

九月十三日已來京大坂邊混雜之次第

(前文は十月三日の日條にあり)

一五日松平伯州侯より即刻之御供揃ニ而御上洛被遊旨達有之

御所方被仰出候趣も有之候間即刻之御供揃ニ而伏見御發途御上洛可被遊旨被仰出候此段萬石以上以下當地に相殘候面々に早々可被相觸候

右之本月八日大坂出ニ而同十四日着申來候

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

以廻章致啓上候然者今四日御所司代松平越中守様方留守居御呼出有之罷出候處公用人衆演説を以公方様御所向に被仰立置候筋有之候付今四日二條御入城被爲在候間此段爲御心得申達猶九門御警衛之御方々様に御通達可致旨被申聞候間持廻を以相達候間御承知可被成候右爲可得貴意如此御座候以上

十月四日

松平越前守内

伊藤友四郎

不同

- 松平 因幡守 様
- 藤堂 和泉守 様
- 細川 越中守 様
- 松平 備前守 様
- 井伊 掃部頭 様
- 有馬 中啓太輔 様
- 松平 修理太輔 様
- 御留守 居中 様

猶々本文之趣御警衛所に早々御通達可被下候以上

右御留守居方添翰を以達有之候事

〔肥後藩土登編〕  
上田久兵衛先生略傳並年譜

十月四日

○終夜舟行翌書淀より揚陸、伏見ニ達ス、將軍様御上洛ニ決ス、直ニ登京、夜郡大夫行、夜咄舎徹夜之談（原註）  
 ○伏見え翌日（原註）晝着仕候處、將軍様ことの外御悔悟、橋會ニ公之御直話御聞取、大ニ御安心之由ニ而、直ニ御上洛と  
 申事ニ相成候故、其儘伏見出立登京仕候、即夜段々申談有之、徹夜仕候（原註）

十月四日松前崇廣阿部正外大坂を發し歸藩の途に就く

〔京都大坂探〕  
索書

松前様去ル四月阿部様同五日大坂御發途暗り峠を御歸邑ニ相成候由

〔風聞書〕

十月十二日

助御用番和泉守殿に阿部駿河守方申聞候書付

同性豊後守儀去ル四日大坂表發足追々着府可仕依之居屋敷に着可仕候儀奉恐入候ニ付山下御門内屋敷に着仕支度相調  
 早速在所白川表に發足仕度旨旅中申越候右之不苦儀ニ可有御座哉豊後守儀中ニ付此段私より奉伺候以上

十月十二日

阿部 駿河 守

御書取  
書面之通相心得不苦候

十月四日兵庫開否のことに關し先月廿三日以來幕議動搖の狀況を報ずる者あり

〔慶應元丑年〕  
風聞書

十月八日着 同四日出大坂來狀

上様御征長ニ付御拜領物等有之大坂に御歸城後夷人御所置專一ニ相成兵庫開港之論區々ニ而御決議相成兼候風説探索  
 候處去ル廿三日阿部侯應接として兵庫に御出張御談判之上廿六日午之刻迄御返答御約定廿四日御歸坂直ニ登城大樹公  
 に御目見夷人申出候段委細言上閣老其外阿部侯同意ニ而兵庫開港且夷人大坂登城被差免候旨既ニ及一決候處小笠原侯

慶應元 年

并御役人之内御兩人も御不同意之御方有之阿部侯退出之後小笠原侯御目通ニ而懸ル大事之儀ニ付一橋公御召ニ相成候様言上有之直ニ御直書を以御召ニ相成候廿五日阿部侯尙登城ニ相成彌開港御議論ニ相成候一橋公御下坂ニ及不申旨御申遣有之候處一橋公之御召狀ニ而夜中京都御出立後ニ御飛脚守口宿邊ニ而御行逢有之候得共直ニ御下坂阿部侯御旅宿ニ御出之處阿部侯兵庫表に御出立御供揃央ニ御面會夫より松前侯にも直ニ御登城一橋公。申上候而兵庫開港之義徵慮天下之人心不伏之處昨今長州御進發被仰出候央ニ御開港之御沙汰相成候而之諸大名之内此段長州に出勢不致向も可有之左候而之又御違命之罪御征討も無之候而之相濟申問敷候誠ニ長州ニ之此度之儀如何成大患引出し候も難計天下之動亂是相發可申兵庫開港斷然御斷若し夷人不承服致彼レ兵端を開候ハ、不得止御一戰可有之開港之義決而不宜と。申候處一同一橋公之御議論ニ屈服就而之阿部侯松前侯之兩侯一存ニ而談判いたし候罪を以幽閉申付候様一決いたし候趣阿部侯ニ御申遣候處西之宮御旅宿に相連阿部侯御同所御一泊廿七日一橋公御上京之跡に御着坂直様御登城尙また開港之積相發し素々松平防州伯州同論之事ニ候得とも尙また幕議開港一變いたし最前鎖港相決候折尾州公唐津侯を以爲御名代奉留慮相伺御上京之處俄ニ御呼出し廿九日開港之御伺右兩公御上京相成申候其後之處關老方朔日朝御登城之儘一昨夕まで御下城無之候事

十月五日兵庫を除き横濱長崎箱館の三港を開くを許し條約を改正すべしとの勅命あり

〔三條實美公年譜〕

(前略)四日朝廷大議アリ關白齊敬右大臣徳大寺公純尹宮常陸宮内大臣近衛忠房以下皆朝ス一橋慶喜松平容保松平定敬小笠原長行等亦參シ開港ノ勅許ヲ得ンヲ請フ時ニ 朝議猶ホ鎖港ヲ主トシ大原重徳ニ劍馬及金五百圓ヲ賜ヒ將ニ攝海ニ至テ應接セシメ薩藩士岩下佐次右衛門大久保一藏ヲシテ之ヲ護衛セシメントス慶喜等之ヲ沮ミ規誘百端長行辯論最モカム是夜 主上寢ニ就カス明日ニ至リ慶喜等奏シテ曰

此程不料外國船兵庫港工渡來云々(參閱錄皇武令と同  
文故に之を略す)

是ニ於テ更ニ諸藩士ノ國事ニ預ル者ヲ召シ衆議ヲ盡サシム至ル者薩州備前久留米肥後因州會津桑名藝州土州筑前加州柳川津藩士等三十餘人虎之間ニ於テ一々其議ヲ聽カセラル議奏傳奏右ニ列シ慶喜容保定敬長行左ニ列シ正面少ク御座ヲ掲ケ親王關白攝家公卿等皆侍ス齊敬令ヲ傳奏ニ傳傳奏ハ又慶喜ニ傳テ諸藩士ヲシテ席ヲ前メ各其意見ヲ詳陳セシム蓋シ上意ニ出ルナリ肥後藩上田久兵衛曰ク 朝廷ヨリ幕府ノ無禮ヲ責メラル、ハ頗ル失體ニ似タリ幕府ハ時勢ニ隨ヒ外人ト和親ヲ結ビシニ十餘年來頻ニ其執政ヲ黜陟セラル此ノ如クナルトキハ國家ノ基本確立セス終ニ外夷ノ衛中ニ陥ラン願クハ今日以往水ク三港ヲ開クヲ許シ但シ兵庫ハ人心最不服ナルヲ以テ斷然之ヲ謝絶セラレンヲ會津藩外島機兵衛曰ク所謂攘夷トハ彼來レハ則之ヲ擊ツヲ謂フ然ルニ海外諸國ノ我港ニ來ル固ヨリ時日ヲ限ルニ非ス隨テ攘ヘハ隨テ來リ終ニ蕩平ノ期ナカルヘシ故ニ苟モ攘夷ノ端ヲ發ケバ須ク進テ彼ノ巢窟ヲ衝クノ計ナカル可ラズ然レトモ之ヲ爲ス必海軍ノ充實ナルヲ要ス海軍ノ充實ヲ欲セズ開港五市ヲ許シ有餘ヲ損シ不足ヲ補ヒ互ニ利益ヲ得ルニ如カス土州藩澤田斧太郎年少ニシテ才アリ豫メ外島ト相約シ公卿等ヲ説破セントシ西洋ノ説ニ基キテ天地間ノ道理ヲ陳ヘ彼我ノ別ナキヲ辨シ和漢歷世ノ盛衰利害ヲ論叙ス小笠原長行進テ曰ク諸君ノ議一々感服セリ今盡ク外人ノ言ヲ拒ムトモ彼必肯ンセサラン若シ三港ハ彼ノ請ニ任セ兵庫ハ必之ヲ許サ、ルノ心ヲ決シ彼ト應接セハ彼レ頭ト雖モ之ヲ聽カサルノ理ナシ譬ヘハ鳥ヲ逐フニ石ヲ擲タントスルノ狀ヲ示スモ鳥必シモ逃ケス然レモ實ニ石ヲ持チテ之ニ向ヘハ則チ逃ケ去ルカ如シト然ルニ薩州藩大久保一藏ハ更ニ英人ニ諭シテ退却セシムヘキノ説ヲ主張シ朝命ヲ其藩ニ下サレンヲ請ヒ備州藩花房虎太郎亦其議ニ同シ衆議決セス是ニ於テ尹宮長行等ノ説ヲ贊ケテ云ク今幕府ヲ措キ 勅ヲ諸藩ニ傳テ外人ニ應接セシムルトキハ一朝ニシテ徳川氏累世ノ功業ヲ棄ルニ類シ實ニ忍ヒサル所ナリ此事縱令幕府ニ委任ストモ猶以テ外人ヲ退去セシムルニ足ラント公卿以下皆之ヲ然リトセス宮遊ニ坐ヲ起チ間アリテ還リ袖中ヨリ一通ノ書ヲ出シ衆ニ

示シテ云ク是レ 宸翰ナリ以テ叡慮ノ在ル所ヲ候スヘシト其文ニ曰

情熟考候ニ官武之議論透聽處實以不容易儀時刻を移候而ハ取戻不相成場合ニ及ヒ左候ヘハ從 神宮連綿之 皇統忽廢絶候而ハ 朕一分之義ニ而者決して無之於 朕代右様之處置候而ハ實以申譯無之恐惶不過之候且萬民塗炭之苦患ハ眼前左候得ハ是又不堪見聞實以痛心候此上ハ一橋始申出候ニ任候外無之實差向難默止次第推而可承服候事

十月五日

公卿以下相目シテ色ヲ失ヒ乃チ復争ハス蓋宮此時 玉座ニ至リ奏シテ云フ今若シ 勅許ナケレハ外人ハ直ニ兵端ヲ開キ攝海京師ヲ論スルナク 伊勢大崩モ忽チ灰燼ト爲ルヘシ仰キ願クハ 陛下速ニ之ヲ斷セラレンコトヲ 天皇乃チ命シテ公卿以下ヲ前マシメ更ニ親ラ衆議ヲ聽決セラレントス宮之ヲ止メテ云フ昨日以來衆議紛々トシテ未タ決セス乃チ幾回ノ辯論ヲ重ヌルモ亦無益ナラン速ニ 勅許ヲ下サレンコトヲト是日遂ニ勅シテ横濱長崎函館ノ開港ヲ許ス

(中)是夜二鼓公卿以下初メテ退ク

〔尊攘錄皇武令〕

此程不料外國船兵庫港に渡來條約之儀改而勅許有之様申立若幕府ニおひて取計兼候者彼國下には罷出直ニ可申立由種々力を盡し應接仕來ル七日迄ハ爲相扣候へ共何レも御許容無之候而ハ退帆不仕去逆無謀ニ干戈を動し候へハ必勝之利無覺東縱令一時ハ勝算有之候共西洋萬國を敵ニ引受候時ハ幕府之存亡ハ姑ク差置終ニハ實詐之御安危ニも拘り萬民塗炭之苦を受可申實以不容易儀ニ付陛下萬民及覆育被遊候御仁德ニ茂相戻り假ニも治國安民之任を荷候職務ニおゐて如何様御沙汰御座候共施行仕義何分ニ茂難忍奉存候間右之所篤斗思召被爲分早々 勅許被成下候様仕度左候ヘハ如何様之盡力仕外國船退帆仕候様取計可申奉存候

十月五日

小笠原 壹岐守

松平越中守  
松平肥後守  
一橋中納言

飛鳥井中納言殿  
野宮中納言殿

〔京都長探 索書〕

慶應元年八月  
十月十日附淺井新九郎書取)

十月五日 朝議之上諸藩士御所に被召出官武御列座一橋中納言殿より被申達候皆々無腹臆時體見込申上候様被仰聞諸藩士各存寄申上濟於玉座前御衆議決兼出御後左之通被仰出候由

右之通(諸藩考候ニ官武之議論透) 御宸筆被仰出候間猶 朝廷に武家方より御願有之左之通 條約之儀御許容被爲在候間至當之所置可致事

家 茂に

別紙之通被仰出候ニ付是迄之條約面品々不都合之康有之不應叡慮候付新ニ取調替相伺可申候諸藩衆評之上御取極ニ可相成候事

兵庫之儀之被止候事

十月五日

〔全書〕

十月六日 十月十七日着

慶應元年



上田淺井財滿より

内啓今度條約御許容之儀ニ付而之御書付寫一通久兵衛書取二通

一十月五日諸藩士御假建所に被召出文武官御列座此度外夷切迫ニ相成御所置筋銘々見込之趣申出候様被仰付候付而建言  
之次第神山源左衛門書取一通久兵衛新九郎添書共

右差上申候以上

(中略)

昨五日傳奏衆より御達之筋有之淺井新九郎神山源左衛門一同御所御假建に出方仕候處諸藩士一同ニ奧立御間ニ被召出  
傳議衆橋會桑三公唐津閣老左右ニ御列座橋公方兵庫表談判之期限來ル七日相迫候夷情不容易趣ニ付如何應接所置いた  
し可然哉存寄之次第銘々無憚言上仕候様との事ニ而懸ニ御尋有之候皆々見合差扣居申候久兵衛儀ハ一番口ニ着座仕殊  
ニ橋會ニ公衆而御見知被置候もの故頻ニ御迫ニ付不得止最初發言仕候處久兵衛近ク進高聲ニ言上仕候様橋公より御差  
圖ニ付申上候微賤之身分天下之大事を兎角可申上様無御座候へ共御沙汰之趣ニ付乍恐申上候此節外夷兵威を以接海ニ  
迫兵庫開港中立候趣ニ御座候所詮兵庫ハ開港之地ニ無之其上方今御差免ニ相成候而之皇威幕威共ニ地を拂候様奉存  
候兵庫鎖港之儀ハ斷然被仰渡長防御所置中ニ付退帆之儀懸ニ被仰諭可然若強而申幕彼方兵端を開候儀ニ茂有之候ハ、  
勝敗を不顧皇國之御爲御接戦有之度假令收レを御取ニ相成候とも少茂御恥辱ニ有之間敷尤横濱之儀ハ迎茂鎖港難叶勢  
ニ承および申候前年攘夷鎖港之儀被仰出候日とハ時世茂變遷仕候事故義理を押し立勢を御配量横濱箱館長崎之三港を至  
當之條約ニ取替日本國中疲弊不仕様條理を立改約被仰付可然奉存候何様皇國之體面ニ關係仕候儀ハ死を以御維持有之  
度右横濱之儀朝廷より御免ニ申候迎朝廷と鈴印取替シ申度申立候共素り政事之關東ニ御委任迄之事ニ有之候故決而  
朝廷ニ而直ニ御取結有之譯ニ無御座若和親等之儀朝廷ニ關係仕候様有之候而之皇國萬世之失體ニ奉存候間右等之處能  
々御評議を被達公明正大之御談判有之度旨申上候夫より列藩交ル々言上之趣源左衛門書取之通御座候追而時體尤切迫

兵庫港拒絶之儀及如何可有之哉と相考候得共別紙御沙汰書之通ニ御評決橋公初大ニ御安心之由ニ而昨夜井上主水正様  
兵庫表に爲談判御出張有之候事

十月六日

上田久兵衛

〔全書〕

野宮様雜掌方御用之儀有之候間御留守居并周旋方之内登人只今早々御所假建所に參上致候様昨五日御達之處私共兩人  
外勤中ニ付神山源左衛門罷出候久兵衛新九郎儀之右之段會藩ニ而承直ニ御所に參上之處文武官御列位ニ而諸藩士に存  
寄御尋之次第別番源左衛門書取之通御座候事

十月六日

上田久兵衛  
淺井新九郎

右一通

十月五日諸藩士御假建所に被召出文武官御列座此度外夷切迫ニ相成御所置筋銘々見込之趣申出候様被仰付候付建言仕  
候次第左之通

一今度之一條

皇國不容易大事件ニ付諸藩之賢侯京師に被召御熱評之上萬古不易之良法相立候様期限之儀之右之趣を以相諭候ハ、差  
延方承知可仕見込ニ候  
付札  
諸藩退出後猶御説得ニ相成候處奉敬服候

右薩藩見込

一是迄外夷兵威を以相迫我望を相達幕府之御威光殆ト地ニ落候處此度將軍様御進發向且帝都近所に軍艦を以相迫候上之  
兵庫之勿論是迄開港致候ケ所迎茂此度勅許等有之候而之矢張彼が威ニ恐候譯ニ相成皇國之御武威一切相立不申候付兵  
庫之是迄談判之場所ニ無之趣を以被差返横濱ニ而之談判ニ御座候得之時宜ニ因り開來候ケ所之勅許有之而茂不苦候事

慶應元年

るし今日兵庫退帆爲致候良策之無御座候  
付札  
野宮様より退帆之見込御尋ニ相成候處退帆之儀之良策を得不申旨御返答申上候

右因備之論

一當時迄名之領港ニして實之開港ニ御座候得之今日ニ相成押而領港ニ申儀之迎茂行々不申候付兵庫之儀之斷然御斷ニ相成是迄開來候々所之時勢を御酌量被成此節幕府に 勅許有之其趣を相含横濱に致歸帆候様精々御談判ニ相成候ハ、皇國之御威光茂相立候上此度彼より申立候儀も有之定而退帆可仕若右之趣を以相諭候而も承知不仕節之不得止死を致より外無之見込ニ御座候

右會桑土米之見込

此外諸藩之論茂御座候得共大意兵庫御斷是迄開來候所之規律相立候得之 勅許有之候而も不苦候何茂 皇國之御威光相立候儀第一之主意ニ御座候以上

十月五日

神山源左衛門

〔慶應元丑年ノ風聞書〕

諸藩到着次第

松平修理大夫松平備前守有馬中務大輔細川越中守松平土佐守松平因幡守松平越前守松平肥後守立花飛彈守松平越中守松平肥前守松平安藝守松平美濃守加賀中納言藤堂和泉守酒井河内守右十月四日ノ五日ニ至り諸大夫之間ニおゐて衆議面々

是方御所詰茶番之者一橋様大原様御給仕仕御次之間邊ニ而滑々承り候處之咄ニ而少々之違失も難計よしなり  
一十月五日諸藩士を從御所被爲召候ニ付一家ノ兩三人又之四五人會津家ノ拾三人も有之諸大夫之間に罷出候尤無官之者計ニ付昇出相拵有之候由也豈人宛虎之間ニ而御聽相成候由 主上之御座之内ニ而御内聽官様始御攝家方も御座之内

御座之外之一橋様傳奏議奏并會津侯御列席攘夷開港銘々存寄申上様ニと有之候

薩州藩留守居

内田忠之助

周旋方

大鳥吉之丞  
大久保市藏

右三人之内内田忠之助進出言上仕候之兵庫淀泊之夷船某應接被仰付おゐて之早々退帆仕候様可取計旨申立候由之處何御沙汰無之先ツ引取候様被仰出候事

備前藩周旋方

花房虎太郎

此人之近年備前ニ被召拘候人之由

右之人言上ニ當節夷船攝海に乘込候儀之畢竟關東に御委任後横濱表ニおゐて因循柔弱之應接有之候處より追時強情申立終ニ王城近攝海に渡來候迄移來候ニ付一ト先關東御取扱振を委曲被相糺度旨前後を不顧高聲ニ申立候由是又爲何御沙汰も無之引取候様被仰出候事

久留米藩

何某

右之人申立ニ之當今攝海に渡來之異船前同前御應接被相整候而之何様 皇國之御爲不相成一先横濱に引取候様萬事之於同所應接可致旨御申切相成度兵庫大坂之埠ニ而之決而應接不叶々所ニ相定被置度又候渡來必然ニ付幾度も横濱を應接之場所ニ被相定候方可然申立候由是又前同斷

右之外因州肥後桑名會津土佐是又豈人ツ、被爲召御尋之上橋様御始聞老方言上之趣意至極御尤ニ奉存候別ニ存寄候

慶應元年

儀無之旨五藩とも同様申上候よしなり

一右諸藩之御尋相濟候後大原左衛門督様が一橋中納言様に御對談有之候之當節攝海に渡來之夷船拙者方を探索致し候處關東を攝海に淀泊之命を受乘來候山全く夷人自己之渡來ニ無之右之如何之譯ニ而右様之命令被相下候哉其趣意承り度段聲高ニ御論議一橋様も御困りニ而御所奉穢候儀奉恐入候得とも某切腹之外無之段御返答之處大原様被仰候者夫ニ之不及此節渡來之異船早速打攘候半而之不叶其上官軍を帥イ出馬仕候條御手前先鋒御勤有之候様被仰付一橋様仰ニ其通りニ而之支度之儀有之候間某代り水戸家末男徳川民部大輔に先鋒爲致可申御答ニ付早速ニ御同家之家臣御所に御呼出し之處惣髮之男壹人ニ元服之男壹人姓名不知罷出候山大原様が先鋒之御達相成候處兩人申出候之攘夷之儀之先君之趣意も有之先鋒之義別而難有仕合奉存候民部大輔違背仕間敷候尤御一大事ニ付而之何卒御給旨頂戴仕度惣而最前關東に征夷之御委任相成候節御陣羽織御旗給り候例ニ寄り此節主人に右之御品賜り度旨申上候處其通り可給旨御請合ニ相成候山即刻御馬寮より御馬を引出し御兩人に拜領之内意迄相成民部大輔様ニも急速御參内ニ相決し候上大原様ニ之早く御歸り之上御出陣之御支度ニ而尙參内相成候様ニと有之直ニ御歸宅相成候末之大原様民部大輔様御兩家に御參内ニ不相及段被仰出候ニ付夫迄ニ而相止候由

一右之末同夜御評決箱館横濱長崎開港御許容兵庫之不被相叶旨ニ相極候同夜より應接として小笠原壹岐守様兵庫に御出張相成候趣なり

一五日夕方頃より二條御城近所何となく騒々敷關東より御供之人々俄ニ食用急き或之辨當之手當等ニ付市中も大ニ恐々家財衣服等田舎之方に持運ひ候者も有之何故共不相分候處其後内々風説ニ大原様水戸様五日夜御出張之御支度ニ而御參内相成之御途中ニ而關東之諸士喰留可申趣意ニ而可有之と人々後ニ勘考いたし候よし(下略)

〔慶應元五年の風聞書〕

此度兵庫に異船渡來ニ付昨日大樹が一橋中納言松平肥後守松平越中守小笠原壹岐守を以段々遮而言上之次第有之徹夜至今曉追々議論今日諸藩等をも被爲召御諮問之處十二八九御許容ニ而も可然旨業説暗合誠ニ不被得止別指之通被仰出候事

條約之議御許容云々

別紙之通被仰出候ニ付而之是迄之條約品々不都合之廉有之云々

別紙之通於驚之州代二位宰相中將加勢右衛門督列座被申渡候

勅書之處之御勝手御參之節御拜見可有之且演説之次第も有之候間御披見之節御尋問御趣意被爲在候御方ニ御申達可然旨同御被示候仍而申入早々御廻覽可御返給候也

十月六日(風聞書中「十月上旬京師密報」に據るに本) (文は議奏より堂上中に宛てたる御狀なり)

降

康

十月六日朝廷異船渡來につき國是を定むべき爲め諸藩を召集すべき旨及び阿部正外松前崇廣を守護職所司代に預け取調を命ずべき旨を達せらる尋て我藩留守居上田久兵衛淺井新九郎會藩の交渉により防長處置の結了まで朝命の猶豫せられんことを周旋す

〔京都大坂探案書〕

(十月十日附淺井新九郎報告書取の一節)

此度異船渡來ニ付大樹より申立候次第有之盡業議被定國是度候間諸藩被召登可申候條難令上京候者重臣上京可申付事

(右一通)

松 前 伊 豆

徵慮之趣被爲在候付於國許謹慎御沙汰可奉待旨被仰出候處猶又思召被爲在候間於京師守護職所司代等に預取調之儀可申付事

(右一通)

別紙二通御沙汰ニ付早々老中に可被相違候仍申入候事

十月六日

定 功  
雅 典

松 平 越 中 守 殿

右即夜會藩大野英馬持參仕候只今御達之由にて閣老御用部屋に留置候外藩より茂如何様ニも周旋相頼候趣ニ御座候付此元御役々衆議ニ而兩條共ニ從御所被仰出候儀之御尤ニ付御取消六ヶ敷先長防御所置濟迄之處一會桑侯閣老より御猶豫御願被仰上候外之無之趣を以一橋府に上田久兵衛會藩に新九郎申達候

〔尊攘錄探素書〕

河添聞取略記(抄)

一十月七日早朝上田淺井ニ隨ひ郡大夫に伺候之處異船渡來ニ付而國是を被定度諸藩 召登之事且阿松兩侯於京師守護職所司代に御預之朝命所司代迄下り候由ニ而會藩より相談之趣ニ因追而之其筋ニも可相運候へとも右兩條共暫御猶豫之儀周旋之申談相決候事

一同夜上田御小屋に參今日之周旋振等相尋候處咄台之通ニ可相成見込之由ニ候事

十月六日在京郡夷則は將軍東歸の中止及び外人處置に關する朝議其他の事情並に森井惣四郎が

兵庫にて英人と應接せし顛末等を藩政府に報告す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ  
以別紙申達候將軍御辭職ニ而御東歸被仰出候付而ハ去ル三日木村得太郎を早打ニ而差立委細申達候通ニ候處於此許會藩等申合専ら御東歸御留之周旋致せ候處同日橋公會侯など御乗切ニ而御途中に御越將軍様に懇々御諫言有之候付御落涙ニ而只管御悔悟被爲在候由全奸臣之所爲ニ而一旦右之通之御治定ニ相成候儀ハ御痛敷事共ニ御座候依而於伏見御模樣替御上洛被仰出一昨四日夕七時過同所御發駕戌半刻二條御入城被爲在先ハ奉恐悅候此節之一件於大阪會藩之盡力ハ無申計上田久兵衛も力を發せ手代木直右衛門と兩人登城をもいたし御役々に及論談候由於溜間ハ松山世子御差入御周旋其他御旗下大勢之士御東歸を拒み候人ハ一人も無之繼四五輩會藩等へ周旋を頼候位之事ニ而幕府人材ニ乏敷事も被推量中候既ニ寒氣船より御歸之御手賦ニも相成居候由之處右段々之盡力ニ而御陸行ニ相成候儀ハ徳川家之御運未盡處と一同愁眉を開申候且又外夷御處置筋付而も會藩等より頼談ニ因見込之筋は宮様關白様方へ申立置候趣も有之候處御談判之期限ニも差臨 朝議沸騰不可當之勢ニ相成候由ニ而昨日ハ俄ニ各藩士を 朝廷に被 召銘々見込之趣御尋ニ相成且 朝議御一決之次第等則別紙差進入御披見申候右付而井上主水正様御談判として直ニ兵庫へ御越之由此節從將軍様格別御懇之上意を被蒙類ニ落涙若談判成就不致候ハ、再び二條へ歸不申と之事にて全く必死之覺悟と相見候由此上ハ何卒至當之御談判を被遂外夷退船長防結局之御處置を希望仕候事ニ御座候雖然今日之形勢且暮ニ變轉反復表裏之事も不少實ニ薄氷を履よりも危く皇國之大至難此時ニ相極朝暮御依頼之御家柄被遊御傍觀候様ニ而ハ從來之御本意ニも被在間敷此御時體 君上ハ容易ニ御動き被爲出來間敷兩公子之御内ニ而も早々御登京時變ニ應義理至當之御周旋を以御信義を天下ニ被伸候好機會も亦是時ニ可有御座若眼前之御疲弊等を被爲厭御猶豫被爲在候而ハ後來一層之御困窮を被招候儀も可有御座彼是御熱算斷然御心決被爲在度尤御登京御一決之上御隣藩等之動靜ニ被應等之儀ハ猶於御許公

議之所歸も可有之何分ニも御至誠之御舉動を奉仰冀候計ニ御座候得太郎出立後今日之姿ニ變革之事情中々筆紙ニ難盡  
林新九郎儀追々歸郷之内意も有之候付兵庫御談判之模様且此許之形勢今少し見定之上早打ニ而差下申答ニ御座候間左  
様御聞置可被下候先右之趣爲可申達江戸より之官脚を早打ニて指立申候御座候儀ハ新九郎下着之上御承知候様存候以  
上

十月六日

郡

惣 連 名 殿

尙々森井惣四郎於兵庫夷人應接之書取寫入御披見申候惣四郎儀此節御談判之模様探索旁今日より猶早打にて兵庫表  
に指越置候事ニ御座候

〔元治元年より慶應元年迄  
探 索 書〕

慶應元ノ十月森井惣四郎兵庫表ニおゐて英人應接

應接始末

一當九月廿七日兵庫表ニおゐて英國アレキサントル、サトフ二人共通辯官應接之條々左之通御座候

問 西洋各國と交ハ信義を重し禮讓を厚し候而和信を結び候趣兼而承及居候處此節各國軍艦當港に來泊之儀甚不審ニ  
存候其故は承知之通日本ハ三百年來之昌平將軍親伐等之儀決而無之事ニ御座候處長州一條は不容易儀ニ而不得止今度  
進發致候事ニ御座候右之通日本ハ一大事變ニ臨居候上は信義禮讓之交ニ而御座候ハ、先軍艦之差控日本之妨ニ不相成  
様被致候事至當ニ之相聞不申哉

答 勿論筋合を以申候ハ、其通ニ御座候マかし今度罷出候之日本之妨ニ相成不申只此方之便利急務之爲ニ罷越候儀ニ  
而大君之進發ハ決して御妨ニ之相成不申候付御自分ハ御自分之御急務御達可被成我等之我等之急務相達可申と答  
問 急務と申儀ハ數艘之軍艦差向ニ相成候得之日本之動搖ニ乘し國を奪取之所存ニ候哉西洋強大之國と小弱之日本及

戰爭死戰を遂焦土と相成候共不苦マかし仁義之二字何レニ相立可申哉又風説ニ之長州が竊ニ貴國に相頼將軍長州征伐  
を妨候様歎願致し候故各國軍艦當港に參候由とも承申候處如何ニ御座候哉

答 日本を奪取等之儀ハ決而無御座此節參候之日本開國之儀天子御聞入無御座由ニ而是非開國之一條相達大阪兵庫新  
潟之三港を開可申答ニ而罷越候儀ニ而御座候日本何方ニ而茂開國故障申出候處ニ罷出開國談判相達可申答御座候と答  
問 三ヶ所開港之約定之當九月廿六ヶ月目ニ相聞可申と既ニ横濱ニ而談判有之たる由承居申候處此度至急ニ右談  
判之爲とハ如何譯ニ御座候哉

答 廿六ヶ月日延之儀ハ外ニ日本ニ願出候事件有之其事相叶候ハ、日延可然答ニ御座候處其事ハ聞入無之只々日延之  
事耳申立ニ相成候付日本ハ日本之急務我國ハ我國之急務有之候故廿六ヶ月日相待候譯ニ茂至不申故罷出候と答

問 三港開との一條は何分日本人心折合不申惣體人心之折合は交之深淺ニよりて結ハル處厚薄之異同茂有之唯今急ニ  
數港相開候ハ、忽人心不折合ニ相成可申と申候處彼等不平を鳴し申候ニ之人心不折合と之日本之口僻難度敷其言葉を  
承申候人心不折合ハ如何ナル處を申候哉其根元承り申度と彼方察討致し候付人心不折合之根本は最初アメリカ浦賀に  
來泊之一條方起候儀ニ而御座候物體日本ニ而之外國應接之儀長崎表と相究め置候處アメリカ法を犯し浦賀に罷出候故  
日本列藩之人心彼地ニ而之將軍應接有之間敷必らも長崎表に廻候勢ニ相成可申若廻り不申節ハ打拂ニ可相成と存込居  
候處法を犯候儘將軍方應接有之下田箱館二港を開而談判相濟候故將軍家外國を怖れて開港と相成候と人心沸騰致し夫  
方開港の儀人心不折合之根元と相成候と答候處彼より申候ニ之日本人心之不折合之開鎖之譯ニ而ハ決而無之其根元之  
東照公之時方起候事ニ御座候日本之國體大君と將軍家諸侯と之其位を等し御座候而兵力を以不理ニ諸侯を屈服致させ  
候故大小侯伯悉ク何か事ニよせ大君を侍シテ自分大君と相成度所存今ニ始まらざる事ニ御座候處幸大君開國を始メ候  
故夫を名として攘夷之説を相唱候儀ニ而御座候其證據ニ之島津三郎長州等茂京都ニ而之攘夷之説を相唱候得共内分ハ  
我等ニ交易相頼候事ニ而相分申候と彼方見取之論相立申候故右様不心得之者茂問ニ之可有之候へ共日本人心之不折合

之浦賀之一條を起り候と辨候得共彼等聞入不申候被問日本國王何ニ而御座候哉答京都ニ而御座候問國政之何レ出候哉答關東方出申候問何ナル譯ニ而國王より出不申候哉答日本國體承知可有之王代武家と相易り候故當時之國政武家に委任ニ相成申候彼問若武家に委任之上之京都よりハ何事茂構ひ不申哉答勿論構不申儀に御座候得共非常之大事ハ京都に窺ひ又京都より茂申達候儀茂御座候問開國之儀之京都より拒ミ申候由承候處實以其通御座候哉答京都方之決而拒申儀ニ而之無之候彼答長州方攘夷之儀茂京都關東之命を請候上ニ而我船を打候由將又昨年大君上洛之節茂攘夷之命大君に下り候得之全ク京都ハ攘夷說ニ而ハ無之哉答昨年上洛之節之橫濱鎖港之命下り候儀ニ而攘夷之命ニ而ハ無之候問橫濱鎖港之命之何ナル譯ニ下り候哉答橫濱ハ京都に窺無之免候故彼地開候而之決而不相成と申儀ニ而御座候被問當時ニ而茂京都ハ橫濱鎖港之論ニ而可有之哉答其儀ハ得斗承居不申候前件長州ハ京都關東之命を請發均致候と申候得共其實之根源一昨年五月十日と期限相立攘夷致候と申儀ハ長州より京都に取入事情ニ疎き者を欺きケ様ニ期限相定メ發炮いふし候儀ニ而長州我方企候譯ニ而京都關東ニ而之ケ様ニ暴動いふし候趣意ニ而ハ無之夫故列藩も長州ニ之應不申候問 五大洲中開港之儀英はロンドン一港佛はハリウス一港亞米利加ハ四ヶ所清國之三箇所と承居候處實事ニ而御座候哉と相尋候處彼等笑而答候ニ之英ハ學國開居候事ニ而何箇所と港之數を限置不申便利さへ宜敷地之何方ニ而も開居候清國ハ十一二三箇所も開居申候と明白之返答ハ致不申候

問 今日此船に罷出候趣意はミニストルに面會いふし此度此地に被參候談判如何相成居申候哉若閣老と各國との談判情實貫通不仕候而至當之筋相立不申候様有之候ハ、我等方盡力致し日本と各國との交至當ニ運ひ候様仕度存念ニ而罷出候儀ニ御座候付自然機密之事ニ無御座候ハ、承申度と相尋候處其儀之直ミニストルに御尋可被成と談判之模様明し不申候右談判相濟アレキサンドル、サトフの兩人其席を立ミニストルに參り半時計茂五六人上官共打寄り相談いふし猶兩人參りミニストルハ今日而會何分出来不申趣ニ付前條閣老に談判之一條相尋候處閣老との談判ハ未タ一決不致候付決定之上ニ而無之而ハ御咄し出来兼候趣返答いふし申候右話終りて猶話候ニ之英國も本ハ蝦夷地同様瘠地之國ニ

而士氣も振不申處開港相始候以來次第第二國も廣大ニ相成大船兵器も充實いふし只今之通相成申候日本茂未タ當時開國之始ニ而大砲軍艦も漸ク今日開ケ居候故猶兵庫大阪新潟之三港開ニ相成候ハ、東西南北悉ク開ケ候而彌國茂富ミ兵器茂充實可致開國之日本茂各國茂相互ニ利を得候儀ニ而御座候決而日本を奪取杯之爲ニ參り候ニ而ハ無之尤以前ハ諸方之國打取候事茂御坐候得共唯今ニ至り其後悔致し居申候其譯ハ一日屬國ニいふし候上ハ他之國方奪ハレ不申様防禦嚴重いふし不申而ハ難叶夫故入費耳有之候而便利ニ之相成不申ヨフロツバ洲ニ而大島を取居候へ共何分入費ニ困り近來之棄置申候將又日本を防ニハ日本ニ而不防外國ニ而防候様不致してハ相立不申ヨフロツバ内之トルコと中國オロシヤ方奪はんと致せし時茂英佛ニ而援兵を出候故戰相止先年對州にオロシヤ參り候節茂我方船を差向候故退船いふし申候只今日本を外國方打候ハ、必外國より日本を打タザル様可致候間日本を防ニ之外國を以防候様無之而之不相成と穩ニ説話之心情ニ而話仕申候故此方茂穩ニ返答致し置申候右應接前後又ハ論談中多端ニ相分候中彼等より申候辭ニ之三港の儀日本方開不申節ハ三月の中此方カ開カセ可申との大言御座候

- 一長州に之夷人方登艘參等之由此度之儀ニ之關係無之事之由木村方承り候ニ之長州のホンコンにて大船買入候事ニ付而參ルと申事之由御座候
- 一關東ハ開港相始候以來一事として筋々相立候儀無御座候長州ハ昨年降參以來關東よりも丁寧にいふし約定茂堅ク相守居申候由話仕候
- 一大坂に不遠内上陸いたす筈ニ而其節ハ罷出候様度々相勸メ申候
- 一木村道之助話ニ之夷人等一橋公に御面談致度と頻ニ望居候由御座候
- 一安田惣兵衛話生田川湊川之際ニ夷人覆ニ而圖を地ニ畫何賦商館拵候含ニ而も可有之様ニ被察候と話仕申候
- 一佛船二艘去ル廿七日當港出帆ホンコンに趣クと申事御座候
- 一英人と應接いふし候艦之大砲七十二門居に居り候第一之大船ニ而御座候

一此度英船に乗込候儀ハ木村道之助に面會ハシ候様勸メ候ニ付會津安部并政次芦澤生太郎三人木村と同道罷出申候ニストルハ日本重役之外ニ之面會不致由ニ而會津肥後之重役ト彼方ニ之申入置候由ニ御座候  
一今日ミニストル面會不致譯ハ餘り最初之議論有之候故面會ハシテハ面働ニ相成可申ト態ト斷爲申敷ト木村見込ニ而御座候

一談話終り而彼方申候ニハ今日之御議論ハ御尤ニ候得共悉ク感服ハ不仕ト申候ニ此方方も同様ニ返答ハシ置申候  
一此度之軍艦必戰之覺悟ニ之無之候得共存念違不申節ハ空敷引取勢ニ而ハ決而無之様相見申候

十月

森 井 惣 四 郎

十月七日朝議あり勅諭に對する將軍家茂の態度によりては一橋慶喜に將軍名代を命じ攝河泉三國の公領を與ふべきに決す

〔肥後藩士 鈴木登編 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十月八日

○林(新九)ハ六條様、余ハ會へ行、種々之申談、將軍自責之書等之申談居候内、林來昨日御所御決議、大樹公御請次第二は橋公へ御名代、攝河泉三國之公領、不殘橋公へ被進、旗本之士も附屬之儀、内密聞出し大ニ騒動、何様至急ニ御參内可然との建議(日録)

○朝飯後、早々會津行、色々の相談を受、且大事件出来、已ニ明破らむとするを防ぎ留、幕過迄不怪盡力仕、生涯の力を籠メ(十月十一日上田書狀)

十月七日將軍家茂辭意を讞し勅諭奉承の請書を上る

〔福地源一郎著 幕府衰亡論〕

將軍家入京して二條城に入り病と稱して朝せず以て朝廷の上疏に對して如何なる處置ある乎を待たれたるが朝廷にては御評議の末に條約之儀御許容被爲在候間至當の處置可致事、是迄の條約而品々不都合の廉有之不應 叙慮候に付新に取調諸藩業議の上御取極可相成事兵庫港の儀は被止候事と御達に相成り同時に將軍家辭職退隱難被及御沙汰の旨を仰出されたり此御達にては迎も外交上圓滑の處理に難きは親易きの道理なれば將軍家は猶も押返して此分にては取計ひ出来不申候と奉答あるへき筈なりしに當時將軍家の側には然るへき諫諍忠告の良臣も無く概ね皆將軍辭職を喜はざるの輩のみなりければ枉て將軍家を勸めて此勅に満足せしめ遂に七日を以て勅諭承服の請書を差出さしめ將軍家一且の決心も無効に歸せしめたりき

慶應元年八月

〔京都大探 板長崎 索書〕

(十月十日附淺井新九郎書取の一節)

一將軍様御辭表

關白様に御差上之處御同方より御差返ニ付猶關東より御請左之通

臣家茂幼弱不才之身を以大任を蒙り内外多事之時ニ膺り竟ニ職掌を汚可申且近來胸痛鬱閉之症相發難堪大任奉存候處より叙慮之程を度不願退隱「之」願「書」差出候處難被及御沙汰被仰出何共當感仕候素より決心仕候儀今更難思止再三再四熟考仕候處是等之不行届之御咎無之加之難被及御沙汰との龍命を蒙感激之餘症を推而勤仕從前之非を改而口新之徳を修去浮空務實實政道確然と相立上安宸襟下保萬民候様乍不及勉勵可仕奉存候依之謹而御請奉申上候  
十月

十月七日傳奏野宮定功條約不許可の叙慮貫徹せざりし責を負ひ辭表を上る

慶應元年

〔探 索 書〕

野宮中納言殿願書之寫

不肯定功不存寄加議奏之列無間轉役被仰付其砌も不堪恐懼固辭候處再應蒙厚仰不得止事御請申上候是迄勤仕候得共元來寸識無之只々汚大任候而已聊之寸功も無之日夜心痛仕候然處一橋中納言以下參朝外夷事情切迫言上何共不能愚考種々勘辨仕候内追々事相迫無據依請聞食候次第ニ相聞累年之叡慮貫徹不仕皇國御失休之基を開候是全思慮不行届役義輕易ニ相心得一橋以下對談茂盡力不足之義實以恐懼戰栗仕候是近來健忘強其上昨晚以來持病發動國事繁多之時節數日籠居候而之忽御用可及困怠是又不堪恐懼候間重疊恐入候得共退役願度存候是迄殊蒙朝恩萬分之一ニ而も奉報度心底候間何卒愚昧相應之御用相勤可奉盡微忠候此等之趣速ニ聞召候様御沙汰願度候也

十月七日

權 中 納 言 殿

定

功

〔尊攘錄探索書〕

河添聞取略記(抄)

一同(月)九日淺井御小屋へ罷越聞取之趣左之通

(前略)

一正三様野々宮様今度條約御許容付而者攘夷之 叡慮徹底不仕被奉恐入との事ニ而御辭職之筈ニ候由其以前宮様茂御同様之處會津の上り居候御用人敷御諫言申上先御留りニ之相成居候由乍恐 朝廷茂御力弱く義理上ニ御着眼出來兼諸藩々逼而入説之向有之候へ之御畏縮ニ相成翻覆之御躰可嘆事

十月七日幕府は外國條約勅許せられし旨を達す

〔慶應元年八月以後 江都探索書〕

勅 諭

條約之儀

御許容被爲在候間至當之處置可致事

家

茂に

右之趣此度被仰出候付万石以上以下之面々には不洩様可相達候尤御觸之儀者於江戸表可申達候此段申入置候事

丑十月七日

家

茂に

守

十月七日幕府は條約勅許の旨を外人に通報す

(花押)

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

去ル七日於兵庫表異船御應接之節御渡ニ相成候書翰之寫之由今日御城出之御城使持歸候付寫差上申候

(中略)

十月十五日

家

茂に

兵庫港に碇泊外國船に御渡ニ相成候開港 勅許之御書付

條約之儀

御許容被爲在候間至當之處置可致事

十月

慶應元年

家

茂に

二七七



亞墨利加合衆國

シヤルセ、ダフエレル、エキセルレンシー、

アルセ、ポルトメンに

過日中々度々書翰被差遣其都度回答ニも可及處我國事多端ニ而延引ニ相成氣之毒之至候右回答旁左ニ申述候間可然了  
解有之候様致度存候

一條約之儀我大君格別御盡力ニ而京師に被仰立別紙之通 御許容ニ相成候

一兵庫開港之儀者直ニ談判致兼候間よりロンドン之約定ニ極りたる日限ニ開く積り也と雖も萬一事情ニ依而早く開候節

者可開右之一件早速難定候間我等より江戸に申遣し下ノ關償金之第三度目可納之約定之通日本十二月中ニ可相納様申

遣し其外ハ千八百六十四年十月廿二日之條約之通執行可申候

一稅改方之儀委細承諾せり其段急速水野和泉守並酒井飛騨守に申遣し於江戸表精々談判候様爲取計可申候此段申入候拜

具謹言

慶應元丑年十月七日

松平 伯香 守(花押)

松平 周防 守(花押)

小笠原 壹岐 守(花押)

〔探 察 書〕

〔元治元年より慶應元年迄〕

〔十月廿九日附益田勇森并惣四郎聞取書〕

十一月四日江戸仕出ニ而來會藩柏崎才一上京之節也

聞 取  
一昨廿七日會津柏崎才一兵庫表御應接勅命ニ戻候儀ニ付山口駿河守様御病中之處に猶推而御目通いたし相伺候處山口

様御答ニ之伯香守殿兵庫に被差越候節之遠山信濃守御使者ニ而 勅命之通屹度談判を遂可申旨伯香守殿に被仰付候而  
伯香守殿ハ兵庫へ被參右之通應接有之候處夷人方ハ是非英國ロンドン約定通可致と申募候而猶彼方申候ニ之 勅命ニ  
も至當之御所置可致旨被 仰出候儀ニ御座候得之約定之通兵庫表御開港被成候而社至當之御所置ニハ無御座候處と英  
人切迫いたし且又 勅書ニ之 天子之御印相見不之惣躰萬國之誓書ニ之印を居置候ハ只今迄之常例ニ而御座候處此儘  
ニ而之木國に持歸候而も證據確然と無御座候付何卒御印を頂戴仕度と彼方強而願出候付伯香守殿不得止ロンドン約定  
云々之御別紙新ニ兵庫ニ而拵ニ相成開老三名并書判被居置被相渡申候其節拙者ハ段々議論も致度候へ共應接ハ此方へ  
御委任と申候而伯香守殿被取計候付拙者差扣居申候勿論右之次第ハ拙者早速上京之上ニ橋公肥後守様桑各侯に之言上  
仕候得共肥後守様ニハ御用繁ニ而度々御立御座候故才御承知被爲在間敷右之次第ニ而此度拙者應接仕直と被差下候  
議ニ而御座候然處爰許ニ而水野閣老に應接仕直之所置建言いたし置候得共水野侯も京都之御都合如何有之候と御見込  
も付兼當惑之休ニ御座候ニ付猶柏崎方應接仕直之御建言之趣相尋候處拙者見込ニハ兵庫之代地差出候段彼等へ申向若  
聞入候ハ、其趣京師へ奉伺せまも御開濟無御座候ハ、木國に使節船被差立右之趣才申述御斷ニ相成候外無御座候自  
然彼等承引不致節ハ斷然と戰爭と覺悟を極可申外無御座と申趣意ニ而右之候と御答御座候由右之柏崎方直話承申候

〔慶應元乙丑年  
尊攘錄探察書〕

川添聞取略記(抄)

一同(十月)九日淺井御小屋へ罷越聞取之越左之通

一外夷應接果敢々々敷議無之模様等廣澤富次郎方申越候由且伯州閣老大坂方正使を被 命井上永井兩主水様ハ副使ニ  
而御越之由夷人合夥之伯州侯ニ被託唐津閣老御病氣迎御動キ無之議之何方も疑惑之由

一同十日森井從兵庫歸着夷船之模様兩度相建置候通ニ而外ニ相替儀無之由御目付様方之御噂ニ之大坂兵庫とも港之懸

慶 應 元 年

り不立物品も横濱ニ比すまハ高價ニ而夷人産格別不好哉之處此度之談判より無事ニ退帆いたし候との事ニ候由英夷  
カ三ヶ月之中ニ之開ひて見せふと森井に申候詞ニも翻歸いたし不審尤佛之條約御許容ニ而先安心と相見申候木村光  
之助咄ニ而者御談判之模様一切不相分との事ニ候由夷船時々増減いたし一番多キハ拾艘ニ而拾三艘之參不申由未タ  
異船二艘長崎行之筈ニ而風を避兵庫へ殘居候由且又兵庫御出役ハ松平伯州山口駿河守永井主水正赤松左京之御四方  
迄ニ而井上主水正様ハ御出ニ之相成不申由京都を必死之覺悟ニ而御發シ之咄ニハ喰合兼怪之事ニ御座候又々 皇國  
之患を被遺候様之事ニ而之無之哉と堪杞憂不申候(下略)

慶應元年  
〔開成所おみて横濱新聞紙寫取差上候控〕

日本新聞第十七號

西曆一千八百六拾五年十二月廿九日即

慶應元年十一月十二日

横濱開版

英國欽差大臣ハルリー、バルクスは日本と外國の交際中最も緊要の時より重大困難の事務を引き請け附屬の官吏  
と共に理非を説き曲直を糾して遂に條約固保の約定を成し得たり勿論未タ都合よき變革もあらされハ其功全く成る  
と云ふハあらす條約固保の定まりしハ此上も亦喜ぶ可き事なると猶未タ速時之を施行する事能さるハ實に惜  
むべき事なり左も論るる如く一日も早く新港をひらき日本の人民と自由貿易を交へん事吾等の切に希望する所  
也

外國欽差等ハ條約第十四條の行たる、迄ハ千辛萬苦を甘にし勉勵して成功を願ふのみ

譯者按第十四條曰英人各港に諸品物を輸入し賣拂ひ又ハ買入を輸出する事自由あるへし中略双方の國人品物を賣  
買する事障なく其拂方等にては日本役人とも立合を云々

今始て一千八百五十八年<sup>安政四年</sup>の條約を固保する事の定まりしハ漸々其路の開けぬると見えたり御老中は是迄條約の施  
行を拒む川ひし第一の防具即ち所謂御門の怒といふ一物件を失ひぬハ彼ノ第十四條乃如く速に日本全國の人民と  
自由と親貿易を通せしめざる事能ハざるへし苦し否ハ貿易を好める諸大名は外國人と直に貿易する事を許さん  
と云へる事の偽ふまハ江戸の民獨り占買をふすの理非を糾さずんハある可らす今爰に強弱二黨あり弱黨若し約に背  
く事ならハ強黨能く之を制し相當の所置を以て罪を償ハしむ可し然るに強黨之却而恣に貪り我意に隨て約を變をもと  
も敢て之を咎むる者無し外國人若し弱を援けハ弱強全く上と反も可きの

日本政府ハ今も猶一千七百八十二年<sup>天明二年</sup>の法度を強て行ハんとす故に方今の要務ハ此固陋の風習を除らしむるより他  
ふし畢竟令を國中より下して互市を許し環海の諸港を開き少しく改革の端を發せハ必ず愕然として悟る所あり終に時勢  
に隨て諸事を行ふに至るへし

日本人條約に違ふ事必しも第十四條のみならず然きとも吾輩大に注目する所は此條件に係る蓋し方今の一大要務ある  
へし其他第八條<sup>日本の賤民を雇ひて</sup>第十條<sup>貨幣</sup>第十六條<sup>運上</sup>第十七條<sup>事</sup>等も亦論ず可き事なるとも其趣意各異ふまハ  
一々茲に盡し難し

日本人條約を固保せんと約定正實ふまハ近日其證を見る事を得へし假令百事悉く整ハさるも第十四條の要件ハ約定  
の如く首尾よく行ハるゝあるべし前文論する所の件々識者の定評を乞ふ(下略)

石川長次郎譯

十月八日異船多くは攝海を退く

〔長州再征帳〕

十月十三日郡書翰添付

慶應元年

從兵庫表一翰拜啓仕候然者昨夕松平伯州御談判相濟候趣ニ付桑藩森彌一左衛門監察役赤松左京殿用人某に面會相尋候處委細之儀者横濱ニ而談判いゝし候故早々横濱に相廻候様御申向ニ相成候ニ付直ニ今八日夷船四艘出帆いゝし申候夷人ニ而茂迎茂坂兵之兩港者開く事難出來と存込候故伯州と談判容易ニ相決候由ニ御座候右要承候迄奉得貴意候頓首拜

十月八日

惣 四 郎

久 兵 衛 様  
新 九 郎 様

十月八日會津藩安部井政次桑名藩森彌一左衛門御自付赤松左京様に御應接之御模様相伺候處同人之返答ニ大坂兵庫之兩港夷人此節篤斗見分いゝし候處船懸惡敷且大坂兵庫者横濱より茂物價高直人質茂あし九旁横濱を不便利ニ付夷人引取申度存居候處ニ昨日閣老を委細之儀者横濱ニ而應接いたま答ニ而彼地に廻候様御申向ニ相成候ニ付夫を幸として夷船引取候方ニ相決候ニ付最早大坂兵庫者決而氣遣之無之事と御返答御座候由右兩人承申候

一同九日木村道之助罷出候ニ付夷情承候處同人之答と一昨七日閣老御應接出張之儀何共被仰越無之候ニ付夷人者最早大坂に差迫御様子奉伺度と仕度いゝし候ニ付強而制止候得共決而聞入不申彌今八日ニ者大坂表に罷出候方ニ相決英國ニストルより木村に内分相頼候ニ者大坂に罷出候而茂決而此方暴發致不申候得共自然列藩を亂妨仕懸候難計候ニ付如何之形勢ニ候哉大坂之模様探索いたし吳候様相頼候故木村者七日より大坂に罷越同八日朝兵庫に罷歸候處最早同七日八時頃松平伯州御應接相濟夷船同日四艘同八日朝迄ニ悉出帆其内貳艘分ニ長崎表に出帆いたす答ニ候得共西風甚敷候付天氣之爲一滯船いたし候由ニ御座候夷船出帆之儀木村見込之何様夷人深意有之候而出帆いゝし横濱ニ而如何成事申出候茂難計英人之大坂兵庫之内是非々々一港之開可申勢ニ有之候ニ付無事ニ而引取候事甚懸念ニ而御座候と噂仕候間赤松様御答と木村見込ハ相違仕居申候以上

十月十日

森 井 惣 四 郎

十月九日將軍家茂朝命を畏みて辭職の意を醸し奮て政務に執掌すべき旨を達す

〔長防再御追討一件〕

(十月九日達書)

方今内外多事之時ニ膺り御職掌難被爲立思召且近來御胸痛御鬱閉被爲在候ニ付御退隱被爲遊度旨 御所に御願置被爲在候處難被及 御沙汰段被 仰出候素より御決心之御儀ニ付再應御願可被仰立候得共猶再三再四御熟考被爲在候處格別之御寵命を以被 仰出候ニ付御感激之餘り諸事御奮發御勉勵被遊是迄之通御政務御掌握可被遊旨御請被仰上候此段相違候様ニとの御意ニ候事

十月九日尾張玄同二條關白の意を承て登城し將軍所勞につき政務を一橋慶喜に委任せられん事を議す

慶應元年八月  
〔京都大探 案 書〕  
坂長崎

一九日玄同様に關白様より大樹公御所勞ニ付御政務一橋公に御委任可然段被仰聞候付玄同様御同意ニ相成直ニ條登城御談合ニ候得共會候始皆々御不同意若右之通相成候ハ、天下兩立之勢ニ相成且旗下動搖を引起可申旨會候より被仰上候處玄同様御氣嫌被損候由候得共積處是迄橋公に萬事御頼談被爲在候儀ニ付當時勢柄尙更御盡力ニ相成候様從將軍様一橋様に被仰向候様大略御治定ニ相成右之通候ハ、朝廷茂御鎮靜幕府茂賢ニ被任候所置相立旗下動搖茂無之惣而御左右を始御黜陟有之大概御内評ニ相成居候由ニ而今日共ハ御治定ニ相成答ニ有之候段小禁權之允君侯より相伺候段今日承申候

一將軍様御參内之儀起居候得共關白様より御厚意之由ニ而今暫御見合御都合次第御内意有之趣ニ有之候事

十月十日

淺井新九郎

十月九日小笠原長行老中格となる

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

〔文久四年より慶應二年迄〕  
水野和泉守殿御渡候御書付寫貳通（一通は今探らず）御覺書寫壹通（十六日の條に出つ）相逢候間被得其意云々

十月十六日

大目付

松平大和守殿

津輕越中守殿

右留守居

大目付に

小笠原壹岐守事去ル九日於京都加判之列被仰付候此段向々に可被達候

十月十五日

十月九日日本藩安場一平書を矢島源助に贈り木村得太郎の談話にかゝる異船攝海へ入津以來幕府の動搖及び對外交渉の概略を報す

〔布田文書〕

〔布田政之氏藏〕

矢島君

御直披

安場

打絶御疎情奉存候先日來御出府之御模様ハ日々程御待申候事ニ御座候處御作事御取懸り之由爲被成御世話と奉察候處  
京攝之事情近日追々急左右有之昨夕木村得太郎三日立ニ而着いたし相分り候大略左之通

先月十六日英佛之軍艦九艘攝海に渡來關老應接有之廿七日迄ニ兵庫開港之返答を期し候由之處阿部松前兩關老之見込  
ハ京師に御伺ニ相成候而も六ヶ敷去り迎御斷切ニ相成候而ハ是非共天顏を拜し直し談判いたし候との申出ニ付左様ニ  
相成候而ハ幕府ニおゐても不相濟次第ニ付幕府ニ而取切り開港差許候との論橋公會津杯之論先當時開港御許ニ相成候  
而ハ不相成との事ニ而廿七日大議論ニ相成期限ハ必多もの差迫り候間大坂町奉行井上主水正を俄ニ兵庫ニ差遣先廿七  
日之期限を差延ニ相成右井上一通り之事ニ而ハ異人開入中間敷とて指を切て誓を立候覺悟ニ而既ニ短刀を抜申候處異  
人大ニ驚愕決して左様ナル切迫之事にてハ無之當時長征も御取懸り之事故開港も決して取急キ可申譯も無之候へ共阿  
部關老方開港之機會此節との事故攝海に相迫り爲申との事ニ而初而内情相分引返し申内途中にて阿部老ハ最前之論を  
主張し其談判之爲兵庫に被參候所にて廟議一決開港差許可申との事故外國之事情も々様々との趣を以強而引戻し申  
候由其故兩關老あたり之詐術露顯いたし候間兩人追込メ被仰付右之段爲奏聞一橋公登京其末兩關老官位御取上ケ在所  
謹慎被仰付候其内將軍家職掌相勤り兼候由之處將軍職御斷願書差出直ニ關東に御歸城被仰出候處橋會杯之力にて先伏  
見に御滯ニ相成居申候尤二日大坂御立ニ而伏見ニ爲被爲在山ニ御座候左候而三日之夕出立いたし候間其後ハ如何相形  
付可申哉 朝廷之方ハ先何事も宜キ模様ニ候將軍家之罪を正し奸吏を撲ひ人才を舉ル位之論ニ御座候由御人歸リニ差  
臨大略之事情迄拜呈仕候委細ハ御縁合御出府之上ニ譲り置申候以上

十月九日

十月十日我藩京都留守居上田久兵衛一橋慶喜に謁し慶喜に將軍名代を命じ攝海泉三國の公領を  
與へんとするの朝議ありし事を告げ且つ速に將軍の參内あらんことを勸む

慶應元年

二八五

〔肥後藩士 鈴木 登編 上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十月十日

○一橋様御旅館ニ而御老中松平周防守様、小笠原壹岐守様拜謁、種々御相談之筋有之、畢而尙登城仕候様被仰付、於御城壹岐守様へ機密之件々申上候（御奉公附）

○大夫行申談、橋公行、謁見奉願候へとも、彼是と申立御断ニ付、引取候筈之處、御懇之御禮御頼等有之、橋公御名代攝河泉三國ノ公領を御讓之儀、七日朝議之事等、極密申上候處、一々御懇憐御同意ニ而、尙御相談可有之、直様登城仕候様被仰付、多賀方ニ命を待居候處、御側役林福太郎を以御呼出、御案内有之參謁、頻ニ建議、自責之御書下調仕候様被仰付、暮過引取、大夫行申談（日録）

○早飯後夷則殿と相談、一橋え出方直と存念之筋申上候筈之處、橋公事を左右に寄セ御逢無之中、周防守様壹岐守様一同御參殿ニ而、兩閣老同席ニ而御逢ニ相成、周防守様には初而拜而仕候處、逢事は初ニ而候へとも是迄天下之事ニ付深く盡力いたし吳忝候、乍此上宜世話頼入候間何事も無遠慮申問吳候様、懇々御頼ニ而、奴頭を寄せ機密之筋を書迄申上、御參内之儀急ニ無之候而ハ不容易混雜差起可申見込之次第篤斗申上委細御承知、尙又御尋之事共有之候内、一橋公兩閣老へ御逢ニ付、久兵衛を今日中ハ御城え呼置相談可仕、直ニ出方可仕旨、御口を揃へ被仰聞候へとも昨日御門入兼候趣申上候處、彼是御相談ニ而、唐津侯旅館に控居候様、追付呼出し可申との事ニ而、御待申居候處、唐津侯御側役を以、御城へ案内被仰付、登城仕、暮迄御相談相手に相成、被仰渡之書面等内々取調候様被仰付、引取懸ケ夷則殿へ逐一申談歸（原註）十月十一日上田書狀

十月十日英佛蘭三國の軍艦五隻兵庫より横濱に歸る是日各國領事は今般本邦と英佛米蘭四國との間に締結せし取極めの要領を各國在留民に布告す

〔慶應元年 開成所おるて横濱新聞紙寫取差上候控〕

日本新聞第十三號

西曆一千八百六十五年十二月一日即慶應元年乙丑十月十四日横濱刊行

去月廿七日即我十月十日英船ブリンセス、ロヤール、ペロリニス佛船ドブレイ、キンサン荷蘭船ソウトマン以上五艘兵庫港より當港ニ歸帆せしより各國在留人へ左の廻章を出せり

○ 神奈川在留英國コンシユル館ニ於て

一千八百六十五年十一月廿七日我十月十日

英國欽差全權大臣日本在留ニストル ハルリス、バルクス君より左の趣を申越されゑるに依て當港在留英國人一同へ及通達者也

コンシユル マルキユス、フロウエルズ 別紙

此度欽差バルリス、ハルクス佛蘭米利堅荷蘭三ヶ國の使臣と共に大坂ニ赴き談判の上左の三ヶ條を取極め候間此段令布告者也

第一 大君と洋外諸國との條約の儀此度

日本皇帝より免許有之候事

第二 輸入貨品租税の儀ニ付不適當之廉々改正之儀ハ近日江戸表ニ於て取扱相成候事

第三 兵庫并大坂を開き候義ハ去ル一千八百六十二年倫敦府ニ於て會議有之候節取極め日限迄延引相成候事

慶應元年

原註  
(米利堅文同じ佛蘭西文ハハバ勸會議とあり荷蘭文ハハ一千八百六十八年第一月一日來加年十月二日某日までとあり按シ文ハ異本とも期限ハ同じるべし)

但し時之模様ニ寄り右期限ニ先立ち開港相成候事も可有之事

以上

英國欽差全權日本在留ミニストル ハルリー、ス、バルケス

於大坂港十一月廿五日我十月八日

○外三ヶ國の廻章何をも大抵同文言ふるを以て之を略す

佛蘭西ハミニストル レオン、ロセスの名を記し米利堅の廻文ハチヤルジダツヘイルス、ボルトメンの名印ありてコ  
ンシユル、ゼオルゼ、スピスセル之を布告し荷蘭文ハコンシユルフワン、デル、タツクより出る者としてミニストル  
デ、ガラーフ、フワン、ボルスブルツクの姓名を記し各國の詞を以て之を布達せり

○

今敢て四方の看官君子ニ報告せんと欲するハ別事ニ非ず此度日本皇帝去ル一千八百五十八年の條約を許し且去ル一千八百六十四年英國倫敦ニ於て同盟諸國會議の節書載ふる諸ヶ條を許容したる事也偕アルコツクの見込ニ隨ハバ償金ハ拂ハるべき筈ニて兵庫の如きハ日本政府の好みニ非されバ來ル一千八百六十八年迄ハ開港し難き筈なり

今言ふ所の諸ヶ條ニ付て 日本皇帝よりの勅許ハ容易ニハ得難き事共ニて實ニ前週日ニハ兎的にも成功なき事と思ひ切  
りたり然るニ俄ニ 大君還御の沙汰ニ及ひ已ニ御發途ニ相成其上ニ橋公を筆頭とし其外御老中數名參内ニ及ひ  
皇帝と御面會手詰の義論ニ及途ニ勅許の手續キニ至りたり

風説ニハ大論の時ニ當リ一橋公ハ天子若シ條約を許さふニ剩外國人を日本の地ニ入るゝ事を許さずんバ必ず切腹せ  
んと言述たりと素より此公ハ賢明の質なれば意ふニ若シ 天子勅許を下さずんバ自然外國人と戦争ニ及ひ萬民塗炭

ニ苦まん然らハ生きて之を見んより寧ろ死せんとの事あるべし是ハ日本人の氣象ニ隨ひ吾輩評する所ナリ  
禁裏ニて御老中一橋公大目付其外諸役人列座ニて 皇帝と面會ニての議論ハ實ニ花々敷事共也トイヘリ

此度西海行ニて諸國の全權 日本皇帝の自手ニて名を書し且つ印を押したりと言ふ書付を得たり然をども其全權等ハ  
公家衆一人も見ざる由亦談判事ハ萬端 大君の臣下の取扱ふ所ニして公家衆一人も談判ニ付て外國船ニ來る事ナリ  
し之ニ依て吾輩疑らくハ其名前書并印共ニ 皇帝の自手ニハ有さるへし然を共強て之を偽物と見るも亦證據ナシ且又  
外國人西海ニ在る時御老中と應接したるも只三度ナリと言ヘリ

○  
今迄外國人の仕方ハ大君をして實ニ國君の名號を存せしめ且ツ實權を握らめんとせり乍去途ニ成功の期ナシ大君の  
威權ハ影ニして其名號ハ虚ナリ其一二を擧て言ハバ已前リチャルゾン殺戮を被るの時現ニ犯人ありたら之を裁判所  
ニ呼出その權なく理非を問ハず償金を取られたり現在の事を言ハバ五ヶ月已前より大師を率ゐて進發しふる謀叛人  
の長州を征するの力ナシ

日本の政事者ハ皆支那を以て規矩とす故ニ大事ニ臨み事を誤る事多し去年日本役人中ニハ人品賤ららず勇敢ニして少  
年の意氣を存する者往々あり

今の時ニ當リ若シ大岡秀吉の如き英雄あり將軍の職ニあり其先祖の如き智勇を兼備し三港の開けたる後好機會を見失  
ハざるの見ありて厚く外國と交りたらバ莫大之人命を損さず或ハ夥多の金銀等を費さず日ふらすして 皇帝の掣肘を  
免を自ら獨立の國君たらん事手を反すが如くふらん

大坂ニ於て通商始りふバ横濱の交易衰へふん哉否是レハ後日詳説すべし

十一月廿一日譯成

鈴木唯一譯

十月十一日一橋慶喜政務輔翼の事を命ぜらる

慶應元年

二八九

〔長州再征帳〕

十月十三日郡書翰添付

御城出之御城使手ニ入候御觸達寫

十月十一日 周防守殿御渡

大 目 付

御 目 付

此度格別之被爲蒙 御寵命御請者 仰上候得共何分不容易御時節ニ付一橋中納言殿に御政事御輔翼之儀被 仰出別而

十分ニ御助力被在之候様被 仰出之

右之通一橋中納言殿に被仰出候間御供万石以上以下之面々に可被達候事

十月

〔慶應元年八月以後 江都探索書〕

朝廷より御沙汰之寫

大 樹 に

國事多端之折柄頃日以來所勞ニ付一橋中納言爲名代諸事可加指揮事

攝海防禦等急務ニ付右名代中攝河泉所領可宛行事

名代中車寄より昇降劔持參於廊下休息之事

從二位大納言宣下之事

右昨十一日議奏を以被仰出候由さる方へ申越候趣中納言殿直ニ御斷之由承り申候

十月十二日

右者御出入御坊主山本宗節より御城使に書付差遣申候付寫差上申候以上

十一月

澤 村 脩 藏

十月十一日一橋慶喜閣老連署を以て諸藩召集猶豫の願書を上る

〔慶應元年 風聞書〕

十月十一日

飛鳥井殿野宮殿に一橋中納言殿之しめ五人より差出候書付

此度異船渡來ニ付大樹より申立候次第有之懸衆議彼是國是。度候間諸藩爲召登可申若難令上京候ハ、重臣上京可申旨

御沙汰之趣奉畏候然ル處異船退帆後急速防長之所置取懸り可申段申上置候處今一應見込相付可伺旨御沙汰ニ付而之猶

盡評議自然夫々出張等仕運ニ相成候時之唯今上京等相達置候而之不都合之儀も御座候間評決迄之處暫時御猶豫被成下

候様奉願候以上

十月十一日

小 笠 原 登 岐 守

松 平 周 防 守

松 平 越 中 守

一 松 平 肥 後 守

一 橋 中 納 言

飛鳥井中納言殿

野宮中納言殿

慶應元年

十月十二日本藩政府は書を在京郡夷則に贈り先月末より本月初めに亘る朝暮關係異船廻航等に關する報告の旨により藩議を開きて之が對策を講ぜしと雖も國論未だ確定するに至らざるを報し且つ其後京攝の形勢を案し時運の變遷を嘆す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ  
今十二日態と上々早打御飛脚差立申進候先月廿四日江戸の御飛脚を御地々早打ニ而被差越候ハ去ル七日之朝着先月廿六日ニ差立候早打ハ去ル六日之夜着廿八日之早打七日之朝着去ル三日早打ニ而被差越候木村得太郎儀は去ル八日之夜着將軍御參内御奏聞之趣を初夷船攝海へ乘廻候次第幕吏之奸計露顯將軍御斷一旦ハ去ル三日大阪御發途東海道還御之御沙汰も有之候得とも右之御沙汰之相止伏見に御達茂有之候へとも右之事件次第階級朝暮之御模樣橋會桑之様子等委曲被仰越且又得太郎直話之趣茂夫々具ニ承知いたし御職掌御讓等如何哉定而御持續之御運ニも可被爲至歟且夷人御談判筋等如何之御都合ニ相成居候哉誠切迫之秋ニ而御座候右付而之上歟兩公子之御内御登京御盡力被爲在度との儀若其儀ニ不被爲至候ハ、御同席内登京之儀被示聞候付得太郎着翌日々々打寄參談評説いたし候へ共確乎たる御國論之見居へ御登京御比合之見直未一定ニ至兼得太郎亦一刻も反命を以へぎ候得共未差立候時ニ至兼御地よりは嚙々御待可有之と先右大略之貴酬此許之様子一通り可申進と早打差立候事ニ御座候帶刀方も出府之儀直様申遣置候へとも未出方無之成丈急ニ申談御國議相決候ハ、直様得太郎差立可申候間先左様御聞置可被下候異人押而登京之様子付而之御手當筋被是之御勞配兎角を可申様も無之三日後京攝之御模樣如何成行居可申哉世上ケ様之勢ニ相成候儀ハ氣運とハ乍申無是非次第大息候迄ニ御座候此元是迄之咄合委細之様子ハ得太郎より申向候山ニ付御承知可被下候以上  
十月十二日  
佐 渡 省 連 名

郡 夷 則 殿

十月十二日長藩の使者大坂に到り毛利左京同讚岐の上坂期限猶豫の願書を幕府に提出す

〔慶應元年廿年の風聞書〕

藝州家より差出候書付

毛利左京毛利讚岐方左之者共差越別紙之通申聞候ニ付奉入御披見候此段申上候以上

十月六日

松 平 安 藝 守

別紙

毛利左京家老

田 代 内 記

毛利讚岐家老

内 藤 忠 太 郎

先般毛利淡路吉川堅物登坂之儀御達御座候處若病氣ニ而押而も難罷出節之私共末家讚岐本家大膳家老共之内申合當月廿七日迄ニ大坂表に罷出候様御沙汰之旨被仰達奉得其意候然處私儀生來弱躰之處近來種々之病症相加彌増起居不任心底急々快氣相成候躰無御座候間此段被聞召分程能御取成被下度偏ニ奉願候以上

九月十九日

毛 利 左 京

前同文言然處年來持病之脚氣此節別而差募難澁仕急速發途難仕御座候何卒一ト先發途延引仕候而も不苦候様程能御取成被成下候様偏ニ奉願候以上

九月十九日

毛 利 讚 岐

慶 應 元 年

二九三



左京讃岐使者演舌書

今般左京讃岐より別紙歎願之趣ニ付使者被申付九月十九日國元出立仕候尤重大之事件ニ付示談之趣も御座候間本家並徳山岩國にも罷越旁以延着仕候何卒程能御執成奉願候以上

大膳使者口上書取

毛利淡路吉川監物登坂仕候様御達御座候處若病氣ニ而押而も難罷出節之毛利左京讃岐並大膳家老共之内申合九月廿七日迄ニ大坂表に罷出候様御沙汰之旨奉得其意候然ル處左京讃岐兩人共病氣ニ付銘々々委細御届申上候通御座候然處最前淡路監物御呼登御達之節右兩人並家老共申上候次第も有之且左京儀之生來弱躰之上種々病症相加り讃岐義も持病之脚氣差發り兩人とも急ニ發途仕舞無御座候就而之千萬奉恐入候得共右無據譯柄ニ而進退相窮候次第御汲取被成下此節登坂之儀一ト先延引仕候而も不苦様程能御執成奉願上候以上

右之使者十月十日廣島に着之由ニ而同十二日大坂表ニ而藝藩坂本十郎福永助左衛門同道にて宮津候に差出候由

十月十三日在京郡夷則は異船の退帆及び朝暮の關係を述べて藩主上京に關する意見を藩政府に

開陳す

〔長州再征帳、京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以別紙申達候兵庫表ニおいて松平周防守様御談判相濟去ル八日夷船退帆いたし候段森井惣四郎來翰且探索書共指進入御披見申候右御談判之模様曖昧たる事ニ而確と相分不申由何様條約御許容之趣御書翰を以被仰向候哉ニ而兵庫開港之儀斷然御拒絶と申埒ニハ至兼候様ニ被考後道之禍を被遭候筋ニハ有之間敷哉と切ニ憂慮いたし候事ニ御座候併無事故退帆いたし候處ニ而ハ朝暮之御間柄眼前之患ハ薄らき候譯ニ而其儀ハ責而之事ニ御坐候然處將軍様御辭表ハ一旦御指返ニ相成候得共御幼弱ニ而御届兼ニ付一橋公に御政務御預と申儀 朝議沸騰之由ニ而御參 内も暫御見合ニ相成居候様殿下より御内意も有之たる哉之處幕府よりハ萬端橋公に御依頼且是迄之御盡力を被賞官位御昇進之御願立等も有

之趣ニ而少しハ 朝廷之御都合も宜敷御模様ニ付連ニ御參 内今迄之御不行届を厚御詫被仰上乾と御誓發ニ而長防御處置等之御運を被爲附度奉懇願候且又各藩召且阿松兩侯御預之 朝命所司代迄下り候由ニ而會藩より相談之趣有之右兩條共暫御猶豫之儀此方よりも周旋ニ及せ先表發ニハ至不申由ニ御座候右御書付寫入御内見置申候將又御東歸一件御不都合付而も乾と御難陟を不被正候而ハ難相成との 朝意も被爲在候由ニ而彼是御難事打重何も正大之御處置ハ相立兼實ニ幕府之近狀可憐之御次第其上於 朝廷も御土臺据り兼御反復之儀も不少哉ニ被伺最可歎之形勢ニ御座候右等之事情ハ一々錄呈不能夷船退帆之段迄爲御承知態と早打飛脚を以申達候事ニ御座候以上

十月十一日 十三日ニ延

郡

惣連名殿

尙々淺井新九郎書取並森井惣四郎探索書共只今相達候付則差進申候

致追啓候一橋公に御政事御輔翼之儀被仰出之趣別紙書付御留守居より相達候付則差進申候緒近衛様より薩筑因備召登之儀一會桑之三賊 釐穀之下ニ罷在 勅命を矯御爲ニ不宜候付可打拂との趣を以薩之井上大和を急に密使として被指立候由其事洩聞筑前にハ東郷吉作より注進いたし候由ニハ候得共彼國習又々激家沸騰可致歎と憂慮いたし候由誠ニ種々之紛擾打重皇國之危急今日ニ相極御國許之儀奮然御覺悟筋相立不申而ハ決而難相成既ニ御登京之儀も追々申上置候通ニ而若御因循ニ而御退縮被爲在大事之機會を被迦候様之儀御座候てハ忽ち御進退御窮蹙之御場合ニも可被爲至と深奉恐入候且又先月以來度々急飛等を以申達候趣も有之候得共未タ一封之御報書も相達不申彼是懸念之次第ニ而此許御役々於周旋筋も甚以當惑痛心之至ニ御座候實地ニ差臨迫切之情難默止右之趣追懸得御意候事ニ御座候以上

十月十三日

郡

惣連名殿

十月十四日幕吏栗本瀬兵衛横濱に於て外人と會商の爲め東下す

慶應元年

〔新美記録〕

一同(月)十四日兵庫御談判間違之事有之栗本瀨兵衛様御東下横濱ニ而御談判御取直之筈ニ候事  
十月十六日松平康直老中を免ぜらる

〔御同席觸寫大目付様御廻狀并御書扣〕

(十月廿三日水野和泉守渡)

大目付に

松平周防守事御役御免前々之通帝鑑間席被仰付候

右之通於京都去ル十六日被仰出候間此段爲心得向々には可被達候

十月廿二日

〔慶應元年日記〕

十月十九日

一聞老松平周防守様去ル十五日竹田耕雲御取計筋ニ付而二萬石御加増之處翌十六日御役御免ニ相成候是ハ外夷取計筋  
阿部松前兩森臣一味ニ付而之由右程之役々十五六人も御役御免ニ相成候由周防公之褒貶且幕を分不得止御取扱と被考  
板倉侯ニも明日日ニ之御着之由左候へハ松平伯耆侯ニも御役御免と取沙汰聞老惣打替りニ而此後正大至當之御處置被  
申度乍恐奉萬祈候

十月某日能勢大隅守長崎奉行に任ぜらる

〔鶴崎長返達御用狀扣〕

文久三年四月以來慶應元年迄

(十月廿二日中山報告於長崎表御達の書付寫)

能勢大隅守事長崎奉行被

仰付候旨從江府被仰下候間爲心得相達候

丑十月

十月十八日松平容保松平定敬小笠原長行參内して防長處置につき朝裁を仰ぐ

〔新美記録〕

一同十八日會侯桑侯唐津侯御參 内長防御所置御内伺其次第八先大小監察廣島に差越末藩之内同所に呼出詰問仕共申出  
ニ寄處置仕筈ニ御座候と申義御伺ニ相成候處尙申出之趣申上其上手を下候様被仰付候由候處聞老當も其御運ニ而ハ餘  
り手間取宜間敷と之御見込ニ而殿下當に周旋御頼有之候由ニ而周旋致候者茂有之直ニ御處置と申事ニ相成候

十月十九日松前崇廣江戸に着す翌日阿部正外亦到る

〔御飛脚前探索筋言上并御家老達等之扣帳〕

十月廿八日

一今日之御飛脚に左之通及上候事

松前伊豆去ル十九日夜五時分御老中様方日々御登城位之供廻ニ而道三橋屋敷に着候處此節海上惡敷國許に之渡海難相  
成由ニ付暫滯府願立ニ相成候由之處其儀難叶旨被 仰出候由ニ御座候  
阿部豊後去ル廿日夜山下御門内屋敷に着候由ニ御座候

十月廿八日

澤村脩藏

十月十九日大坂町奉行井上主水正東下す

慶應元年

〔新美記録〕

一同(月)十九日井上主水正様早打ニ而御東下

十月廿一日郡夷則は京都に於ける上田久兵衛公武間周旋の件及び其後の形勢の一斑を藩政府に報し且つ時機を失せず公子の内一人上京し大義の爲めに至誠を以て盡力あらんことを請ふ

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ  
以別紙申進候將軍様御辭職ニ而御東歸思召之一件大ニ 朝廷之御都合を被損ニ條御入城後御參内之御運ニ茂至兼御進退御困窮之御場合ニ相成居候處此度閣老大小監等非常之御難事且征長御手順被仰上之儀等夫々相濟稍々朝議御鎮靜ニ赴近々御參 内相濟候得之直ニ大坂御歸城征長一件御手を可被着御内定ニ被爲在候由右付而上田久兵衛初朝暮之御際ニ立入盡力周旋之次第等ハ委細別紙書取之通ニ御座候此節之儀御双方之御依頼ニ而久兵衛儀も不一方骨折仕今日之御運ニ相成候ハ實ニ天下之大幸ニ奉存候此上ハ於幕府彌以賢才ニ被任御祖業を御維持被爲在猶又御失體之儀等無之様窃ニ奉懇祈候借征長一件付而者御先鋒之御任別而御大事之儀ニ付屹ト御出師之御覺悟不被爲在候而者難相濟御座候處如斯變轉之形勢容易ニ君上之御動キ者天下之爲何程可有御座哉先御備手御人數御練出兩公子之御内御出張ニ而御指揮も可被爲在哉夫等者御國之御覺悟次第御留守居邊方幕府に申立候筋も可有之篤ト御評議を被凝度存候然ルニ從近衛様諸藩召之儀ハ薩因備ニ越前宇和島兩老侯之由右之御方々御出懸ニ相成候ハ、 朝議一變又々混亂を生し可申哉誠以憂慮ニ堪不申候御國許之儀長防御一舉も被爲在候上猶御登京ト申ハ重疊之御難事ト深奉恐入候得共今日危迫之時體朝廷大根本之御條理相立候儀第一之事ニ付薩州之舉動ニ被應公子御一人者至而御手輕ニ而御登京 皇國之御爲各處ニ御忠節を被爲盡候様偏ニ奉仰冀候尤中外多難之秋ニ當御登京御周旋之儀ハ彼是御懸念も可被爲在哉之處時勢義理ニ隨

醇々として御誠實を被爲盡萬一御趣意相立兼候時ハ御守衛人數迄被殘置斷然御引揚ニも相成可申右等之儀ハ實地ニ御踏出被成候ハ、時處位至當之御所置も可被爲出來僅カ久兵衛一人之力ニ而する潜カニ幕議を奉輔朝廷之御都合を茂大概取直し候程之事ニ候へ者公子御登京ニ而御至誠之御周旋被爲在候ハ、究而御趣意貫徹大義を被伸候茂此時ニ可有御座必々機宜を不被爲失様御覺悟之程吳々も奉願上候併々様ニ重大之御事柄打重候而者御許之御配意如何計敷ト深く透想仕候右之通ニ者候得共幕府之近狀些々御筋相立候處ニ而者薩州方茂頼ク御動ニ者相成申間敷敷左候ハ、從御國御先立御上京ニ者被爲及間敷奉存候何様御心決之御模様ハ一刻も奉伺度屈指追々之御報を相待居中候右之趣爲可申達態ト早打を以如是御座候以上

十月廿一日

郡

惣 連 名 殿

猶々木村得太郎下着付而ハ穩ニ御評議筋も可有之候得共此許近日御備手茂段々ト着營御用筋も益多端之折柄一日も早く歸京不致候而者甚心遣之儀も有之諸事御急決を禱申候且又御備手交代之方も暫懸留置候處御登京之御模様且御見込次第ニ者早々解放之達ニ茂及可申木村歸京之處ニ而ハ御様子も相分可申候得共猶爲念得御意申候以上  
付札

・本文征長付而從公義御軍艦も可被指出哉且海軍總督之儀も御伺ニ可相成哉之趣此節被仰越通ニ候處最前御討入之儀御主張之節も淺井方會桑邊へ實地之談判ニ亘候へ共右様之御手賦ハ一向相整居不申趣ト况ヤ此度御不手際之末穢ニ御歩ミ付候位之場合何分右様之儀持出之時ニ至兼心痛之次第ニ御座候尤御留守居に者篤ト相含置可申ニ存候以上

〔京都大坂坂長崎 索 書〕

此一綴之現書十月廿一日御國に上々早打之飛脚ニ自筆方申向濟(以上は朱書)

慶 應 元 年

將軍御參内御遲延ニ付而者 朝議茂種々沸騰之趣相聞列藩 召之儀茂寸斗御取消出來兼候御模様相伺右之通ニ而者 此末瓦解顯然之儀ニ相考申候付去ル十三日先正親町三條様に參上仕段々御見込之次第奉伺存意之筋も委曲申立候處存 之外御懇話出來申候而是迄近衛内府様御評議之事柄迄茂打明御内話有之此上者久兵衛議論ニ屹度御同意ニ相成候 との事故若跡立而御異論等有之候様ニ而ハ 朝廷之御爲重疊不可然奉存候段申上候處指而御異論無之一日茂早ク御參 内之儀可然との儀早々殿下尹宮に參上此方至極同意之趣を以申上吳候様との事ニ付直ニ關白様に參調存寄之儀一ト通 申上候處全幕幕府此節之御失體ニ付而者以之外御憤怒ニ而武門之棟梁ト申者敵茂不見して逃歸り病氣を申立職讓りホ と願出何之而目ニ參内者出來可申哉と御顔色を被變種々御論有之誠ニ御勢烈敷御座候故先其鋒先を避ケ一々御尤ニ奉 存候段申上舉而奉伺候ハ右之御趣意ニ御座候得者御辭職被仰立候節直ニ被遊御免候而茂可然處何故御留ニ者相成申候 哉今度之御失躰實ニ御沙汰之通御座候へ共全奸吏之所爲ト申者ニ而已ニ御留ニ相成候上者將軍之御職掌屹度相立候様 朝廷方茂御補立有之筈之事ト相考申候長防之罪ニおひてハ幕府之御失躰ト申而加減者有御座間敷 朝敵之名義有之上 者是非征伐者可被仰付將軍職ハ被立置御參 内茂難叶躰ニ而結局 朝廷之御安危如何之御見留メニ被爲在候哉甚不安 意ニ奉存候段申上候處不怪御當惑之御模様ニ而御返答茂無御座候故尙申上候ハ御參 内一日延引仕候へ者一日丈人心 之疑惑を増し内者 朝廷之紛擾外ハ長防之輕侮愈増ニ相成且内府様方内々被召候諸藩茂有之哉ニ承申候假令不被召共 西國方 朝廷之御爲ト申唱近々ニ登京之藩茂可有之杯巷説取々ニ御坐候万一左様之折ニ而も將軍様浪華城ニ被爲入候 得者何故登京ハムし候哉と被差留 朝廷に御伺之上登京有無之儀御差圖可有之杯とも可被仰出候得共二條城ニ御幽閉 之姿ニ而者右等之手段茂出來兼 帶轂之下ニ自然尙又紛擾を生し申候ハ、是誰る過ニ而御座候哉と申上候得者殊之外 御感悟ニ相成御懇之御挨拶此上者實ニ一日茂早ク參 内急ニ下坂有之度一々了解ハムし候乍併先日長防處置之筋尙一 應取調申上候様御沙汰ニ相成居候得共其御請無之一刻茂右之御請申上候得者參 内之儀者子細無之右之趣内々ニ而登 岐守に委敷申談候様との御事ニ御坐候扱此上長防之御所置何ぞ相變儀も有御座間敷候得共先月廿七日之期限も徒相成

御内場御不都合之事共差起り候付而者第一討手之諸藩も體を解可申歟今一應永井戸川之兩監を被差遣昨年服罪之次第 を照し御詰問有之其模様ニ應し諸藩ニ布告シ 大筋を被進候方順序を得可申歟ト申上候處其通ニ候得者少茂御異論無 之旨ニ御座候扱又先日諸藩召之儀被仰出于今御取消と申譯ニも至不申由長防御處置差懸り居四國中國九州之諸侯何を 以登京可仕哉此儀如何様之御見込ニ御座候哉と申上候得者夫ハ素々長防之處置出來候ハ、何しニ可召登哉此切迫之折 柄七日も十日も長評定御請も出來兼候様ニ而ハ征伐之儀無覺東然時ハ諸藩を召登衆評ニ可被仰付と其儘見合せ居候段 被仰聞候間至極御尤奉存候此上ハ幕府ニ而連ニ御評決斷然之御處置有之候へ者諸藩者被召間敷哉ト奉伺候處勿論之事 ニ付兎角急時明々候様盡力ハムし可申旨ニ付奉畏夫方尹宮様に參調前條之次第篤斗申上候處一々御同意ニ而 參内延 引之儀當職之怒何分ニ茂解候方之事と見込候へ共幕府ハ如此不都合之末ニ付何歟ト親藩ニ相談成兼外藩之正論を尙ニ 頼談之筈ニ而先時申遣置候事ニ有之誠ニ懸念之處右之始末承知ハムし重疊案堵乍此上万端頼被思召候との趣ニ而引取 申候事

十月廿日

上 田 久 兵 衛

同十四日早朝登岐守様に奉伺候處御城に出入仕候様被仰付目付様方御達之趣も有之登城仕候處登岐守様前件之譯筋 逐一御聞届ニ相成可成丈急時明候様御評議可有之段被仰聞同夜ニ至御評決之上存寄等之儀委細御尋ニ付不願憚夫々申 上候扱廟議至密之件々御役々難陟之輕重等迄纒茂無殘處御内談有之十八九日迄御治定之稜々拜聽感服退出仕候 一 同十六日永井主水正様方御呼出ニ付御城に出入仕候處此節長防御所置筋御所に被仰立候儀ニ付而段々御内話有之一休 長防之御征伐を手近く申せハ親之仇ニ追々廻り逢ひ不手際ニ而討損シ候共連茂不討ニ濟候譯ハ無之候此儘ニ時日に移 し候而も天下之人心離散徳川之御家滅亡之儀ハ顯然又長防に討入仕損し候而も滅亡所詮運を天ニ任せ討入候外有之間 敷諸藩之向背ハ敢而御構ひ無之助太刀之無キ故仇討を止ルと申例も不聞若返り討ニ逢共男者立候事故屹度御憤發勝敗 者差置斷然之御處置有之外いたし方も無之儀と決定いたし候然處久兵衛議論にてハ先大小監察ニても御使ニ被差遣今

一度御詰問之上模様ニ應シ大旗を被進候様との見込ニ有之候由閣老承候 大旗者急ニ被進其中ヲ駈抜ケ三五日前ニ一應詰問之間ニ大旗者境ニ至ルと云様ニいたし度尤余り無謀ニハ無之哉との御尋ニ付左様ニ御憤發可有之と者乍恐不奉存夫故第二等之策を講シ申候右之通御一手ニ而御討入と申程ニ相成候ハ、列藩手を拱て傍觀仕候者有之間敷其處即御勝算と奉存候段申上候當日夜分ニ懸ケ數度之御面話頻ニ切迫之末永井様橋公に御出ニ相成申候橋公御頭指ニ而御登城無之候 尙又瀧川播磨守様より委細被仰諭候趣有之退出仕候今晩周防守様以下難陟之儀一々登岐守様兼而御内話之通ニ御座候

一 翌十七日早朝永井様へ參上夜分之御模様奉伺候處橋公最初之間ハ段々御異論も有之將軍様御下坂之儀ハ不可然との御論も有之候由之處此稜此稜永井様と密々御相合候次第も御座候全橋公之咎ニハ無之附屬之面々身を謀ニ出候様被考候 永井様篤斗御辯解ニ而御決議ニ者相成候へとも今朝猶會候唐津閣老ニても今一度橋公に直と御取究之上御參 内ニ申事ニ相決申候

一 十八日永井様御城に被召出謁見仕候處昨日者朝廷ニ而俄ニ御役々揃兼橋公初メ之御參 内今日ニ相成申候扱被 仰立之筋ハ兎ニ角最初久兵衛殿下に申上置候見込之通ニ御決し一應大小監察御使番等を被差遣御詰問ニ相成其模様ニ應シ 大旗浪華城を被發候筈との儀ニ而模様申ハ浮たる字ニ有之候故 御發向之緩急ハ豫メ御取究無之候右之通候得者兼而久兵衛殿下も定而御異論ハ有之間敷歟如何見込申候哉との御尋ニ付前度申上候節直ニ被仰立候ハ、もしに御受合申上候へとも被是時日も移り申候事故又何等之入説ニ而根本動搖仕居候歟も難計併十二八九ハ安心仕候段申上候得者何様明朝殿下に參謁御模様相伺見急ニ御 參内之都合を取扱吳候様自然今日之首尾惡敷候ハ、程能申上取直シ委細ハ御城ニ而承可申是迄漕付候舟を乗損し候而ハ決し而相成不申幾重ニも盡力被成御頼候との事ニ御座候

十月廿日

上 田 久 兵 衛

一同十九日尹宮様に參謁昨日之御都合奉伺候處昨日者無類之上首尾一々尤ニ御聞濟有之候肥後守杯是迄ホキ辯舌を振ひ至極都合宜敷との御沙汰

但橋公ハ御頭指ニ而御參内無之候會津侯も是迄と違ひ廟議も擬立之事故自然と確乎之御論も出來御辯舌も前ニ超過仕候儀と相考申候

内府不參ニ付追々御問合少々宛何敷遮候様之儀も有之候へ共終ニ取押へ此方ニも大分盡力いたし候久兵衛も日々程登城相働候由畢竟夫故如此相成此方ホとも誠ニ蘇生いたし候様ニ有之候迎祝酒と被號御酌ニ而頻ニ御酒共頂戴仕種々之御戲言杯ニ而無此上御敷最早參 内之一條ニ仕付ケ候間一層盡力直様當職に罷越委細申上候様との事ニ而直ニ關白様に參謁御參 内之儀巨細ニ申上候處夫々御納得ニ相成明廿日廿二日迄三日之日取ニ而今日中ニ傳奏迄伺出候様若今日伺之手數出來兼明日伺候ハ、廿一日と申懸ケ日々でも宜何様急々申談候様被仰付候畢而最早下坂ニ相成候而も脱走之憂者有之間敷哉と御尋ニ付難陟以來御城之御模様打替候次第詳ニ申上候處重疊御安心之由ニ而然者大抵挽回之見込有之候哉と御尋ニ付此節コソ是非挽回を祈申候全體公家之御本分ハ風花雪月を弄シ詩歌管絃ニ御耽之外無之管之處討テ之斬レ之と分外之事ニ御配慮如何ニも氣之毒ふる時體と嘆息仕候へハ何卒今一度月花を見て歎をよむ様ニ世話を仕達候様頼む御沙汰ニ付此上關外之事を暫時黙して被成御覽候様折角更張憤發之處御聖時之儀有之候而ハ軍機相阻如何ニも 朝廷之御不爲ニ御坐候段懇々申上重疊御了解薩之異論等彼是御懸念之筋等も夫々申開キ至極之都合ニ而頻ニ御敷ニ相成申候扱其儘御城ニ出方永井様に委細申上候處橋公唐津三侯共御登城無之故 橋ハ前日來之御頭指會ハ御風氣日丈御意控ニ相成申候 今日ハ何分右之都合ニ參不申其上一昨日會津侯初御參 内之節 朝命之中些不安意之筋出來いたし候様承込候付今一度殿下に奉謁呈論仕吳候様御頼之稜々有之候間篤斗勘考會津杯打合せ參殿仕見可申段申上引取申候

一 廿日早朝會津侯に參上昨日永井様御内話之件々奉伺候處全大小監察ニ而御聞取違之由會津侯一々辯解傳論之趣有之殿下に參謁ニ不及直ニ御城に出方永井様に申上候處永井様ニも昨日久兵衛申上候次第爲被仰上夜前唐津侯御旅館に御出ニ而委細問違之儀相分御安心ニ而此上ハ今日中ニ可成丈埒を明ケ御參 内之儀御伺有之候様屹度差入り御相談之管ニ御承諾御坐候仍而成丈廿二日迄ニ御參 内相濟廿四五日ニハ御下坂ニ相成度申上置引取居候處登岐守様も御登城ニ

相成申候

一永井様ニ者被仰付次第御下坂前ニも防長ニ向御發足之御決定尤戸川様ハ未タ浪華ニ御殘ニ付急ニ被召候様御催促ニ相成居申候今一人御目付之中ニ而も同道可仕と存居候へとも余り撰り拔キ連行候得者跡之御用間欠ニ相成可申大勢居候へ共是と申程之者ハ少く困り候と御内話御座候  
右之外關東之難陟等或者爰許ニ而御處置筋密々ニ見込之儀御尋之事共追々有之候へとも今度之事情ニ關り不申儀ハ略申候事

十月廿一日

上田久兵衛

十月廿二日備中松山藩主板倉勝靜昨夕上京し是日老中に任ぜらる

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

(十月廿二日)

一板倉阿波守様依召昨夕御上京之段御留守居方違有之候事

〔新美記録〕

一同(十)廿一日板倉侯御着京翌廿二日御加判列被仰付候、小松帶刀着京

〔御同席觸寫并大目付様御廻狀寫〕

水野和泉守殿御渡候御書付寫一通云々相達候間被得其意云々

十月廿九日

大目付

松平大和守殿

津輕越中守殿

右留守居

大目付に

板倉阿波守事去ル廿二日於京都加判之列被 仰付座順之儀之和泉守次ニ可罷在旨被 仰出且又伊賀守と名改候此段向々には可被達候

十月廿八日

十月廿二日本藩京都留守居は將軍東歸事件に關し閣老自責勵精を誓ふことを達せる由を報告す

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

御老中方々被仰渡左之通

先日御東歸可被遊旨之趣畢竟此方共不行届之處却而御自責被遊候段誠以恐入候此上者乍不及猶更以勉勵心力を盡候様各々ニおひても益抜精忠御奉公可被致候  
右之書付安木眞平方差遣候付相達申候以上

十月廿二日

御留守居中

堀田甚右衛門殿

十月廿二日長藩老臣井原主計六戸備後助廣島に到る

〔御國京返 達御用狀扣〕

元治二年正月の慶應二年十二月迄  
藝州表より差出候書付

慶應元年

寫

今般御達之旨ニ付上坂被申付常月九日國元出足御當地迄着仕候然處寡君父子に同度儀致出來候付一應國許に折返シ用筋伺取候上速ニ御當地迄可罷越候間此段程能御取計置被下度奉願候以上

十月廿五日

井原主計

今般御達之旨ニ付上坂被申付常月九日國元出足廿二日御當地迄着仕候然處持病之痛氣差起候付早速療養相加可成丈差急キ發途可仕覺悟ニ候得共右保養中之儀者程能御取計置被下度奉願候

十月廿五日

穴戸備後助

十月廿四日閣老板倉勝靜將軍進發の隨行を命せらる

〔長防二度目御征伐一件〕

十月廿四日

御進發御供  
并御用取扱  
板倉伊賀守

右被仰渡旨於奧相濟

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

(十月廿四日)

一板倉伊賀守様今日御進發御供并御用取扱被仰付候由青地源右衛門が達有之候事

十月廿四日在府我藩奉行井上加左衛門は會藩より幕吏點陟に關する盡力を依頼し來りし旨を在京郡夷則に通報す

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以手紙啓上仕候太守様上々様益御氣嫌能遊御座奉恐悅候將又御自分様益御安泰御勤務恐悅奉存候扱森井惣四郎去ル十八日之夜着御委細被仰含且御用狀之趣共具ニ敬承仕候内外之多難古今無類之事ニ而實ニ慨歎之事ニ御座候嚙々御配慮可被成と乍憚重疊奉察候然處會藩が澤村脩藏に内話之次第薩が申立候趣之今度條約御許容之儀之眞之叡慮ニ不被爲在候處橋會桑及此方様土米之列藩が口を揃兵庫之開港之地ニ無之横濱之此儘御開不被爲在而之勢不得止之趣建言之處が終ニ御許容之場ニ相成候扱専ら相唱候様相聞其後兵庫ニ而之應接及開港 御許容と迄ニ而御別紙條約而品々都合之廉々有之云々杯之御書付之引落一切申向無之彼是誠實 叡慮御尊奉之御運共不被相伺折柄征長御處置御急務杯段々建言之向茂有之由ニ候得共如此將軍様御膝元ニ御混雜差起候茂畢竟奏吏之所業ニ候得之先御手許之奏吏之御所置有之いつを茂相當之御所置と申様ニ有之其上ニ而無之而ハ此儘征長杯と申様成ル御運ニ相成候ハ、薩杯より如何之申立可仕哉茂難計第一公邊ニ規矩無之人に之直を以正スト申候而之迎茂行申間敷との論ニ而薩杯一切受申間敷因而先幕吏之奏徒御取除夫々之御罰狀有之候上ニ而御征長之御運有之度右等之儀於御地橋會桑勿論其邊之儀盡力可仕儀ニハ候得共爰許之事情押立申遣候間此方様も一同申向吳候様頻ニ頼談有之候由ニ而諸事澤村脩藏より上田久兵衛に申向手元も御自分様は申上之儀相談有之候間如斯御座候俄打立ニ付委くハ久兵衛が御聞可被成下候以上

十月廿四日

井上加左衛門

郡夷則殿

猶々會藩がハ今朝飛脚差立桑藩が同様差立候間其方ニ仕出吳候様と之内話ニ付此狀ハ桑藩が相達可申と奉存候以上

十月廿六日將軍家茂東歸事件に關し自責して益々武備を充實し國家の爲めに勵精すべき旨を有司に示す

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

十月廿六日御黒書院に出御上意之趣先日東歸存立之儀不東ニ候處却而從 御所厚キ蒙 簡命候事恐入畏候而已御受申上候付而者此上一際勉勵而爲 皇國行届武備充實安 宣様候様致度存候間一同右之心得を以愈可勵忠勤候  
十月廿六日在長崎莊村助右衛は越前藩士瓜生三寅か三國軍艦攝海入津、外國條約勅許等に關し英國船將と問答せし要領を藩政府に報告す

〔探 書、尊攘録探索書〕  
元治元年ヨリ慶應元年迄

慶應元年乙丑年

寸椿録呈仕候時下次第ニ風霜相募候處愈御安雅可被成御勤仕奉賀候然ハ越前藩瓜生三寅再度兩三日前出浦仕昨廿五日港内碇泊之英國軍艦に罷越し船將に面會仕承取候概略福井表に言上致候書狀之草稿極密ニ而披見仕要用之數件寫取奉入貴覽候

書狀寫

御國御用船急速出帆之趣ニ御座候間不取敢左之一二事奉申上候

此度英佛蘭合衆國都合十三隻之兵艦兵庫に入港仕候儀ニ付諸説紛々殊ニ京師ニ而承知仕候三港而已 勅許之旨被仰出候付夷船退帆仕候坏之風聞と之崎陽有志輩承及候説は誠以雲泥之相遠ニ御座候幸兵庫に參居候軍艦レバルト當時崎陽港内に來船仕居候間直様右船に乘込殊ニ其船將と之兼而懇意之儀ニ候へ之兵庫評判之始末内密相尋候處是極密之事ニ候得ハ此迄他人に之明し不申筋ニ候得共一々告知可致とて其説大略如左

此度幸ひ英國アドミラル官亞細亞洲中に交代いたし候間序なれハ龍敦政府ニ而評議相立兼而長州償金三百萬元之儀ハ幕府より御渡被成候趣ニ御約定故即刻御渡方有之度若唯今御辨し難被成候ハ、最早此方ニハ相望不申候間其替り一千

八百六十八年 霜月 正月元日開港可相成兵庫港を今年より開港御免を蒙り申度候且是迄日本國中種々擾亂差起り候源

之皆公武御合體無之故之事ニ御座候得之此度之是非 朝廷より條約御免許之 勅書を幕府に御受取被成其趣普天下之列藩其外山民迄も御布告ニ相成國中一同和熟之上互ニ永く親睦を結申度候且又此度之是迄稅則不規則之件々改正致度候右之三箇條を以アドミラル神奈川に參り候處ミニストル名バークス其節函館に罷在候ニ付早速函館に參り右之趣申述候處ミニストル直ニ横濱に罷歸直様各國之ミニストルに相談有之幕府官吏に掛合ニ及せ候處將軍様初御老中總而御留守中ニ候得之萬事左右之返答難致旨ニ付直様攝海に相廻り幕吏に應接致候處三百萬元之償金一度ニ之難相渡先半金御渡可被成兵庫之儀之明後年之期限ニ候得ハ其節相聞可申由ニ候間然ハ殘金之いつ比御渡被成候處相尋候處いつとも難定候旨且萬事 朝廷之御聞無之ニ之困り入候段被申候付於此方も何とも致方無之然ハ此方 朝廷に奏聞可仕と申述即刻京師に連書差上候處朝廷 御返書之趣ニ之條約坏之儀之於 朝廷萬事御承知無之御免許被遊候覺も無之既ニ左様之儀も有之ニ於而ハ篤と幕府に御詰問可被遊旨ニ付不取敢兼而和解相成居候條約書一冊京師に差出し巨細如斯之儀ニ御座候得之得と御勘考之上宜敷御差圖被遊度との旨趣申上置候然處十月七日之日ニ至り京師方ハ關白殿下一人幕府方ハ松平伯耆守英軍艦に乘船被成償金之儀ハ來ル西洋十二月第一日不殘相渡可申兵庫ハ千八百六十八年迄ハ開港難致候扱又條約 勅許之儀之即 勅書拜受致候間其寫相渡候即ミニストル所持之本書より直様模寫致し候書附ニ曰く  
〔中略、此書附は十月七日幕府外國條約勅許の旨を達する條にあるを以て茲に之を略す〕  
且又稅則改正之儀ハ於横濱幕府より相談可致との事ニ付ミニストル初大満足無限退帆致候事ニ候但此儀ハ大秘密殊ニ幕府よりハ堅沙汰不致様との趣ニ而御譯も有之事なきハ他人に之不爲知様致度候との事  
右之趣極密夷人申聞候間不取敢奉言上候

十月廿六日

瓜 生 三 寅

十月廿七日將軍家茂參内寸朝廷之に下坂の暇を賜ふ我藩上田久兵衛會藩外島機兵衛特に其間に



周旋したり

〔長防再御追討一件〕

内啓昨廿七日御参内之節之御振六條中納言様に青地源右衛門相伺候趣書取一通差上申候以上  
大樹公昨廿七日御参内於御學問所御對面大樹公より東歸不束之次第御斷左候而厚被爲蒙寵命候御禮右兩條被仰上候處  
從主上此上一際政務行届武備无實安宸襟候様御沙汰被爲在御暇を賜候御双方御書取茂無之御口上ニ而相濟候由其節御  
當職方並御當番之御近臣方御列座外ニは何之御手数敷茂無之御茶菓迄賜り候との旨六條中納言様より御直話相伺申候

十月廿八日

青地源右衛門

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

御参 内御伺之儀去ル廿一日之夜御附武家衆より傳奏様迄被仰立候趣相聞同廿二日之朝關白様を御呼出有之候故參殿  
仕候處右御伺之儀餘り輕卒ニ有之候而御都合惡敷閣老ハ多端ニ付桑名侯ニ而茂御参 内此節御不都合之御訛寵命を以  
御留之御禮等被 仰上度 御所勞茂大分御快方ニ御坐候間近日御参 内ニ相成申度御日取御伺申儀を程能傳奏様迄  
被仰上候様との趣御参ニ御合御座候而一昨夜輕忽之御伺之御取消ニ相成候との事ニ御座候且又先日攝海實備相立候様御  
沙汰有之候處一橋様御存念有之迎茂只今通ニ而者實備相立申間敷現實被行兼候儀を御請と申譯ハ有之間敷一向ニ御斷  
被仰上候方可然との御趣意ニ御座候由右之通ニ而不圖御斷之書付共出申候ハ、朝議沸騰外藩に御頼申事ニ相成可  
申其節者外藩之中ニ而早速御請申候藩可有之夫ニ而直様紛擾を生可申如何ニ茂御懸念之事ニ付  
但一橋に攝泉之地を御任有之候ハ、農兵等を組立守禦之策屹度講究ハ、候趣ニ付實備さへ相立候ハ、攝泉を遣候  
而も宜者無之哉との趣ニ御座候間是ハ決而不可然今ハ歩兵扨取起候而者賊を捕而繩をなひ候同様且橋公之御爲重疊  
不宜段々申上置候此邊ニ者深キ意味合有之儀ニ而書面等ニ者難顯御座候

何卒御斷等無之相應ニ守備相立候様之見込者無之哉との事ニ付所詮只今之豪場等ニ而急ニ實備相立候見込者無之守岸  
之策者俄頃ニ講兼候得共陸地之防禦を立近國之諸侯等ニ被命相應之人數差出置候得者短兵格闘ニ而食留候丈之見込  
者十分有之洋夷茂海城を離レ遠ク内地ニ入候憂者決而無之段存念之次第委細ニ申立候處何様相應之人數ニ而も差出防  
禦相立候段中上御斷さへ出不申候得者宜敷御模様ニ而此段者閣老に篤申入吳候との事故會藩申談異存茂無之候ハ、  
其通周旋可仕直ニ會津に罷越相談仕候處皆々同意ニ付御城に出入仕會津侯唐津閣老御同席ニ而外島機兵衛一同被召  
出今日之次第逐一申上候處攝海實備之筋者先日來橋公に段々申上居候得共彼是御異存有之心痛ハ、居候併久兵衛存  
念之通相應之人數ニ而も配り付是非御斷ハ無之様申談居候間致安心候様被仰聞候畢而御参 内之儀者何故如此遲々仕  
候哉今日桑名様折角御参 内有之候へ共御日取ハ追而御伺との趣ニ承申候右之通御延引ニ而ハ又如何成事變を生可申  
茂難計何卒速ニ御日取御伺御座候様との儀申上候得者壹岐守様を被仰候者近日橋公御頭病ニ而御引入ニ相成居候間御  
出動無之候而者何分ニ茂御日取難伺此節橋公御輔翼之儀被蒙 仰初而之御参 内御一同ニ無之而者甚御心痛との事ニ  
付夫者重疊御不同意ニ奉存候時體々様ニ切迫仕居不申候ハ、御快復迄御待と申候而茂不苦候へ共即今如此大事を前ニ  
當心痛之氣之毒の申御場合ニ可有御座哉是非々々橋公ニ者無御拘御日取御伺有之候様と種々激烈ニ奉論候處輕重を  
以推時者成程尤ニ而何分申譯無之併内實を申せハ老婆之孫を思様ニ而今度無限御不都合之末ニ付若も 朝廷ニ而色々  
御難問共有之節者 上御登人ニ而者御返答差支候様之儀共ハ有之間敷哉橋公者御同席ニ者無之候へ共大禮御聲之聞に  
候位之所ニ者御扣ニ相成候故何敷御困窮之節者中納言と相談之上御返答可申上と被仰上候而も宜又者一寸御便用之様  
ニ而御打合茂支不申肥後殿初此方共ニ而者御間内二町茂相隔頓斗下馬之供待同様何を思茂力不及只々懸念之事故實者  
橋公を奉待儀ニ有之候段胸襟を披キ御咄御座候故夫者至極御尤之御情態ニ奉存候然處關白様尹宮様方屹度御吞込ニ而  
御座候ハ、何之子細茂有之間敷右邊之事ハ打明ハ殿下始に不被仰上候ハ、例之御因循と而已被思召候而者御都合あし  
く可有之且又御情實洞徹ハ、候ハ、橋公者待ニ不及此方共請合候故何日比御参 内有之候様ふと、御同意御座候も

雖計いつれ有之儘ニ被仰試候方可然奉存候段懇ニ申上候處至極御同意ニ而自分共々申上候而者表立却而都合敷可有之乍此上久兵衛參殿仕候而右之次第程能相伺吳候様との御頼ニ御座候間然者機兵衛一同殿下宮様に參謁内意奉伺段御請申上候

但長州井原主計穴戸備後介等登坂之様子相聞候處最早先月廿七日之期限茂過矢張浪華ニ而御待受ニ申候而者御趣意纒茂相立不申事ニ付期限過候事ニ付此方御使を以御尋之筋有之候故登坂ニ不及廣島ニ滯居御様子相待候様被仰付候方可然との儀今夕於御城會桑ニ申談相決其段申上候處會津唐津兩侯直ニ御同意ニ而藝州に可被仰出との趣ニ御座候

一廿四日外島機兵衛同道殿下に參上昨夕之事情逐一申上候處見込之通御同意ニ而廿六日迄ハ御所之方御差支ニ付一橋ハ不待共廿七八兩日之内ニ伺出候様との事ニ付幕府ニ而者一旦橋公を待之御評議橋公に茂御相談ニ相成居今更不待ニ申儀幕府より被仰立候事ハ出來不申候最前御參 内丈ニ之事者被仰上置候故御日取之儀者殿下之思召付ニ而右兩日之内御支無之段 朝廷ハ御沙汰被下候様仕度との儀委敷申上候處能御合點ニ付直ニ尹宮様に參謁前件之儀申上候處夫者至極之都合候へ共所詮 叡慮ハ出候様ニ無之候而者跡立而内府之異存等難計ニ其邊之事ニ者深キ御考之筋共御密話有之殿下に御參 内之上八景之間ニ而篤斗御内話可申上夫迄者御發言無御座様宮ニも直様御參 内之管ニ申儀機兵衛至急ニ馳行申上候様若御途中ニ候ハ、御輿ニ寄添申上候間支不申段被仰付機兵衛ハ引返久兵衛者御城に出方仕右之次第會津侯に委細申上候

但尹宮様ハ壹岐守様に御傳言大樹參内之儀を右之通案し候者感心之事ニ付君臣之間ハ左様ニも可有之今迄頼斗右等之儀不承候處幾重ニ茂歎候段委細申聞候様ニ之事ニ而其段會侯迄申上置候肥後守様ニも不怪御歎ニ而御座候然處橋公今夕より御登 城ニ相成申候故御日取之儀者是ハ伺出候様支不申夫ニ而御所之方御差支者有之間敷哉之事ニ付左様ニ御座候得者至極願ナル御都合ニ御座候段申上候處明日桑名侯御參 内ニ而御伺ニ申事ニ相決申候間殿下宮

様に者右之次第會藩方申上候様及相談置申候然ニ 朝議之方速ニ相決廿七日御參 内御支無之ニ申儀被仰出候事ニ御座候

一同廿八日尹宮様に參謁昨日之御模様奉伺候處前日壹岐守様御懸念之筋等逐一御聞込之末深思召ニ而此節之御參 内者御評議筋ニ無之候間國事懸之御方々御出ニ不及ニ申譯ニ相成殿下宮傳議奏迄ニ而無何事御取計是迄之通相心得至當公平之御處置有之武備充實ハハし候様との 勅語有之御暇出申候由

但橋會二公并閑老ヲ彌以關東に御委任ニ相成候との御注文御座候得共夫ニハハせハ國事懸皆々御出ニ相成色々差支之儀も可有之旁殿下宮ニ而御拒相成且將軍様御謝罪之書付も出來候得共文中ニ後來差障可申事柄等茂有之兎角ニ跡ニ殘不申様ニとの御勘考ニ而御双方共御口上ニ而相濟申候由ニ御座候

扱昨日ハ橋公并閑老ニ而も今暫ハ御下坂出來申間敷趣ニ御申立有之如何ニも御當惑殿下宮様に御内話ニ久兵衛存念之通ニ者行レ不申ニ相見候故急ニ下坂之儀催促ハハし度候へ共夫ニ而も如何可有之哉速ニ埒明不申候御暇出候後徒ニ滯京ハハし候而者又何等之煩を生々くも難計朔日二日比迄ニ者是非共ニ被思召候段 御所ニ而御咄合爲有之由ニ而御城に出閑老に委細申上候様吳々御頼相成申候夫ハ關白様に參殿仕候處是以右同様ニ而深頼被思召候段御懇被仰聞候間御城ニ而壹岐守様に謁見奉願候處今日ハ御登人ニ而殊之外御用繁ニ付永井様迄申上吳候様被仰付委敷傳達仕候處今日板倉侯御登城無之故御日取之儀ハ明日篤斗可被仰談殿下に者程能申上置吳候様との事ニ御座候永井様爰許御發途茂寸斗御取究無之候故是以頻ニ御催促申上置候事

十月廿八日

上 田 久 兵 衛

十月廿七日幕府令を藝藩に下し長藩末家並に家老及び奇兵隊士兩三名十一月を限り廣島に出頭すべき命を傳へしむ

〔文久三年四月以來〕  
〔大坂返達御用狀扣〕

十一月五日青地より 同十四日着

御城御坊主山本道知より手ニ入候書付寫左之通

十月廿七日於京地壹岐守殿藝州留守居御呼出御達

松平安藝守

毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑之廉々有之候付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川諱三郎松野孫八郎陸地其地に被差遣候間最前相達候通末家并家老共之内且奇兵諸隊中重立候者も三四人十一月限廣島表に罷出候様大膳に可被相達候尤自然末家并家老共同所に罷出居候ハ、大目付御目付到着迄可被留置候

十月

付札

長州家老井原主計列最前廣島表に罷出候得共致歸國候趣ニ茂相聞候由御座候事

右主水正様御始十一月六日大坂表御出立相成筈之由相唱候段道知より申聞候

御供ニ而  
御着坂

御用有之京地より江  
戸表に御發足之由

御用有之京地に御殘尤十一月七日  
比御着坂之筈之由

板倉伊賀守様  
遠山信濃守様  
立花出雲守様  
松平伯耆守様  
土岐山城守様  
小笠原壹岐守様

後藤八重彦

右之通承込申候

十一月四日

十月廿七日閣老本多忠民の役宅に於て閣老水野忠精等第二回下關償金拂渡及び兵庫開港中止の件等につき佛國公使と談判す

〔探索書〕

先月廿六日深川於永代寺佛國ミントスル御應接可有之筈之處御延引ニ相成翌廿七日日本多美濃守様於御役宅水野和泉守様酒井飛彈守様其外御役々御列座御應接有之候付去ル二日御用御頼外國御奉行組頭宮田文吉様に御使里内官右衛門差出相伺せ候處右御應接者下關償金一條二度目御渡之儀御談判有之相濟而外御役々御開ニ而水野様酒井様御應接有之と不相分候へ共兵庫開港之儀先年ロンドンニ而御談判之通御開ニ可相成趣於兵庫先達而御應接も有之候へ共何分右場所ハ御差支之儀有之開港難相成趣御談判有之候處是非兵庫ニ限り候儀ニ無之右之代り一港御開ニ相成候ハ、英國ニ而も承伏可仕旨佛國ミントスル申立候由ニ而尙追而可及談判旨ニ而同日ハ引取候由條約替之儀之御談判無之哉之由其後横濱に水野様酒井様其外外國方御役々御出張ニ相成候へ共右之御模様ハ未承不申兵庫港代り之場所之儀ニ可有之由被仰聞候付尙御模様相分候ハ、可奉伺と昨十日夕猶官右衛門差出相伺せ候處一昨朝を横濱に御出張ニ相成御留守ニて相分兼申候右ニ付御歸府見合猶近日差出伺取之上追而申上候様可仕候英國ニ而ハ兵庫港差支候ハ、諸侯之内へ開港可致替地可有之旨申居候由右者薩長兩國之内ニても可有之歟之由且英國ミントスルハ兵庫出帆後當月初旬迄ハ横濱へハ歸着不仕多分長州に相廻り候哉と相聞候由ロンドンニ而之御應接も申ハ先年松平石見守様爲使節英國に御出張之節御談判有之江戸大坂兵庫新潟七ヶ年之年延ニ相成居來々卯十二月右之期限ニ相成居候由御尊御座候段申出候以上

十一月十一日

澤村脩藏

〔尊攘錄探索書〕

慶應元乙丑年  
慶應元年

慶應元年 十月廿七日

本多美濃守殿於御役宅佛郎西人應接右之泉州飛州御越其節問答之大意極密承込候趣左ニ申上候  
兵庫ニ而相渡候書面者固より 大君政府之印形も無之事故取戻し度且兵庫開港ロンドン約定之通り相開き候積りと申儀之全間違ニ而右之決而開候事不相成由開老方被申聞候處「佛夷答」右御書付之素より體成書付とも不存且又右様兵庫之儀御六ヶ敷候ハ、別ニ壹ヶ所御開被下候ハ、承知可致候旨

右ニ付逐一京師に御伺相成候ニ付今日之内田沼侯蒸氣船ニ而上京之由

外夷申候ニ 公方様征長不被成 御滯京ニ而嘸 御迷惑可被成候間私共より 天朝に申上 還御御暇出候様盡力致し

度其爲メ又々兵庫に參り度と申事ニ付廿九日泉州飛州神奈川に被罷越段々説得差止申候由ニ而晦日歸着相成申候

十月

○兵庫開港彌斷ニ相成候ハ、其代として一港御開き之儀夷人より可申立と存居候趣之處乍曖昧御許容ニも相見へ候ニ付先其邊ニ相成候得とも斷然御斷ニ相成候ハ、鹿兒島開港可申出積り之由右も薩より夷人に入説有之處奸謀翻離以候よし候よし

十月

〔探 索 書、尊攘錄探素書〕

元治元年より慶應元年迄 慶應元年乙丑年

〔十月廿九日附益田勇森井惣四郎取書〕

一昨廿八日柏崎才一を水野開老方御呼出罷出候處開老ハ御客繁ニ而御逢出來兼御用人富岡平角を以申され候ニハ昨廿七日日本多開老先佛國イニ國字ナシニストル計ニ御應接兵庫開港被差止度段御申向ニ相成候へ共彼等決し而開入不申再三強而被仰向何分ニも兵庫之儀ハ日本學而好不申實ニ不承知之儀ニ付是非共相止申度旨被仰向ニ相成候處左之外代地御出ニ相成候

様被申出候付其儀も即座之返答之出來不申何ぞ京師へ伺候上返答可致との應接ニ而有之候由右之趣京師へ言上仕置候間會津方も京師へ可然申上吳候様と開老方御頼ニ而有之候由ニ御座候右之柏崎直話ニ而御座候

一今廿九日會津石碓民衛柏崎才一昨日富岡平角方承候次第猶直と水野開老方相伺可申管ニ御座候處水野侯今日酒井飛彈守様栗本瀨兵衛様外ニ一人御同道横濱へ御出張之由ニ而御斷ニ相成御城に罷出有馬阿波守方承候様との儀ニ付柏崎一人御城へ罷出候處酒井大老御逢御座候而被仰候ニハ兵庫一條一昨廿七日應接いたし精々申向候處實ニ御情實左様御座候ハ、強而御願可申譯ニ而ハ無御座左候ハ、右代地御借渡可被下段願出候付そをも京都へ伺取候上可及返答旨申向置候然處被申出候ニハ 大君ニハ長州御征伐として御出馬御座候へ共今日迄何之御模様ニ無御座無用之御滞在只々御入費耳相増此先彌以御疲弊可被成實ニ御氣遣申上候右様無用之御滞在之必外方 大君をいたませ申者可有之貴國和親相結候上之 大君を困窮致せ候ハ我等共吟味致度候ニ付猶船を攝海に廻し京師へ書翰差上申度と願出拙者共。當惑いたし居候處長州御所置急ニ御取掛と申事飛報有之候間先船之攝海へ廻し不申様水野和泉守等横濱に談判ニ罷越申候右之次第にて一刻も早く長州御所置に御取掛御座候様其方早々罷上り肥後守殿にも申上吳候様御頼御座候由ニ御座候大老御逢後猶大目付有馬阿波守様并小栗上野介様御逢有之矢張御趣意ハ相易り不申候得共兵庫ハ斷然と相斷申候得共兵庫之代他開と申儀ハ兵庫開。と申期限之比ニ之大概開キ可申敷と露味たる返答致置申候猶夷船攝海に廻り候事ハ水野侯御出ニ而二十相止ミ可申見込ニ而御座候江戸ニ而も當時三説有之一刻も早く長州御征伐と申説も有之又還御之説。長く御滯京杯と議論區々一躰不仕候得共先長州御征伐御急と申儀ニ相決し其趣田沼玄蕃頭京師へ言上ニ被差立候管ニ御座候間其方も罷上りい才肥後守様に申上吳候様との儀にて有之候由柏崎方兵庫斷然と御斷ニ相成候ハ、兵庫にて別段御認御渡ニ相成候書付御取戻ニ相成候敷と相伺候處未々被相渡不申趣御返答御座候由承申候以上

十月廿九日

益 田 勇  
森 井 惣 四 郎

慶 應 元 年

三二七

十月廿七日 日本藩老臣小笠原美濃攝海に來泊せし以後時局紛糾せるにつき天機奉伺の特使として着京す

〔慶應元年日記〕

十月廿七日

一大樹公先達而以來 御所向御不首尾ニ而御愼之處會桑邊之周旋ニ而今日御參 内被免夫々御勤相濟候由之事  
一美濃殿御時躰之儀ニ付御國去ル十六日立蒸氣船御乘組今日伏見より御着木村御奉行小山留左衛門方も一同着尤いつを之衆も引返之由也

但木村方ハ此元詰より早打下國ニ付尙又詰込也

一晚景一酌之處ニ中村參候付一盞相勸候處先日來餘り鯨飲打續服を損候付昨日より五日計禁杯いたし候逆吞不申候付茶共入自分ハさけニ而六過迄也

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

美濃御國許出立之節心組之書付

一此度外夷攝海に迫り其末將軍様御辭表被差上置候趣相聞候付而之不取敢御出京 天機次ニ之 御機嫌を茂御伺可被遊且御盡力可被爲在管之處山海を隔至急之御出不被爲出來況而長防御征討之御先鋒を茂被爲蒙 仰居且此砌御出京ニ而之諸藩上京之端を茂被爲聞却而御混雜之端を茂被爲開候而之難相濟彼是 尊慮之旨を奉罷上可申哉之事

一將軍様御持續開鎖御決議人材御登用等之御國議最早夫々御處置之御運ニ相成候御到來有之候上ハ直ニ長防御處置可被爲運候へ者後道之御政道文久度ニ尙被復等之儀今日強而申立候ニも及申間敷哉之事

一右之通ニ而も外夷不服ニ而候ハ、斷然御打拂ニ茂可相成敷夫等之未然之儀之京地之事情ニ應し士臺御忠節之御國議を

奉し御役々盡力外有之間敷候哉

右之通候事

十月廿八日

小 笠 原 美 濃

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月より

以別紙申達候去ル十六日御許被差立候上々早打官御者木村得太郎持下候後々之内御三方様御内御登京之一條内外之義論一轍ニ運兼候内君上且兩公子茂御同座ニ而此節ニ至候而ハ實ニ危急切迫之御場合ニ付勿論自他之利害等ニ御拘可被爲在様無之候得共第一ハ諸藩我も々々と御登京御周旋申上相成候ハ、意外之混雜今日ニ百倍いたし候ハ必定ニ而此方様々左様之通開被成候様成行候而之猶更難相濟先御同席之内一人至急ニ被差登御存意之次第を奉し冥々中周旋之方可然との御旨ニ而俄ニ美濃方出京被仰付候段委曲被仰越候趣難有敬承仕候得太郎出立後此許之事躰追々變化漸々御運茂宜方ニ赴候付而之諸藩ニ御先立御登京ニ之被爲及間敷先便得御意置候趣ニ致符合欣躍之至ニ御座候其上近衛様方諸藩召之事も近日猶承候得之薩之流言虚喝と而追々之御返書等出候を態々急使を以指立候趣ニ相聞奇怪之事共ニ御座候尤小松帶刀百人計引率いたし微行ニ而京地に參居跡より三千計之人數登込之管ニ候處此地之近狀打替候付右人數ハ押留遣候由此上猶更 朝暮一致之御運ニ相成不申而ハ忽ち種々之紛擾を醸可申誠ニ累卵之世ノ中重疊可恐之形勢ニ御座候仍而追々申上候通御國許之儀奮然御覺悟筋相立御國內御鎮定時宜ニ應公子御登京之儀之兼而御心決ニ相成居候様有御座度幾重ニ茂奉仰冀置候今度美濃方被差登候儀御信義上ニおいても大ニ御都合を被爲得宮様方も其御満悦ニ而今日之直ニ宮殿下拜謁之事起り早朝參殿ニ相成居申候此上ハ 天機且御機嫌伺等之御手數相濟候ハ、早々下國之儀茂屹ト相合居申候事ニ御座候右御報旁如是御座候以上

十月廿九日

郡 夷 則

慶 應 元 年

三一九

惣 連 名 殿

十月廿七日石井新左衛門塚原但馬守に對する本藩回答の使命を帯びて再び小倉に向ふ

〔長防二度目御征伐一件〕

(前文は十月廿三日の條にあり)

一右ニ付御返答之趣道家角左衛門より新左衛門に委曲申含ニ成十月廿七日夕嗽被指立候山木村男吏被申聞候趣荒増書留置候

廠備之形勢別段御聞込之儀も無之薩先頃於長崎舶來之炮器等多買入ニ相成候事とも御聞及被成候へとも何之事ニ相求候と申事ハ相知不申備前人數登之模様ハ攝海夷船相廻り候砌之事ニ而自然兵端ニ茂相成候出張之手配ニも可有之左候ハ、最早夷船も退帆ゆへ先觸計ニ而相濟候事と相考候筑前ハ先比來御改正ニ相成居候事故段々居り合も付可申哉之趣

一頃日一旦之所ニ而ハ御三方様内御發途も可被爲在答之處其中將軍様二條へ被爲入御滯京公武之所も段々御整之御様子今又御出京別段御周旋と申御譯ニも右御座間敷却而御扣被爲在候方との御評議ニ而此間御重役之内を被召登被表之御模様次第ニハ天機御何將軍様御機嫌御伺をも相動猶亦周旋等申立之筋も有之候ハ、差入り取扱候様被仰付置候尤今程之彌以御筋も付可申塚原様御手元へも申參り御安意之持ニも至り可申哉との趣ニて別段書取等ハふしニ口上ニて申候方ニ含ニ相成候事之由云々

十月廿七日我藩江戸留守居澤村脩藏等は會藩柏崎才一等が外交事情其他につきて閣老水野忠精等と面談せし要領を藩政府に報告す

〔江戸探索書、諸雜御留守居録上〕

慶應元年八月以後

一當月十九日會津柏崎才一京都より下着即日水野和泉守様に罷出申上候ニ此度兵庫表ニおゐて松平伯耆守様並山口駿河守様赤松左京様より夷人に御渡相成候御別紙之儀ハ從 天朝御下ニ相成候御趣意と相違仕候ニ付右御別紙横濱ニて御取戻可相成答ニ而此度山口駿河守様栗本潮兵衛様態と御下ニ相成候段申上候處和泉守様御答ニハ其方上京之節兵庫開港之拙者も不可然と見込候ニ付上京之上之屹と肥後守殿にも言上致し決て京都より御許無之様ニと其方にも申含置候處條約之通御許容と被仰出候得之兵庫も矢張條約中之儀ニ而一旦箇様被仰出候上之今更横濱ニて取戻之談判何分見込無之如何譯ニ而京都ニて之御許御座候哉と察討ケ間敷御辭ニ而有之候由將又松前阿部之兩人如何罪ニてケ様被仰付候哉とは又不審之顔ニて御尋ニ相成候由ニ御座候

一同廿日柏崎才一猶水野侯に相伺候處昨日之御噂振と之少し違候而拙者山口駿河守に別紙取戻之談判篤斗承申候處隨分其運ニ相成可申事も有之候間此方より之差圖とは不申其方之心得ニして駿河守に罷出直と承候様と被申聞候由ニ御座候

一同日夕會津石澤民衛柏崎才一林三郎之三人小栗上野介様に罷出候處水野郷雲様も御列席之由右三人より山口駿河守様御下之一條申上候處小栗様より之御答ニ之兵庫を開き不申儀ハ隨分宜敷彼等も聞入可申と見込居候得共此度京都ニ而諸藩衆評之上約定取調可申と嗽被仰出候儀ハ何程ニ可有之哉一旦將軍様御辭職も被差留候程之儀ニ御座候得之諸藩之評議殊更ニ御取用無御座候とも可然儀ニ之無御座候哉無左之將軍職之御名耳ニて御委任之廉も無之將又御威權之少も無之事ニ相成申候且又從 御所被仰出候御別紙之薩州より相認差出候書付ニ而御座候由ニ承申候間旁諸藩衆評之儀ニ幕威を殺く之趣意ニて可有之と被申候由ニ付右三人より御答申候ニ之幕威之張不張と諸藩衆評請不請ニ之決して無之諸藩より申上候儀之飽迄御取用御座候而も幕威之相立可申哉乍恐幕府之御威權振不申根源之長州御進發と御座候而既ニ五六ヶ月茂御滯陳御座候儀も實ニ幕威之相立不申儀ニ之無御座候哉假令薩州より差込候儀ニ御座候共評議を擬し天下之大事御決議被遊候儀ニて幕府御威權之輕重ニ之少も關係不仕と御返答いたし候處大分御腹ニ落込候由ニ御座

慶 應 元 年

候將又兵庫を開不申候ハ、何か外ニ易者無之候而之被等開入中間敷別ニ一港を開き可申賊無左之横濱運上減可申賊彼等ニ便利を付させ不申候而之相成不申と被申候由ニ御座候

一同席ニて小栗様御話ニ之島津三郎事兵庫より潜ニ上京致し候由佛のミンストルより英のミンストルに話候由小栗様英ミンストルより直話被承候由ニ御座候

一同廿一日柏崎才一山口駿河守様に罷出候處御病氣とて御逢無之由御實病歎託病歎未た兵庫一條ニての應接無之由ニ承申候

一柏崎才一薩州を疑候ニ之當月五日十六藩 御所に御召出之節薩州一藩耳 御所に居殘候由何事歎分不申由ニ御座候

一近衛様御議論ニ之此度開港御許突被 仰出候儀之會桑肥土米より強て御迫申上候てケ様ニ成行候儀ニて右五藩之京師追拂可申との御説の由近衛様御論之薩州論ニて可有之と柏崎見込ニて御座候

右之私同道承申候以上

十月廿七日

澤 村 脩 藏  
益 田 勇  
森 井 惣 四 郎

十月廿七日在府井上加左衛門は前閣老阿部正外松前崇廣等なほ江戸の藩邸に在りて殘務を執り對外談判委員山口駿河守大久保帶刀等は談判の不調を慮りて引入れりと在京郡夷則に報す

〔自筆御用狀扣〕

文久二年慶應元年迄  
以別紙啓上仕候阿部松前侯ハ諸御用御見調相濟候迄御願ニ因而今迄之御屋敷々々には追々御着府ニ相成且兵庫ニ而外夷御談判之末猶横濱ニ而御談判之たま急ニ御東歸ニ相成候大御目付山口駿河守様大久保帶刀様兵庫ニ而之模様大ニ爰

許之事情違却いたし逆茂此儘御談判相調可申御見込逆之寸分茂無之歎ニ而御引入ニ相成居候由其外去ル廿四日桑藩之急脚ニ得貴慮申候後更ニ言上之品茂無御座御地之儀誠ニ意外之事件打重又ハ且暮ニ打替如何之御運ニ相成可申哉爰許よりハ勞煩仕候事ニ御座候以上

十月廿七日

井 上 加 左 衛 門

郡 夷 則 殿

十月廿八日閣老水野忠精償金延期の件につき佛英米蘭四國公使に書翰を與ふ

〔探 索 書〕

佛、英、亞、蘭公使に

以書翰申入候此度大坂表ニおゐて我同役共其元共に取極たる通下之關償金殘高無意情可致旨大坂表申越候故可渡再度之高五十萬元之既ニハンケル相渡申候右ニ付三度目可相渡金高其外之儀ニ付左之件々申入候間可然勘考有之候様いたしたく候一千八百六十四年第八月廿一日英吉利、佛蘭西、亞墨利加、阿蘭陀國々四公使ハ酒井飛騨守と償金條約取極たる節ソシルルホートアルコツク嚴敷申立候ハ、償金之儀各國政府欲心を以取極候ニハ無之其償金ニ代と一港開クカ外國交易之益ニ可相成一ツ之工夫致し候節之各國政府之爲ニ都合宜敷且其後申問候ニ之各國政府之懇望ハ日本ト各國之交際尤親敷いたし候歎又之日本政府ニおゐて各國人民大切ニ取扱候ニ於而ハ償金受取候方却而宜敷趣然之此度京師ニおゐて各國之條約 勅許相成候事ハ必各國交際を彌堅シ且外國人を大切ニ取扱ヒ□ト實ニ大君殿右一條ニ付格別之御盡力ニ而此大事件相濟候歎開港ニ勝せし事ニ而素々條約 勅許相成候上ハ數年之内ニハ或港を可開場合ニ可至心組ニ而其上各國交易之益ニ相成候様可致積ニ居候貴國政府別段ニ我國之事ニ付心頭ニ被懸候付依而之右等之件々可然貴國政府に通告有之候様いたしたく候此度 大君殿に長伐之爲入費多分ニ有之付而八年貢取立等多分ニ而國

慶 應 元 年

三三三

民難儀無之様いたし度條大坂表ニ於て一千八百六十五年十一月廿四日我同役共取極タル事件ハ一千八百六十四年十月廿二日之條約ハ確定し江戸表ニ於ても取行ふ積ニ候乍去前件之儀も有之旁以此書翰之趣速ニ貴國政府ニ通告有之候様額入候若右等之趣貴國政府ニ於而承諾被致候ニおゐてハ兵庫開港取極タル年月ニ至る迄各國政府償金殘高渡し方差延相成候様いたし度此段額入候

慶應元五年十月廿八日

水野和泉守

花押

右書付慶應元ノ十一月御留守居方達ニ成

十月廿八日在京小笠原美濃郡夷則は將軍參内前後に於ける朝幕の關係長藝使節廣島滯留の事等を在府井上加左衛門に通報す

〔自筆御用狀扣〕

以別紙申達候(中略)惣將軍様御入洛ニハ相成候得共二條に御幽閉之御形ニ而何之御運送付兼居候處松平周防守様初御役々非常之御難陟有之且征長御手順永井戸川之兩監を被指遣御糺罪之様様ニ應シ大旗を被進候方ニ相決夫等之處分少シハ朝廷之御都合直り昨廿七日漸御參内被相濟先ハ奉恐悅候然處一旦御辭職御東歸之思召立付而ハ全ク公武御隔絶と申ニ相成水戸公御懷中ながら御登城關東守禦等之御評議有之たる哉ニ相聞且近來押入辻切等不斷ニ有之御府外杯之夜行茂稀成よし被申越其後貴地之動靜如何哉と彼是懸念いたし候且又長州ハ宍戸備後之祐庵原主計登坂之管ニ候由廣島表方申來候處大小監御越ニ付右之者共ハ藝州に扣居候様被仰向事之由此末御進發之際ニ至猶又夷船攝海に乘廻り候儀茂難測閣老方茂其邊之儀専ら御氣遣ニ相成居候由近日之時寐且暮ニ打替候付而ハ片時茂油斷難相成世之形勢ニ而於御地茂種々御心配可有之と致違察候右等之趣爲可申達御國方之官脚を中ニ而差立候事ニ候以上

十月廿八日

郡夷則

井上加左衛門殿

小笠原美濃

十月廿九日幕府は諸藩に達して條約改正に關する意見を問ふ

〔長州再征帳〕

以別紙申達候小笠原登岐守様方御留守居御呼出外國條約 御許容ニ付見込之趣御尋之儀ニ付而公用人を以被成御渡候御書付寫一通差進申候此段爲可申達如是御座候以上

十月廿九日

郡夷則  
小笠原美濃

御家老宛  
御中老宛

今度外國船兵庫表に渡來申立之趣何分切迫之次第時勢不得止儀茂右之外國條約御許容之儀御願被 仰立候趣被 聞食候ニ付至當之所置可致旨被 仰出候就而之一應見込茂可承候間先年相觸候條約書之内異儀有之面々之無腹藏以書面可被申聞候事

十月イ

十一月二日幕府監察永井尙志戸川忠愛長藩責問の爲め京師を發して廣島に向ふ  
〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

十一月四日東西へ申向濟

昨二日二條御城に罷出會桑公用人に面會此節長州御所置御手順相伺候處御糺問大小監今日此許御發途大坂に一兩日御

慶應元年



逗留六日頃藝州表被發候筈被召連候御人數旗下并新撰組共二千人計御先手伊井榊原之先手茂播州路に暫後候而押出ニ相成候由被決候付會桑共ニ右之通御運相成候而者長之激徒を激成候勢相成尤藝州と長州に説得ニ參候寺尾清十郎近日登京ハムし長防國內之様子を逐一聞老大監方に茂申上會桑に申述置候間當時者昨年之形勢も大ニ違ひ正義も激徒ニ被擁正激一致ニ相成候處兵力を以御糾問ニ相成候様有之候而者彌以正激分斷ニ成兼可申見込有之候付會桑談合勘考之次第閣老に申上候筈ニ而小笠原侯に會藩外島機兵衛倉澤右兵衛廣澤富次郎桑藩小寺新五左衛門一同被召出候付無腹臆皆々存寄丈々申上候付小笠原侯執茂申述候趣尤ニ被思召候得共是迄追々登坂被仰出候得共言を左右ニ寄せ應命ハムし不申別段寛宥之御沙汰ニ而期限迄茂被仰出候處登坂不致直様御發向之筈ニ有之候處先日變動被爲在候付此節大小監被差越御糾問有之其模様ニ應直ニ御進發有之候筈ニ被決素り長州ハ外夷戰爭も有之當春來天下を引受一戰之覺悟死地ニ入候勢ニ候へ者仲々大敵ニ相違無之候併昨年通之様ニ根元無事ニいたし候心體ニ有之候ハ、決而結局ニ至兼可申御親譜大小名旗下共東歸之念を絶決心斷然ニ無之候ハ、振起不仕板倉侯小笠原侯大小監邊者尤御決心ニ而長之強敵と戰御旗本迄被破候共將軍家御恥辱共難申殿より成共盛返々々いたし候ハ、外藩傍觀者不仕候との御沙汰ニ有之且敵境ニ而數日對陣味方之兵氣勞候氣遣も有之候得共將帥之指揮次第ニ者振立可申尤此節長征御所置之次第永井戸川大小監被差越兩人心得者平意虚心ニ而糾問正激分斷之處置專要之儀ニ而此邊者被任置其模様ニ應御進發有之少茂御手順間然無之様御所置有之候筈ニ付列藩に者二條御發城前攻口屯集之場期限等當月初御布告有之候筈之處些御様子有之五六七日比ニ御布告ニ相成候筈ニ有之候段小笠原侯が會桑に被仰聞候由今日二藩が承申候

一大小監被召連候御人數多分ニ而長之激徒を激成候勢ニ相成可申懸念ニ御坐候付精々會桑に相尋候處永井侯御出ニ候得者御順然之御方故其邊ハ篤斗御心得ニ而輕舉決而有之間敷ニ藩共ニ安心之様子ニ有之候執權之方々御居り右之通有之候處少々宛懸念之筋紛然と申上候ハハ却而宜無之且又小笠原侯御沙汰ニ少々宛見込も相違有之候得共結局之處を見候様ニ斷然御決心ニ相成候段二藩奉伺候由(下略)

十一月三日

淺井新九郎

十一月三日將軍家茂京都を發して大坂に下る

〔慶應元年日記〕

十一月三日

一大樹公今曉七時之御供揃ニ而 御下坂之事

右ニ付堀田方上垣氏御同道拜上ニ罷出四時過歸上垣氏御出を願寒氣防キニ一盞を取云々

〔大坂返達御用狀扣〕

十一月五日河口より 同十四日着

一公方様一昨三日京地御發途大坂に御歸城ニ付無御滯御着城被爲濟候御様子奉伺御國許に申上度段昨四日朝御留守居代として國部善之允儀左之御方様御旅館に參上伺勤仕候處三日夜六時半時過益御機嫌能被遊御着城候由御用人を以被仰聞候

板倉伊賀守様

十一月三日一橋慶喜政務補翼の辭表を奉呈す然も許されず

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

(十一月三日淺井新九郎報告書の末文)

一橋公先度被仰付候攝海御實備并大樹公御輔翼御斷被仰上候筈ニ而先日來閣老方事之外御配意昨日小笠原侯關白様は參殿御内々被仰談進茂御斷者被差出候付御所より御留ニ相成候筈ニ而今日御辭表御差出閣老御取次傳奏が關白様へ被達

慶應元年

三二七

候御書付を以傳議奏衆御願覽ニ而御留ニ相成候ハ、橋公御受ニ相成候筈之由會桑方承申候

〔諸雜御留守居録上〕

一左之書付十二月二日留局方被差出

十二月朔日御城方持歸り候書付寫

先月十日一橋に御政事御輔翼之儀被仰出候處今般公方様御下坂ニ付而者隔地之御職任自然御不行届之筋ニ付御輔翼御免被相願候處當御時節深く御配慮被遊候付猶御頼被遊候旨去ル三日御使松平伯耆守殿を以被仰遣候付御請被在之候事

十一月

十一月三日日本藩老臣小笠原美濃天機奉伺の特使として一條久我の兩家及び兩傳奏邸に出頭す

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

〔十一月三日〕

一美濃儀一條様久我様兩傳奏様に攝海に夷船渡來ニ付而 天氣御窺之御使者相動候事

〔全書〕

傳奏様之御口上

今般攝海に異船數艘致來泊不容易趣之由承知仕候付乍恐奉伺 天機度使者家老之者差上申候

細川越中守使者

家老 小 笠 原 美 濃

同道

御 留 守 名

十一月四日小笠原美濃飛鳥井邸に出頭して天機奉伺に對する御沙汰を拜受す

〔壬生御陣屋引移以後諸扣〕

寫

今般攝海に夷船渡來不容易形勢ニ付早速伺 天氣神妙之儀 御満足 思食親王御方准后御方伺御機嫌及御同様思召候

事

今日飛鳥井中納言様方 勅答被仰出候段依御達小笠原美濃殿同道參殿仕候處被召出別紙之趣一ト通御口上ニ而被

仰聞御直ニ御渡被成候御書付寫一通御達仕候以上

十一月四日

淺 井 新 九 郎

小笠原美濃殿

郡 夷 則 殿

十一月四日幕吏田沼意尊は佛國公使の忠告並に兵庫に代ふべき開港場の件及び征長始末に關する關東の意向を齎して上京の途に就く

〔京都自筆狀控〕

元治二年正月ヨリ

以手紙啓上仕候太守様上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悅候將又益御安泰被成御勤恐悅奉存候其後之御地方之御左右茂無御座官武如何之御運ニ可被爲在哉と奉存候然處田沼侯今日爰許御出帆ニ而其御地へ御出ニ付會津留守居柏崎才一も出立之由田沼侯初御出立之御趣意ハ別紙森井惣四郎書取之趣等言上旁ニ付尊所様に度一同得貴慮置申候ハ、御都合可宜哉と前條才八に申談せ差出申候此段爲可得貴慮如此御座候以上

十一月四日

井 上 加 左 衛 門

郡 夷 則 殿

猶以本文書取持參今書迄御用狀認方相濟候様申出忙敷相認申候間御推覺奉願候扣せ候間合も無之候間御便之節御國にハ御差廻奉願候已上

〔探 索 書〕

十一月四日江戸仕出ニ而來ル會藩柏崎才一上京之節也

聞取

一 今四日田沼玄蕃正様御船ニ而御上京ニ相成申候右者先日書上候佛國ミニストルカ申出候 將軍様無用之御滞在ニ必外  
カ御障申者可有之候ニ付猶又攝海に廻し右様 將軍様を相障候者を承糾一刻茂御征長相濟御歸城御座候様仕度無左之  
横濱之御應接何事も速ニ辨し不申候と彼カ申出候事ニ而御座候山第二ニ之兵庫ハ開不申方ニ相決申候へ共右代港を彼  
カ願出候付右之趣言上ニ而御座候由將又關東之御衆議も矢張佛人と同論征伐御歸城頻ニ御待ニ相成居候由右關東  
之御見込も言上之爲と申事ニ御座候

一 田沼様御上京ニ付會津柏崎才一も上京田沼様御趣意京都へ貫徹いたし候様周旋之儀度々御城カ御召出酒井大老始御頼  
ニ相成候へ共會津之論ハ征長之儀ハ根深此方カ申上候事ニ而今更右様之儀肥後守へ申込ニも不及申昨年来肥後守ハ連  
ニ御征長之説ニ而御座候間右之周旋ハ決し而入不申將又兵庫開不申方ニ相成候而も兵庫ニ而御渡ニ相成候御書付御取  
戻無之候而者京都ニ而矢張御不都合可有之右様之儀ニ而御上京御供者何分出來不申段再三御斷申上候へ共強而御頼ニ  
而此節柏崎も猶又早打ニ而上京仕申候

一 聖堂御取毀ニ相成候事當夏之比御座候而一旦相止居候處猶又相起り最早寄宿寮并諸生寮双方共ニ一人も無殘御拂ニ相  
成申候右ハ御作事と申事ニ御座候へ共其實ハ御廢しニ相成答ニ而御座候由儲ニ承申候

一 當十月廿四日又々水府森黨と鎮家之方廿四人召捕揚屋に入候由是又彼藩カ承申候

十一月四日

益 田 勇  
森 井 惣 四 郎

〔自筆御用狀扣〕

以手紙啓上仕候(中略)扱田沼侯今日御地に御出帆會留守居柏崎才一儀及早打ニ而今書迄ニ出立右田沼侯初御出立之御  
趣意ハ別冊森井惣四郎書取之通ニ而御自分様ニ茂一同得貴慮置申候方御都合可宜歟と相達候付則前條才一に申談せ進  
達申候以上

十一月四日

井 上 加 左 衛 門

郡 夷 則 殿

十一月七日幕府は旌旗を進めて長藩の罪を糺すべきを布告し從軍諸藩の部署を定む

〔大坂返達御用狀扣、長防再御追討一件、長防再征帳、尊攘録御建白御國議〕

一 筆令啓達候毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑之廉々有之候ニ付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川鉾三郎松野孫八郎  
藝州廣島表に被遣大膳末家並家老共之内且奇兵諸隊中之者も同所に呼出承糺之上模様ニ寄惣御人數被差向候間下之關  
口一之先之心得を以十二月十日限小倉表に致出張差圖相待可被申候尤爲軍目付算助兵衛被遣候間其段可被相心得候立  
花飛驒守小笠原左京大夫小笠原近江守小笠原幸松丸も其方同様被仰付候間可被得其意候且又攻口之刻合別紙之通被仰  
出候間可被得其意候此段可相達旨依上意如此候恐々謹言

十一月七日

慶 應 元 年

細川越中守殿  
右一通

藝州口討手

一之先

安藝守八人數差出

近江守者出張

安藝守に附屬

松平近江守

御中軍先鋒

井伊掃部頭

同(軍目付)

黒田五左衛門

割替(十一月十五日御

割替御達)

朝倉藤十郎

同斷

二之見二番

同(御中軍先鋒)

差圖次第出張

二之見

同(御中軍先鋒)

小笠原壹岐守

長行

板倉伊賀守

勝靜

掃部頭に附屬

井伊兵部少輔

榊原式部大輔

同(軍目付)

建部徳次郎

松平三河守

同(軍目付)

能勢惣右衛門

松平兵部大輔

同(軍目付)

柳生主税

大阪迄出張

二之見

人数ハ差圖次第出張

松平右近將監

同(軍目付)

三枝刑部

龜井隠岐守

同(軍目付)

石川八十郎

割替(御割替翌正月廿

八日御達)

長谷川久三郎

松平因幡守

同(軍目付)

城隼人

安藤左京

同(軍目付)

諏訪左源太

紀伊中納言殿

同(軍目付)

落合將監

應援

差圖次第出張

御免

田中一郎右衛門

松波恢太郎

同(軍目付)

長坂血鏡九郎

割替(十一月十五日御

割替御達)

黒田五左衛門

應援

差圖次第出張

御免

安藤左京

同(軍目付)

諏訪左源太

紀伊中納言殿

同(軍目付)

落合將監

一之先

石州路に出張

阿部主計頭

同(軍目付)

山岡十兵衛

先鋒惣督

御人数石州路に

被差出

慶應元年

上之關口討手

阿部進太郎

一之先

松平隱岐守

差圖次第出張

松平式部大輔  
同(軍目付)

御免 曾我權右衛門

割替(御割替翌正月廿

八日御達)

荒川鉄太郎

伊達遠江守

同(軍目付)

竹尾戸一郎

松平阿波守

同(軍目付)

小野小左衛門

奥平大膳大夫

同(軍目付)

森川主税

松平壹岐守

下之關口討手

同(軍目付)  
金田 靱負

一之先

細川越中守

小倉に出張

同(軍目付)

左京大夫者

御免 箕 助兵衛

人數差出

割替(十一月十五日御

割替之段御達)

長坂血鐘九郎

立花飛驒守

同(軍目付)

安藤治右衛門

小笠原左京大夫

同(軍目付)

松平左金吾

小笠原近江守

小笠原幸松丸  
同(軍目付)  
齋藤 國書

二之見

差圖次第出張

松平美濃守

同(軍目付)

小宮山又七郎

松平肥前守

同(軍目付)

酒井岩之助

中川修理大夫

同(軍目付)

小笠原彦大夫

松平主殿頭

萩口討手

同(軍目付)  
溝口官兵衛

一之先

松平修理大夫

同斷

同(軍目付)

二之見

大岡 鐵次郎

同斷

有馬中務大輔

御免 有馬 式部

梶 清三郎

右之通被仰付候尤松平安藝守松平右近將監龜井隱岐守小笠原左京大夫八人數而已差出銘々國邑相守居臨機之取計可致  
旨被仰出候事  
右一通(次に合符寫あれとも略す)

十一月七日幕府監察永井尚志戸川忠愛等大坂を發す

〔慶應元年丑年  
風聞書〕

十一月七日

大目付

永井主水

慶應元年

三三五

御目付

戸川 絆三郎  
松野 孫八郎

大坂表より藝州廣島に相越

一右三人出立之趣意之長州家老穴戸備後介廣島に相越居候ニ付今一應御糺問之上御所置之次第有之出立被致候尤來ル十月十日限り悔悟之義も無之候ハ、速ニ御人數御差向ニ可相成答ニ付彦根家高田家松山家人數大坂表より追々廣島に出立之事

十一月

十一月七日日本藩老臣小笠原美濃京都を發し翌日大坂城に登り將軍の起居を問ひて其使命を達す

〔慶應元年日記〕

十一月七日

一美濃殿上京之處御用相濟今日出立之事

〔大坂返達御用狀扣〕

十一月十日

同廿五日着

青地上田河口より

先月廿八日江戸被差立候御飛脚着今日大坂表被差立候付致啓上候、

一今度公方様臨時御入京之儀被遊御承知小笠原美濃被遊御差立候付御機嫌御伺御使者勤之儀被仰付越通奉長候於京地之

御下坂差向候付勤之儀之於大坂可奉伺趣板倉伊賀守様に御付答仕候通御座候美濃儀當月七日下坂仕候段申越候付御使

勤之伺並御暇之儀早ク被下置候様御内意別紙寫之通書付仕去六日伊賀守様に源右衛門持參御取次を以差上候處被成御落手候段右御取次を以被仰聞候

一伊賀守様より六日夕御呼出ニ付御留守居代として關部善之允差出候處御使者之伺書ニ明後八日大坂御城に罷出候様可仕旨御付札御用且即日御暇被下ニ而可有之旨御書取以御用人被成御渡候右寫差上申候

一右ニ付一昨八日朝美濃を源右衛門同道御城に罷出候處於檢之間替席御奏者内藤若狹守様に調御口上之紙別紙之振ニ申上相濟而退去仕後刻猶御同間に被召出候處御機嫌伺相濟候付勝手次第出立可致旨若狹守様より被仰渡諸事無滞相濟申候

但御老中様御出席可被成處此節御用多ク付本文之通御奏者様ニ而相濟候管之段之前日御坊主より傳達仕候右之通御座候恐々謹言

於大坂伺等之寫

板倉伊賀守様に

今度公方様臨時之御入京御事體萬端不容易趣之由越中守於國許承知仕候付奉伺御機嫌度使者家老小笠原美濃と申者差上申候不苦儀御座候ハ、於御城相勤候様仕度幾日差出可申哉此段奉伺候様申付越候以上

十一月六日

細川越中守家來

青地源右衛門

付札 即夕御留守居御呼出如左御付札御用以御用人御渡

明後八日大坂御城に罷出候様可仕候

別紙御機嫌伺之使者家老小笠原美濃儀於御城相勤候様被仰付候ハ、追而御暇も被下置ニ而可有御座哉と奉恐考候然處此御越中守國政之儀も多端ニ付美濃儀一日も早ク歸郷仕度内存ニ御座候甚以奉恐入候得共使者相勤候即日ニ茂御暇被

元年

三三七

下置候ハ、別而都合宜奉存候此段各様迄御内意奉願候以上

十一月六日

細川越中守家來

青地源右衛門

即夕御留守居御呼出左之通御書取御用人を以御渡

即日御暇被下ニ而可有之候事

御城に持參之御口上書寫

今度公方様臨時之御入京御事體萬端不容易趣之由承知仕候付奉伺御機嫌度使者差上申候

細川越中守使者

家老

小笠原美濃

〔全書〕

十一月十日河口より 同廿五日着

一昨日於御城板倉伊賀守様別段御逢御懇話有之大目付田澤對馬守様茂御逢有之由承申候以上

鈴木登編

〔肥後藩工上田久兵衛先生略傳並年譜〕

十一月七日

○小笠原大夫着、結髮、林と外出余中寺町ニ而田澤對馬守様行(日録) 原註

○於御城、小笠原美濃殿一同御老中板倉伊賀守様拜調被仰付、御用之筋共被仰聞候

一此節長防御征討ニ付而、此方様小倉え御出張之御達有之候得共、同年五月鶴崎佐賀關に御出張之儀、御伺濟之末ニ付

美濃殿藩坂中内意之趣有之、同十二日於御城、伊賀守様、壹岐守様御列席、拜調右之次第御内意申上候所、其御儀に御役々打變、何等之儀も御承知無之旨ニ而、早速鶴崎佐賀關え、御出張之儀、御達替ニ相成申候、畢而壹岐守様御一人御對話、極密之大事件共御尋有之、見込之筋十分申上候、尙又大御目附田澤對馬守様、小笠原攝津守様より豊後之地理海路之遠近揚陸場所等、其外軍機ニ關係候儀、見込之筋御尋有之候、右は其期ニ至、臨機之活用可有之段、御返答仕候(御奉行附)

○登城、田澤對州拜話、永井侯之信ヲ託ス、板倉關老へ美濃大夫一同拜調機密ヲ話ス

十一月八日前關老阿部正外領地奥州白川に歸着す

〔慶應元年北年、風聞書〕

十一月十四日

助御用番和泉守殿に阿部駿河守差出候書付

同姓豊後儀去ル八日在所白川表に到着謹慎罷在候旨申越候同人慎中ニ付此段私より御届申上候已上

十一月十四日

阿部駿河守

右翌日御持出し

十一月十日幕府は防長處置着手に際し更に京都の守衛を嚴ならしむ

〔壬生御陣屋引移以後諸扣、長州再御追討一件、長州再征帳、文久三年四月廿一日慶應元年十二月迄 京、大坂、鶴崎、長崎小倉懸御用狀控〕

(十一月十日松平越中守本藩留守居呼出公用人を以渡し)

細川越中守

長防御處置御取懸相成候ニ付一際御守衛向嚴重可相心得候

慶應元年

十一月

十一月十日田沼玄蕃頭兵庫の代港開放請願の要務を帯びて大坂に着す

〔自筆御用狀扣〕

以別紙申達候先月廿四日桑名之飛脚ニ被托候御狀同廿八日之御飛脚ニ御仕出之御狀且又會津留守居柏崎才一に被托候御狀追々ニ相違夫々致披見候會藩の澤村脩藏に内話之次第委曲被申越候通具ニ致承知淺井新九郎に茂申談之趣之先日來征長之御運付居御役人茂段々貶轉御登用も有之此際打混森吏處置等之事手を付ケ候ハ、却而激シ都合宜ル間敷候間右之事件ハ先寛ニいたし置候方可宜之咄合ニ有之候由成程薩之論ハ論ニ候得とも一躰之權衡左様ニハ被行申間敷會桑咄合之通ニ茂可有之此元ニ而も申談候事ニ御座候阿部松前兩侯御用相濟候迄御願ニ因而今迄之御屋敷々々ニ御着府ニ相成候由不容易嚴命を等閑ニ被致儀ハ幕議如何共解兼候次第ニ御座候兵庫開港御取戻右之代ニ外ニ一港御免之儀田沼侯御持參御登り之一件森井惣四郎書取茂御遺委細御申越之趣承知いたし候右書取執覽いたし御國に茂差廻申候田沼侯に差添之柏崎才一ハ陸地罷越去ル十日比着京無程大坂に罷下候由田沼侯ハ船ヲ御登り是茂十日ニ御着坂之處右之一件同候ハト通御承知位ニ而外一人之御役人熟知之處右之御役人船難遊ニ而上陸ニ相成未タ着坂無之着坂之上御相談ニ相成小笠原閣老御上京ニ而朝廷に御談判之管ニ相成居候由朝議如何成行可申哉兵庫ニ而夷人談判之次第等ハ猶更歎息之至ニ御座候(下略)

十一月十八日

井上 加左衛門 殿

三宅 藤右衛門  
那 夷 則

十一月某日元田八右衛門將軍辭職の風聞あるを以て此際朝暮の間に立ちて根本の革新に勉めんことを藩政府に建議す

〔尊攘錄上書類〕

謹而建言仕候今度將軍御辭職之變動ニ付而ハ急速ニ君上兩公子御馳せ登り御盡力之尊慮ニ被爲在候へ共先美濃殿被差登御國議之次第被仰立京地之模様ニ被應猶兩公子之御内御登京御盡力可被爲在との御廟議之旨奉敬服候然處此節之御變動者實ニ剝復之御運ニ而是迄之如クト通之御扶翼ニ而者御回陽之機可被爲在様無之然しなから御扶翼之道を被爲得候者亦是迄と違ひ却而御創業之御運を被開御機會と奉考候へハ今一層御廟議を被擬候而乍恐君上兩公子御中興之御誠意被爲立枝葉を被捨根本ニ御着眼被遊度奉存候惣し而天下之治安者賢材之登用ニ有之候事ハ萬古不易之論ニ而有之候處其根本ニ心目を注不申候へハ業賢舉り候而茂綱紀不立して却而紛亂を生し申候其根本と申者今日則主上之御聖徳を御尊奉被成候將軍家之御一心ニ有之候將軍家之御一心小ク御聰明なれハ小ク治り大ニ御聰明なれハ大ニ治る其驗誠ニ影響之如ク有之候間徳川氏之世ニあらん限りハ將軍家を被開而外ニ如何成御人傑被爲出候ても人心紛争致し候迄ニ而決して天下之治安ニハ至り難く候間天下一人ニ而茂公武之御合體天下之治安を欲し希ふ者ハ只務而將軍家を輔け奉らんと此根本ニ心目を注専ら力用度事ニ奉存候へハ御國議茲ニ相立御心目屹然と御居り被成只將軍家をして天下第一等之將軍家と仰き奉らんと御誠實ニ被爲思召入右根本之御實見御誠意相立左候而第一御側ニ大久保子之賢を御登用ニ相成將軍之左右前後皆正人君子ニあらざる事なく一言として御聰明被輔之路ニあらざる事無之様此根本ニ御盡力被爲在度奉存候古より天下之勢一なれハ治り二なれハ亂る是理勢之必然ニ而今將軍家之御一心御開明無之内ハ假令一橋公之御聰明有之候とも其御聰明御功迹相顯を候程天下之人心二ツニ分を決して一致ニ至り難く候此根本を輔け奉らも徒ニ事變之末ニ就救はんと致候故衆議紛々攘夷鎖國を唱候得ハ開國交易と云一橋公を稱賛致し候へハ春岳公を批判し列藩も各相分レ或ハ會桑或ハ薩或ハ因備天下之人才面々各々ニ而今日之勢人才之集り候程天下之紛擾甚しく 朝廷も御困窮ニ至らせられ候ゆへんニ御座候只將軍家御一心之御聰明即天下一致治安之根本ニ而御聰明を開

慶應元年

三四一



がせられ候ハ一橋公之御誠實ニ可有之と奉存候今一橋公後見職之御任全く周公之御忠誠を御體認可被成候ハ事業功名之末ニ者一切御眼を觸られも只御一心を以將軍家之御腹中ニ御注キ入レ其御聰明を被開候處ニ御心中を盡され其御求メ之切なる處より一毫御偏倚之私なく彼我是非之見を捨させられ有名之大久保子勝子板倉侯等之諸名賢を内外ニ御列舉ニ相成猶吐哺握髮之御心ニ而春岳公を初會桑薩肥東西有名之賢侯伯ニも御懷襟を開か天下之利害得失御尋問ニ相成公論正議一ツも野ニ遺ル處なく天下之善を集めて將軍家之御一心を御輔翼被成將軍家をして天下第一等之御聰明と被成度奉希望候太甲之中實も伊尹之輔佐ニ依而名主と被稱劉禪之暗弱も孔明之世ニ在間ハ庸君之聞ハ甚無之候ハ將軍家之御聰明ハ實ニ一橋公之御任と奉存候若徒ニ御一己之御聰明被頼列藩彼我之御私見を以御補佐被爲在候而將軍家御一心之御開明可被爲在様無之列藩も互ニ相争之私終ニ相止ミ中間敷況や今五大州并馳せて富強之御基業被爲建候時ニ當り右様之御狹隘ニ而皇國之御興隆ハ被爲出來間敷奉存候間御一己之御聰明を被爲捨天下之善を集めて御保翼被成との御誠心慨然と被爲在候ハ、天下列藩互ニ自らは是とし相争之念忽ニ氷釋し一人も將軍家を扶けさらん者無之天下之善悉ク一橋公之御腹中ニ集らん事御掌上ニ可有御坐奉存候君側之賢才ハ幕廷之人才多分可有之候ハ是迄令名聞へ不申候而ハ天下之人心急ニ一新致し難く候付天下人望之大久保子第一ニ御登用ニ相成候ハ天下之志士仁人翻然興起致し未タ令せらますして將軍家を保翼し奉らんとの人心歸向可致大久保子御登用之上ハ所謂茅之斯ニ拔ク如ク其類を以如何程之人才も集り可申候間賢才御登用中之第一御急務と奉存候勝子御登用之儀ハ海軍御興立迄ニ無之今天下之諸藩士志を抱而潜伏無頼之者斯人之用捨ニ依而死生を決し候程ニ候ハ速ニ御登用ニ相成候而天下無頼之志士を御總括被成浪士激徒も天下之御用ニ供せざる者無之との御大度此御一舉ニ相顯せ候而外國を御凌駕可被成之御勢忽ニ相立可申奉存候今度御周旋之御手初此根本之道理を以篤と一橋公に御盡言被爲在度閣老其他會桑越薩周旋之諸藩ニも公然と被仰談聊偏信隱結等之御私交無之正道を以一和之御運ヒ有之度奉存候方今京師之形勢會桑一橋公を輔け候而内ニ居御國茂共ニ御力を被合候而 天幕之御間御運者宜候處越薩肥筑因備等外ニ居而自ら間隔之勢と相成皇國中不正大之

形を顯し御國ニ於而も御偏信無之とも難申後來之利害得失是又豫メ御遠慮有御座度奉存候今度根本之道理を以正大之御周旋被爲在候ハ彼我是非之私見ハ斷然と御打捨被成假令權略智數之國ニ有之彼より智術を施し候とも聊御疑念無之正大之道を以御應酬可被成左候ハ、被終ニ正道ニ歸服不仕事ハ有之間敷候況や越ハ御近族之親薩ハ御隣交之義決而御疎意ニ被成間敷候先度兩公子御委任を以御上京之嗣ハ一毫御偏依之御交際無之天下列藩公平正大之御信義ニ感服仕たる儀ニ御坐候間右從來之御信義を以今度根本之御周旋被爲在候ハ當時御疎意之薩越等ハ先御使節を被差越公然たる御國議明白ニ御示談被成度奉存候如此御運ニ相成候ハ、天下一藩も御國を敵視する事不能御一國之御信義則幕府御一新之御基本ト可相成奉存候右様天下中興之御周旋被遊候ハ先御國之御誠意相立各其材を被盡一國一和ニ不被爲在候而ハ御信義徹底難仕候間乍恐君上之御一心只々將軍家を御輔翼可被遊との御誠意より一國ニ被撰而良公子ニ御委任被遊猶正大之御宏見ニ而彼我黨派之論を被捨置國ニ被撰而腹心脇股之人材を御登用被爲在度奉存候人才之儀ハ聖人既ニ拔茅之譬も有之各其黨類ニ依而幾黨類も舉ケ用ヒ諸黨之人材を集めて大成し其短を置キ其長を被用候儀人君之御大度ニ而爲天地濟國家之御目度より人材を被舉候ハ黨派之御嫌ハ無御坐候ものと奉存候況や方今天下興復御周旋之日ニ御當り被成候而ハ是迄之常論ハ丸ニ御打捨ニ相成四門を開而人材を被舉度人才盡く舉り一國無偏黨士氣振發仕候ハ、未タ御乗出し不被爲在内既ニ御一國之光焰他邦ニ相轟可申是則皇國御興隆之御基本と奉存候成收利鈍ハ天命之所致ニ而人力之豫メ期する處ニ無之候ハ共御國議之次第ハ天下後世御遺憾無之儀と奉存候恐々敬白

慶應元年乙丑十一月

元田八右衛門藤原永字判

十二月十二日在府本藩監察敷作右衛門は將軍進發在坂中江戸残留の幕吏因循の狀況を報す

〔維新關係重要文書集三〕

(籤作右衛門書狀)

慶應元年

三四三

十一月初度内密三地大主意同様

草案

拜呈仕候先月廿五日之御細書去ル六日相違悉々拜見仕候向寒之節御座候處彌御堅剛被成御勤務之旨奉拜祝候御地御靜謐之由此表御同然御座候ニ私儀碌々守株仕候乍慮外御休意可被下候先以將軍様にも先月廿七日御參内被爲濟去ル三日御下坂被爲在候由重學奉恐悅候京師之御都合も御宜敷如貴教此節者 朝暮御間隔茂相生不申漸々長防御取懸可被爲在 其内長州家老兩人追々出坂之由ニ付最早得登坂爲仕<sup>マ</sup>何卒悔悟願ふる申上ニ而御所置至當ニ出候様有御座度御供中段々役者替ニ而 庶議正平之御運ニ相成可申敷美濃殿に茂此節之動搖ニ付至急出京御座候而此方様 朝暮之御都合も彌以御宜敷可有御座取々恐悅候事ニ御座候然處此表征長御取懸之儀御一決ニ相成候付既田沼侯急速ニ上坂ニ相成候へ共全体大老閣老方尤因循ニ而此節大樹公万般 朝廷御遊奉のミ御座候而ハ實ニ幕威地ニ墮候様ニ相成候付最前通御東歸ニ相成辭職<sup>ト</sup>申ニ相成候ハ、迎も御再職者可被蒙 仰左候ハ、御權威彌廣大ニ相成可申抔論説も有之哉ニ相唱候由ニ而事實何程ニ御座候哉同様ニも當地論ハ大開國ニ付其眼着之論ト相見去ル御役方様之由噂ニ者當時之姿ニ成行候而者尙又夷船を今一應攝海ニ相廻京師を却不申候而ハ行不申抔<sup>ト</sup>發言之御方も爲有之哉ニ相唱慨歎ふる事ニ而々様之因循人氣ニ相成候而ハ迎も此節假令長州之儀速ニ御處置被爲濟候而も今兩三年之處ハ大樹公京攝之内ニ御滞在ニ而無御座候而者是迄之御配慮ハ一時ニ瓦解可仕敷何様此表ニ一刻茂閣老之内御下ニ相成奸吏難陟無御座候而者内よりして不容易患相醜可申敷<sup>ト</sup>被考申候前休近來過半御當地外國ヲ效ヒ風俗胡服ニ變化日市井徘徊其容體見ニ不忍事共ニ御座候將又水府之儀も追々得貴意候通ニ御座候處段々御取扱之御方も御座候而其儀相止ミ居申候處尙別紙之通板倉御奉職ニ相成候而奸黨之身上炎相來可申<sup>ト</sup>一時ニ別紙之通殘暴ふる仕形ニ而哀なる事共ニ御座候已下聖堂之儀一通荒増申達候事

十一月初度十一日立三地大廻

十一月十二日幕府は征長に際し三條實美等の守衛を嚴にすべきを令し且つ監督として小林甚六郎を派遣する旨を我藩に達す

〔大坂返達御用狀抑〕

十一月十三日 十一月廿五日着

青地上田河口より

〔前略〕

一板倉伊賀守様方昨十二日夕御呼出ニ付御留守居代として園部善之允差出候處云々御書付以御用人被成御渡候

細川 越中 守に

細川 越中 守

長防御所置之儀御取懸相成候ニ付而者兼而松平美濃守に御預被置候三條實美初五人之者共ゆるがせ之儀無之様先達而相達候通相心得猶此上人數等相増取締向精々行届候様可被致候尤右爲御取締御目付小林甚六郎筑前表に被差遣候間可被得其意候

十一月十二日幕府本藩上田久兵衛等の國事に盡力せし功勞を賞す

〔風聞書〕

十一月十二日

京都ニおゐて松平肥後守に呼出し申渡

松平土佐守家來

山田俊藏

慶應元年

三四五

御辨一口つゝ

細川越中守家來

上 田 久 兵 衛

右馬中務大輔家來

久 徳 與 十 郎

右兼々國事盡力有之候ニ付爲御褒美被下候

十一月

十一月十二日横濱駐在英國領事は關稅の事を在留英國人に達す

〔開成所おゐて横濱新聞紙寫取差上候控〕

〔慶應元年十一月十二日横濱開版〕  
〔日本新聞第十七號所載〕

左の趣當港の奉行より念の爲、通達有之

以來増運上差出ニ不及夫故運上所ニおゐて品物の見改も致さざる節ハ運送免許の御兼て定の如く相違なく念度運上相納む可き事

右在留英人等へ布告せしむる者也

一千八百六十五年十二月廿八日十二月十二日 神奈川領事館より於て日本在留英國領事官

マルキユス、フロウエルス

石 川 長 次 郎 譯

〔本文書の前文は十月七日條約勅許を外人に通報するの條に出つ〕

十一月十三日幕府本藩に對し防長處置の儀につき豊州鶴崎に出兵して指揮を待つべき旨を達す

〔長州再征帳〕

昨十二日於御城大坂也 御老中様御登人の拜調仕度段申上候處御内々被仰聞候議有之候趣ニ而伊賀守様登岐守様御列座被召出候付御内々奉伺候此節國許人數之小倉表に出張申議承知仕候其通御座候哉一休今度之豊後國鶴崎佐賀關兩所ニ出張仕度兼而伺茂相濟居候事ニ御座候處如何之御都合ニ有之哉申上候得之右伺之事ハ何とも御承知無之との御返答故段々御役々様御打替りニ付自然ハ左様之議も可被在職ト奉存候即此通ニ御座候當五月十日鳴海ニ而淺井新九郎方差出候御伺書翌十一日熱田ニ而松前伊豆守様より御差出之御付札寫入御覽候處不怪御仰天ニ相成ケ様之事様茂承知いたし不申甚不都合ニ相成候御右筆之方ニ之夫々記録可有之處付札ニまで成候之を打洩候而之如何ニ茂氣之毒との御挨拶ニ而段々御相談且見込之趣種々御尋有之私一己之存念逐一申上候處委細御承知ニ相成右間違之議ハ急ニ調査し相達可申との返答ニ付猶御達之御手数數ニハ彼是御手間も懸り可申急ニ國許之疑惑を解キ申度奉存候間鶴崎之方ニ御内決之段御直ニ伺取候趣申越候而宜御座候哉奉伺候處勿論其通申越不苦表立追而相達可申一刻も右之次第申遣候様被仰聞候其後大目付田澤對馬守様小笠原攝津守様御出席鶴崎佐賀關之模様下之關揚陸之場所等委細御尋ニ付地理海路之様子等申上揚陸之場所等之兎角敵之虚を討候様之謀略專要ニ而其期ニ到臨機應變之所置可有之兼而御取究決し而活用無之様ニ而之軍機を失し可申抔見込之趣委細申上引取申候事

十一月十三日

上 田 久 兵 衛

〔文久三年四月以來〕  
〔大坂返達御用狀扣〕

十一月十三日青地上田河口より 十一月廿五日着

〔前略〕

慶 應 元 年

一伊賀守様今十三日御呼出ニ付善之尤差出候處云々御書付御用人を以被成御渡候

細川 越中 守に  
細川 越中 守

長防御處置之儀ニ付今般小倉表に出張致し差圖相待可申旨相達候得共豊後國鶴崎に出張致し差圖相待罷在不苦候

〔長州再征帳〕

十一月十三日 御城出之里内壽司御小人目付菊地善九郎より手ニ入候書付寫

十一月十三日伊賀守殿御渡

大目 附  
御目 附に

立花 飛驒 守

長防御所置之議ニ付細川越中守其方同様小倉表に出張いたし指圖相待可申旨相達候得共豊後國鶴崎に出張いし差圖相待罷在不苦旨同人に相達候間可被得其意候

同文言

小笠原 左京 大夫

同

小笠原 近江 守

同

小笠原 幸松 丸

右之通相達候間可被得其意候事

十一月十四日羽州鶴岡藩主酒井左衛門尉は七月四日蝦夷地久春内に露人侵入の報ありし旨を幕府に申告す

〔慶應元年 風聞書〕

十一月十四日

助御用番和泉守殿に酒井左衛門尉より差出候届書

羽州庄内 鶴岡藩主

當年北蝦夷地爲御警衛富内領に差渡置候拙者家來共西蝦夷地領分最寄陣屋迄引揚之儀詰合役々に申達陣屋番相殘其余一同七月九日北地之内ヒロチに同十二日迄滞留之處富内詰定役野崎達右衛門より達書到來去ル四日久春内に魯西亞船壹艘渡來多人數乗組罷越未々應接模様不相分候得共專蠶食之見込ニ有之趣乗留之者申聞候旨申來り候付模様相分候迄滞留候様申越候依之一同富内に歸帆之處同十七日詰合調役葛山愼藏より去ル四日久春内に魯西亞軍艦渡來滞在人員相増不容易儀ニ付可致越年旨達有之候段彼地出張之者より申越候猶模様次第可申達候得共先此段御届申達候以上

十一月十四日

酒井 左衛門 尉

十一月十五日幕府我藩外二藩の征長軍々監を變更す

〔文久三年四月以來 大坂返達御用狀扣〕

十一月十六日 十二月五日着

青地 上田 下  
佐野 河口 下

(前略)

一板倉伊賀守様よ昨日御呼出ニ付御留守居代として關部善之允指出候處此方様に御附之軍御目付算助兵衛様御免代長坂血鎧九郎様に被仰付候段之御書付一通御用人を以被成御渡井伊掃部頭様脇坂淡路守様軍御目付御割替被仰付候付而之御書付も被成御渡候付差上申候(下略)

慶應元年